



住まいづくり・まちづくりNPO 活動報告2002/2003

—第10回「住まいとコミュニティづくり活動助成」報告書—

平成16年1月

■はじめに

本書は、「住まいとコミュニティづくり活動助成事業」における助成対象団体の2002年度の活動成果をとりまとめたものです。

この事業は、1992年にスタートさせて以来今回で10回を数え、この間、住まいづくり、コミュニティづくりに関連する120もの団体の活動に助成してまいりました。

今回も全国からの非常に多くの応募の中より選ばれた16団体が、1年間の助成期間中、活発に活動を行いました。

いずれの団体も、地域の課題に向けて、アイデアと工夫を駆使して取り組んだ様子が、本書をお読みなっていただければ、おわかりになると思います。

発行にあたり、本書のもととなる報告書を執筆していただいた16団体のメンバーの方々並びに助成事業の審査に当たられた選考委員の方々に厚く御礼申し上げます。

2004年1月

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

■助成団体活動紹介（活動レポート＆データ）

1. 当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして 当別町農村都市交流研究会	6
2. 地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」 建築と子供たちネットワーク仙台	16
3. グループホーム設立のための路上生活者実態調査活動 特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会	23
4. 『共生の暮らし』を目指すNPO相互の連携の場づくり 松陰コモンズ	30
5. 東日暮里での多世代・賃貸型コレクティブハウスの実現 特定非営利活動法人 コレクティブハウジング社	37
6. 佐渡島における空き民家の維持・活用に関する調査 佐渡住環境研究会	49
7. 市民の手作りによる町屋小路600mの黒堀建設と灯の祭 チーム黒堀プロジェクト	58
8. 街並み、コミュニティーを壊さない駐車スペースづくり やつお街並み研究会	66
9. エコハウス建設を通した新世紀の住まいと環境の提案 富士エコハウスプロジェクト	73
10. OLD & NEW 辻長蔵と憩の場の整備と活用 とよさとまちづくり委員会	82
11. 紫香楽・野焼きでいえをつくろう 「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会	89
12. 「ウォーリズ建築を活かしたコミュニティづくり」情報発信事業 特定非営利活動法人 ワォーリズ建築保存再生運動一粒の会	97
13. 野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成 釜ヶ崎居住COM	103
14. 淡路から全国へ向けてオープンガーデンネットワーク 特定非営利活動法人 アルファグリーンネット	112
15. 復興まちづくりから生まれるコミュニティスペースの創造 阪神淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション	120
16. 長崎にコーポラティブ住宅をつくる 長崎にコーポラティブ住宅をつくる会	129

■一年を振り返って

・風を求めて 大内朗子	138
・良い街、面白い活動 西野聖子	141
・「多様な主体の参加」に期待するところ 中村 裕	144
・コラボレーションとしての助成事業 吉野裕之	147

■参考資料

・公募内容	152
・助成対象団体一覧	154
・審査講評	155
・助成団体連絡先一覧	162

■助成団体活動紹介

(活動レポート&データ)

前半は各助成対象団体が執筆していただいた助成期間中の活動レポートを掲載しています。

ここでは助成対象団体自身が、自らの一年間の活動を振り返り、それぞれ「I. 活動の背景と目的」、「II. 活動の内容」、「III. 活動の効果及び今後の課題」の3つの項目に分けて執筆しています。

後半は、活動内容をもっとご理解いただけるように、その団体に関する活動データ（活動地域図や設立経緯、それまでの活動内容等）を、財団の職員が簡潔にまとめています。

なお、掲載している図版や写真は、団体から提供していただいたものですが、一部当財団の職員が撮影した写真も含まれます。

当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして

当別町農村都市交流研究会
(北海道当別町)



当別町金沢地区の里山のある風景



第1期田園型コーポラティブ
住宅1



第1期田園型コーポラティブ
住宅2

I. 活動の背景と目的

当別町は札幌から北に向い石狩川を渡り約25km、都市近郊といえる位置にありながら、いまだ豊かな自然の残る農村地域である。土地利用は石狩川北岸の低地に広がる農地と市街地ゾーン、里山ゾーン、山地ゾーンと4つのゾーンがあり、山地ゾーンは「道民の森」、「環境の村」など北海道庁が自然レクリエーションや環境学習の道内拠点と位置づけているエリアでもある。活動の主舞台となる当別町金沢地区の里山は、この山地ゾーンと市街地、農地の各ゾーンが交差するエリアであり、今後の当別町の地域づくりにおいてもっとも重要な場所となる。

1998年4月に、この重要な地域資源でありながら長く放置されていた里山環境の保全活用をめざして、当別町農村都市交流研究会が有機農家や地域リーダーにより結成された。活動は北海道移住応援ツアーの開催や、1999年3月には当別町のまちづくり助成支援も受けた地域づくりのワークショップ－文化は田園にあり－を行い、当初のメインの活動テーマであった里山活用の田園住宅プロジェクトは、1999年冬には最初の2家族の住宅完成移住があり、その後全国からの問い合わせも多くあり、田園居住に関する社会的な関心の高さを認識した。

また研究会メンバーの牧場において、バイオガスによる自然エネルギー活用実験や草地牛乳の生産等の地域づくりの環境的取り組みなども行ってきており、地域資源としての里山の環境を住だけでなく、農やエネルギー、環境などの面でも、総合的に活かしていく方法の開発をテーマとして掲げている。

II. 活動の内容

今回行った活動は、次の4つである。①優良田園住宅制度とリンクする田園型コーポラティブ住宅の事業の展開、②田園型コーポラティブ住宅の第2期プロジェクトのスタート、③里山活用ワークショップの開催、④地域の環境認識や問題を考える勉強会等の開催

2-1. 優良田園住宅制度とリンクする田園型コーポラティブ住宅の事業の展開－当別町の優良田園住宅の基本方針づくりと金沢地区指定に向けて－

優良田園住宅制度は農地においても都市住民が土地を取得して、住宅をつくることが可能になる法律である。そのため自治

体が地域指定する必要がある。当別町では、研究会が行った田園型コーポラティブ住宅のパイロット的な事業の展開で、田園住宅の意義や環境づくりの重要性が理解されるようになり、町レベルでの地域指定がようやく検討課題となってきた。

行政との協働による当別町の優良田園住宅の基本方針づくりと金沢地区指定に向けての作業は、2002年7月に検討委員会を開くことができた。その後、優良田園住宅を含めた金沢地区的地域像などの全体構想づくりの検討に8月～11月の時間を費やした。全体構想の絵姿と主要プロジェクトの実施方法が見えてきたことで、いよいよ具体的な優良田園住宅の基本方針づくりに着手することになった。合わせて町内部の推進体制づくりも進み、12月に町の担当部局との合同の委員会を開催し、実施案をつめていくことになった。その後は町内部での調整等の作業になり、2003年の6月頃までには、基本方針の策定が終わり、金沢地区などの具体的対象地区の指定も行われる予定となつた。

2-2. 田園型コーポラティブ住宅の第2期プロジェクトのスタート

田園型コーポラティブ住宅の第1期プロジェクトは、2002年10月に山裾に5軒建設した第1期プロジェクトが完成し、いよいよ本格的な第2期プロジェクトのスタートをめざすこととなった。しかしこれは当初予定よりは少し遅れ気味の事業になっている。その原因は、土地の確保の問題である。第2期プロジェクトは、農地の転用も含めた優良田園住宅制度を活用した、本格的な田園住宅づくりを予定していたが、上記の町との優良田園住宅の基本方針づくりが半年～1年ほど遅れて、なかなか候補となる土地（今年は非農地が対象）が手当できなかつたからである。

募集活動は当初4月に予定していたが、実際は10月開催になった。2カ所の土地が確保できて、10月10日の土地見学会には10家族集まり、関心の高さが伺えた。その候補者の中から、来年度には1,2のプロジェクトが始動するであろうし、秋以降においては、優良田園住宅法に基づく、田園住宅づくりも着手できると考えている。

2-3. 里山活用ワークショップ

当別の里山は南に平坦な農地、後ろになだらかな丘陵を背負ったひだの多い山裾の部分にあたる。針葉樹、ナラやカエデなどの広葉樹の林と、畑に使える平坦部と点在するため池。自然豊かでありながら人間の手が入ることにより親和性をさらに高めることのできる環境づくりを考えるワークショップを9月14日に開催した。役場、研究会、地区住民、当別町民、札幌からなど約30名参加があった。

旭川の里山で先駆的に蹄耕法による草地づくりを行ってきた



ワークショップ「21世紀型里山づくりをめざして」



懇親会「当別産品を味わおう」

斎藤晶氏の講演会と里山活用アイディアワークショップを開き、里山と森を拓く環境づくりの具体化を模索し始めた。このワークショップは1998年に行った当別町ワークショップ－文化は田園にあり－の続編になり、実際田園住宅づくりのプロジェクトが進んだなかで、今後の当別町の地域づくりの方向、都市と田園交流のあり方の展開が語られるワークショップになった。



斎藤晶氏講演「牛が開く牧場」

2-4. 地域の環境認識や問題を考える勉強会等の開催

2002年は合わせて、当別での環境NPOの立ち上げ（特定非営利活動法人当別エコロジカルコミュニティ）と当別川でのワークショップの開催（7月）、里地ネットワークの講演会（9月）、エネルギー問題の勉強会（11月）など、研究会メンバーの環境問題への関心拡大と、里山環境の再生保全の更なる展開に向けて一歩を踏み出した。

III. 活動の効果及び今後の課題

今回の活動の成果はなによりも、今まで直感的に行ってきた当別町での里山活用のアイディアを、住から農、環境まで総合的かつ戦略的に活用・保全していく大きな背骨にあたる基本方針を確立したことがある。具体的なその内容と今後の課題も含めて述べると以下のポイントになる。

3-1. 里山活用のワークショップから里山自然公園化プロジェクトへ

里山活用のワークショップは今回、旭川の斎藤晶氏をゲストとしてお呼びし、動物の力を活用した蹄耕法による里山の草地づくりの方法を学ぶことができた。この里山活用のワークショップはインパクトは大きかった。このワークショップとともに、当別金沢地区の里山活用について、研究会のワーキンググループは熱中して作業に取り組み、2003年1月に「当別金沢・里山園づくり構想」をまとめた。

里地里山の環境とは、野焼き、薪等の採取といったように、人間が生活のために利用し適度な攪乱をもたらすことで成り立ち、日本人の暮らしと環境観の基盤となってきた生態系である。しかし明治、特に昭和30年代以降、エネルギー利用の変化等により、暮らしの中の里山と生業との関わりが失われ、里山環境は大きく変貌した。現在日本のRDB種（注）の5割が、この放棄され生態系が変わった里山の中に生息すると言われる。今後里山環境の生態系を回復し、再生していくには市民の環境学習や農林業体験などの取組が一層重要になるが、国土の25%を占めると言われる広大な里山の再生にはボランティア的取り組みだけでは明らかに限界がある。新たな方法論が求められており、今回の里山ワークショップを契機に発見したテーマは3

（注）：RDB種

RDB = レッド・データ・ブックの略
絶滅した、もしくは絶滅しそうな生物をリストにしたもの

つある。

①里山の活用と環境的多様性の回復の視点、②公共事業という方法を使わない里山の活用・保全の仕組みづくり、③里山の環境再生を家畜の力を使って行うという手法の展開、の3つである。今後、当別農村都市交流研究会が活動の方針とする「牛が拓く」里山自然公園づくりとは聞き慣れない言葉と思うが、「蹄耕法」という牧畜の原点に立つ技術を用い、里山林を残しつつ草地を育成し、生業とのかかわりをもった里山の環境的多様性を回復し、家畜の放牧と市民的利用の共存可能な緑地環境の創成を行うプロジェクトである。

その具体的な内容は、

(1) 「牛が拓く」里山自然公園・実施デザインづくり

当別町金沢地区の町有林（約500ha）を活用し、林地に不適切な場所を蹄耕法（牛や羊の蹄が地を耕し草地を育成する方法）を用い草地を育成する実施計画づくりを進める。蹄耕法の先駆的実践者を旭川から招き、現地調査を行い、保存林と牧区の設定、環境デザイン、飼育頭数、放牧期間、草地育成の手法、事業スケジュールと費用概算、管理の方法などの実施デザインを検討したい。

(2) 「牛が拓く」里山自然公園・試験プロジェクトの実施

2003年の春から夏期期間に、町有林の一部を活用し、試験プロジェクトとして、牧柵の設置と実験草地化と放牧を行い、事業化の課題を検討する。（すでに町役場と町有林の活用について折衝し、基本方向で承認をえている）

(3) 里山活用環境学習ワークショップの開催

春と秋に親子参加の環境教育プログラム（自然観察や環境調査、遊歩道づくり、暖房用の薪づくり、山菜ときのことり）ワークショップを行い、当別の里山環境体験活動を行い、合わせて家畜監視小屋として活用する、ストローベイルハウス（藁ブロック活用の建物）のモデルエコハウスをアメリカの技術者とも交流しながら、ワークショップ形式でつくりあげる。里山活用環境学習ワークショップはNPO法人当別エコロジカルコミュニティ（TEC）と協力して行う。

プロジェクトはすでに当別町長、北海道庁などの関係者の了解活動も行っており、この里山公園化プロジェクトのパイロットプランを順調にティクオフさせ、今後10～15年で数百haの大自然公園を、有機的手法によってつくりあげたいと考えている。

3-2. テーマコミュニティ型の田園住宅づくり

今後の田園住宅づくりは、単なる里山の住宅地としてだけではなく、さらに発展形として、金沢や当別の地域特性や農業の特



当別金沢地区の里山内の遊歩道



ワークショップ風景



第2期田園型コーポラティブ住宅
1



第2期田園型コーポラティブ
住宅2

产品とも連携し、以下のようなテーマ型のコミュニティづくりもめざすものとしたい。

「花とガーデニング田園住宅コミュニティ」

花とガーデニングをテーマにした庭や街並みづくりをめざす
コミュニティ

「パーマカルチャーコミュニティ」

有機的な資源環境循環をめざすエコロジー重視のコミュニ
ティ

「マイミルクコミュニティ」

自家ミルク生産消費のコミュニティ

「マイホースコミュニティ」

馬好きをテーマにしたコミュニティ

「マイエッグコミュニティ」

自家卵生産消費のコミュニティ

「マイファームプロダクトコミュニティ」

特色ある農產品加工販売のコミュニティ

3-3. 「石狩川・田園・里山・森」づくりへの展開

われわれ当別町農村都市交流研究会の活動は、金沢地区の里山を主な活動領域に

- ・里山の山裾に立地する「コーポラティブ型の田園住宅づくり」
- ・里山の町有林を再生活用をめざした「牛が拓く自然公園づくり」
- ・南側の田園地帯と交流拠点の新規就農「交流による元気のある農村づくり」

などの里山田園つくりを目標に進めているが、もうひとつ踏み込んで、当別町の母なる存在である石狩川、当別川と、田園と里山と森（道民の森、環境の村）という、川から山までの連続する環境要素をいかした当別町の有機的でかつ環境保全活用型の地域づくりをめざす取り組みに広げていこうという発想も生まれてきている。

札幌から1時間の距離でありながら、都市近郊のスプロールした風景とは明らかに異なる農村風景を残す町、当別町。この風景が保たれている背景には石狩川の存在がなによりも大きい。名著「石狩川」の著者・本庄陸男の生誕地でもある当別町において、石狩川の存在をあらためて問い合わせし、最大の地域資源でありながら、普段の生活では「見えなくなりつつある川」、「分断要素としての川」の積極的な意味を地域の生活環境調査を通して明らかにしていく。町民参加のワークショップなども行い、里山環境の活用活動とも連携し、川と田園と里山と森（道民の森、環境の村）という、川から山までの連続する環境要素をいかした当別町の地域づくり構想実現に向けて、第一歩を踏み出したいと考えている。

<団体活動データ>

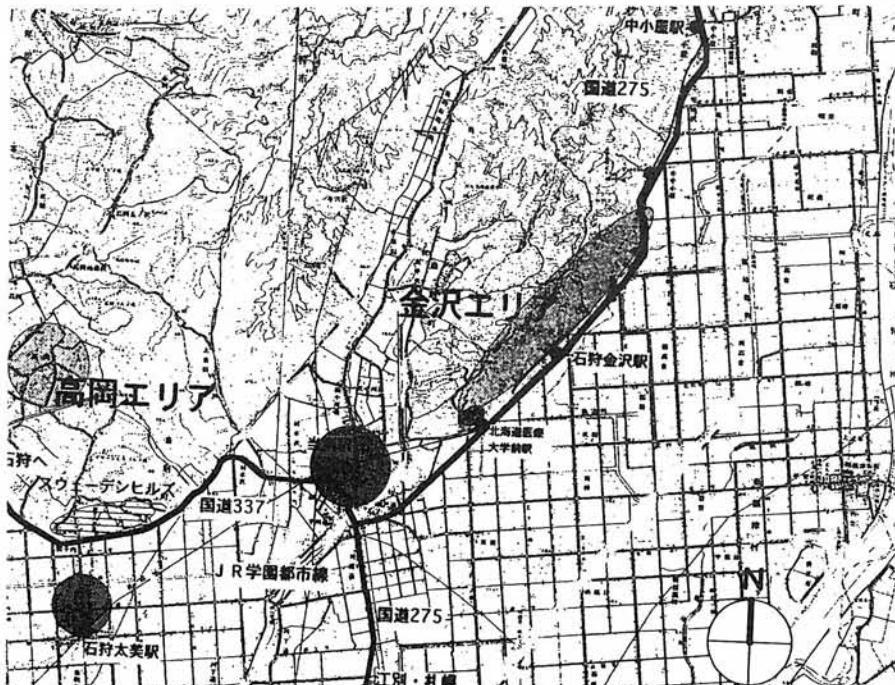
■当別町農村都市交流研究会

活動テーマ	当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして
活動目的	北海道当別町における里山の自然を活かした豊かで魅力あるコミュニティづくりをめざす。里山を舞台に田園型コーポラティブ住宅の建設と、里山を活かした都市近郊農村の地域共生型開発モデルを開発。
設立年月	1998年4月
代表者名	小谷栄二
活動地域	北海道当別町金沢地区
メンバー	11名 農業資材販売、建設業、建築家、住職、農産物加工、養鶏業等

●団体設立の経緯

札幌市北区のあいの里でコーポラティブ住宅をつくった時に知り合った、建設業社長や建築家、当別の農業資産販売業のメンバーが、地元でもある当別町で、地域資源を活かした都市住民を誘致する田園型コーポラティブをつくろうと話したのがきっかけ。地元で農業を営む人にも声をかけ、研究会を設立した。

活動地域図



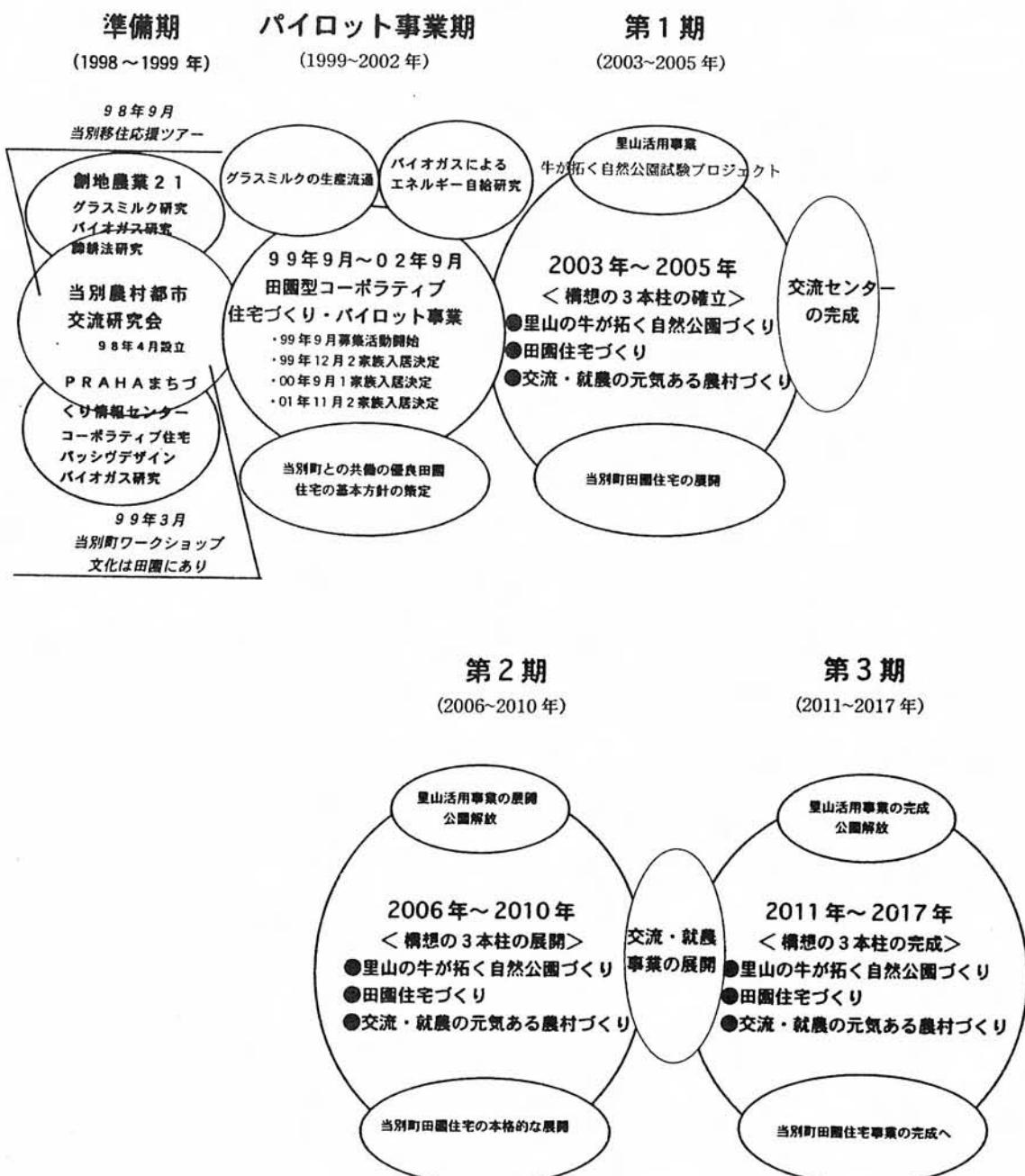
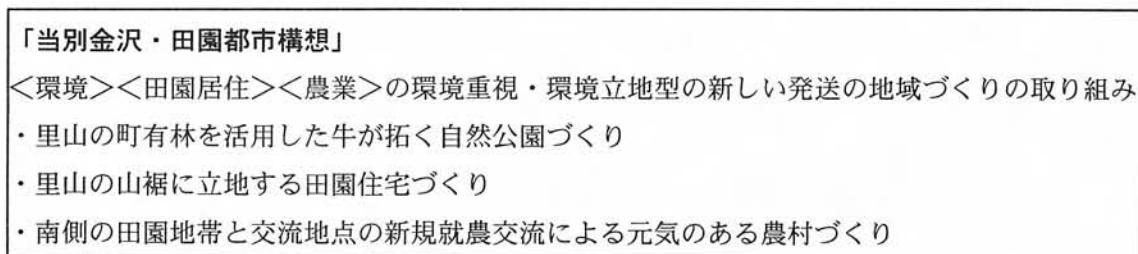
舞台となる当別金沢地区は石狩川を渡り、北に向かい約25km、都市近郊といえる位置ながら、自然豊かな里山の残る田園地域である。自然の中で土や林にふれながらの暮らししが可能となる環境は、居住の場として魅力的だし、都市への通勤も可能な距離の位置にある。

当別の魅力はさらに、酪農、花、有機農業、卵、など農的暮らしの分野で活躍する地域の人材に恵まれていることである。

地形的特徴も石狩川の北岸に広がる農地ゾーン、丘陵端部に位置する里山ゾーン、山地の自然環境ゾーンと、求められる農と暮らしの地域づくりを進めていくうえで、土地利用の構造が明快だ。

●活動の全体像

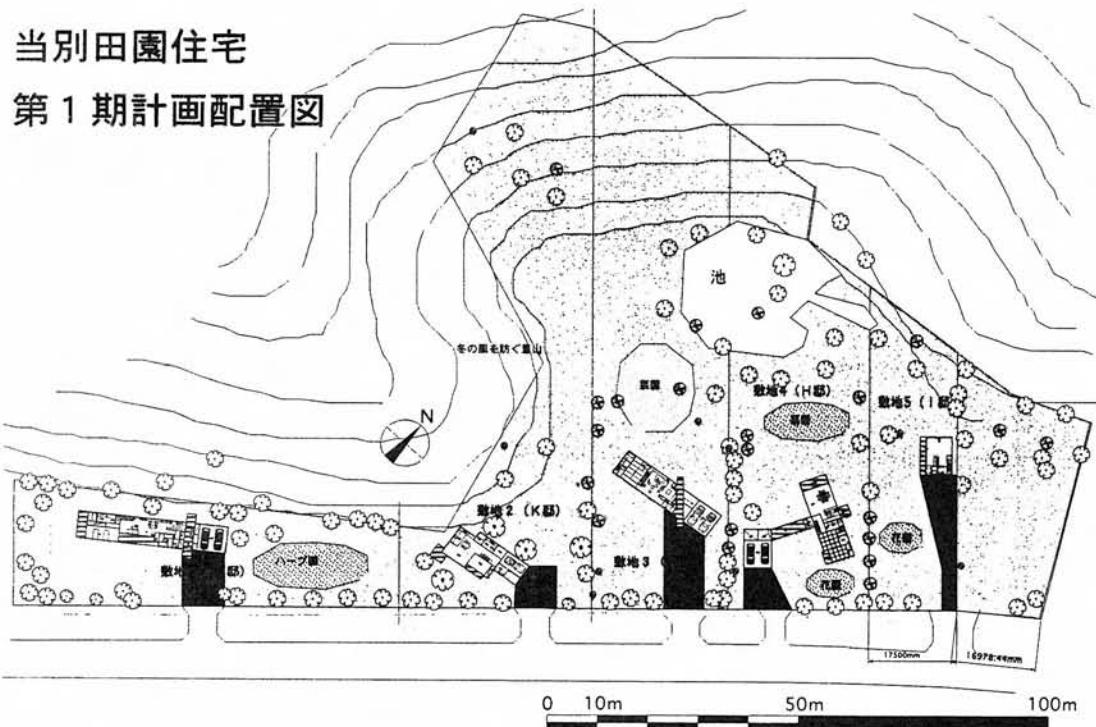
田園型コープラティブ住宅を先行的に進めつつ、「当別金沢・田園都市構想」を掲げ、メンバーの職能を活かし、住宅づくり、里山の自然公園化、元気ある農村づくりを展開しようとしている。



●これまでの活動

金沢地区において、コーポラティブ方式で5戸の住宅建設を行った。応募者にあらかじめ地域を知つてもらうために、研究会メンバーによる説明や紹介を行つた。入居世帯決定後は、入居者が集まるイベントやワークショップを開催するなど、計画づくり及びコミュニティづくりを支援した。

- 1998年 土地候補探し、同年9月移住希望者を募るために当別移住子応援ツアーオンライン開催
- 1999年 プロジェクトのアピールのために、「当別町ワークショップ文化は田園にあり」開催
10月募集パンフレット開催。参加者のヒヤリングを3回開催。
- 2000年 2月、2世帯決定着工。3月、1世帯決定着工
- 2001年 1月 2世帯決定着工



●助成対象活動

第1期のコーポラティブ住宅が終了し、別の土地に第2期のコーポラティブ住宅の募集を始めた。また、里山を活用したプロジェクトをスタートさせ、環境問題への関心の拡大に向けて地元との環境NPOと協働したワークショップを開催した。

・コーポラティブ住宅の第2期プロジェクトのスタート

当別町の元中学校跡地を、メンバーの建設会社が購入し、そこを敷地に全5世帯の住宅を建設予定。2002年10月に、土地見学会の開催。入居の募集を行つた。

・里山活用ワークショップ

2002年10月に「当別里山ワークショップ」を開催。参加者30名

旭川で、蹄耕法と呼ばれる草地づくりを行っている斎藤晶氏の講演会と、里山活用アイデアワークショップを開く。

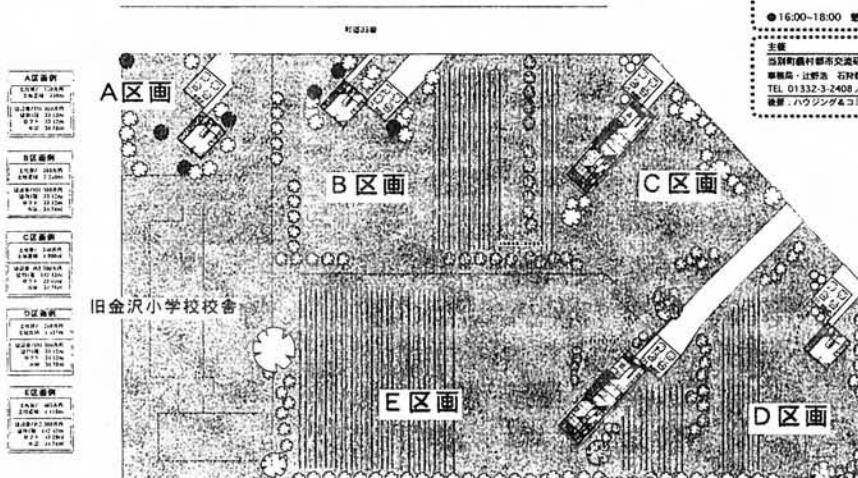
・里山環境学習ワークショップ

当別町で立ち上がった環境NPO「当別エコロジカルコミュニティ」と協力して行った

2002年7月 当別川ワークショップ

9月 里地ネットワーク講演会

11月 エネルギー問題勉強



当別田園住宅第2期計画敷地

●これからの活動

・第2期の住宅づくりの完成

・「牛が拓く」里山自然公園・実施デザインづくり

当別町金沢地区の町有林（約500ha）を活用し、蹄耕法を用いた公園づくりの実施デザインづくり。

・里山公園化実験プロジェクトの実施

2003年に、町有林の一部を蹄耕法を用いた草地化実験を行い、事業化の検討を行う。

・里山活用環境学習ワークショップの開催

春と秋に親子参加の環境学習ワークショップを行い、あわせて家畜監視小屋として活用するストローベイルハウスのモデルハウスをワークショップでつくる。

地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」

建築と子供たちネットワーク仙台
(宮城県仙台市)



佐大ギャラリーの前にて



堤町まちかど博物館の案内

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

建築と子供たちネットワーク仙台（以下ネットワーク仙台）は住環境学習を通して子供たちの創造性を育むための活動を実践しているN P Oで、アメリカで開発された総合学習のカリキュラム「建築と子供たち」や「シティ・ビルディング・エデュケイション」を参考にした独自の住環境教育のためのプログラムを開発し、これまでに一般向けのワークショップ・シンポジウムや仙台市科学館での企画展示、学校と協力した環境学習授業を多数行い、住環境学習を通して子供たちの創造性を育むための活動を実践してきた。

その一環として1995年から市民センターで親子ワークショップを続けていたが、1997年のワークショップでの出会いをきっかけに、以前は焼き物のまちとして栄えた仙台市中心市街地北部の堤町にたった一つ残っていた六連の登り窯が壊されそうになっていることを知り、それを地域の資源としてまちかど博物館として再生し、子どもたちや地域の人々の地域学習・体験学習の場とする活動を進めていた。

幸運にも2001年度のハウジングアンドコミュニティ財団の助成を受けることができ、登り窯に隣接する作業場の2階を整備してギャラリーとして地域に公開することができた。当初ギャラリーは期間限定の予定だったが、訪れる人からの評判がよく、是非続けて欲しいとの要望が多かったため、その声を大事にしながら所有者である窯元とも話し合って、更なる内容の充実を目指すこととなった。

1-2. 目的

当初ギャラリーは期間限定で考えていたため、展示品にキャプションをつけるなどの作業が完成しないままになっていた。それらを充実させ、地域学習に使うに耐えうるものとすることと、また窯の方も整備して、堤焼の体験学習ができるように整備し、地域の人の交流の場としても利用されるようにすることが今回の目的である。

II. 活動の内容

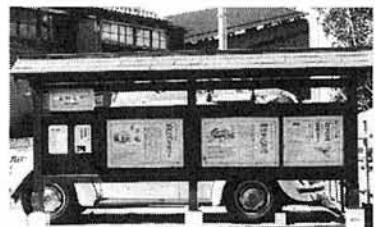
2-1. ギャラリーの整備

ギャラリーの開館継続が決まったため、更に内容を深めリ

ピーターにも楽しめるように、ネットワーク仙台のメンバーが中心となって展示品を整理したりキャプションをつけるなどの作業を行った。

2-2. 御仲下改所（おすあいどころ）記念板の設置

御仲下改所そのものは老朽化のため取り壊されてしまったが、解体作業の時、そこに使われていた柱や梁などの部材を一部保存していたので、それを製材して跡地に佐大ギャラリーと御仲下改所の説明書を取り付けるための記念板（高さ1.6m、幅3.6m）を設置した。記念板は往時の御仲下改所に似せた銅版葺きの屋根をかけたデザインにしてある。



御仲下改所 記念板

2-3. 登り窯の修復

一部土が崩れ、レンガの骨組みが露出していた登り窯を、冬と春の2回のワークショップにより修復した。土・スサ入りの粘土・耐火モルタルなどを準備し、粘土をこねる、土を塗るなどの作業をネットワーク仙台のメンバーが中心となって行った。



修復した登り窯

2-4. 体験用窯の新設

住宅地の中にあるという現在の状況から、登り窯に火を入れることは難しいものの、まちかど博物館に多くの人が訪れるに従って、「ここで堤焼の体験をしてみたい」という声が多く聞かれるようになっていた。そこで登り窯の近くにある松根窯に似せた一つ窯を作ることは可能であるという窯元の判断を受け、体験用の窯を新設することにした。登り窯の修復と合わせ、ワークショップによって内径50cm×60cm、高さ1m、アーチ型の焼き口がついた窯を完成させた。



体験用窯

2-5. 暖簾の整備

前回の助成で佐大ギャラリーの入り口に櫻の看板を取り付けたが、更に今回はギャラリー1階部分にある佐大商店と隣接する堤人形販売所・つつみのおひなっこやにお揃いの暖簾を掛けることにした。紺地に白く屋号を染め抜いた暖簾を作ったが、屋号がそれぞれ「ヤマ大」「ヤマ吉」だったため、偶然とはいえる通りからみると二つの暖簾は「大吉」と並んで見えることになった。

2-6. 堤焼づくりワークショップ

新設した体験窯に火を入れるために、堤人形作家・佐藤吉夫氏の指導の下、型抜きの人形や生活陶器を作るワークショップを行った。粘土は現在の堤人形と同じ物を用意してもらい、実際に作られている人形と同じ型を使わせてもらうことになった。この日使われた型の中には、市の有形文化財指定を受けることが決まり、この日を最後に触れることもできなくなるという貴

重な江戸時代のものもあった。また近くの小学校の5年生が総合的な学習の一環として堤焼のことを学習しており、泥メンコなどを制作することになっていたことから、それらも合わせて一緒に焼くことにした。

2-7. 説明板の取り付け

以前設置した記念板に佐大ギャラリーと御仲下改所の説明板を取り付けた。説明版は杉板にレーザーで絵や文字を焼き込んで制作された。



佐大商店(右)と堤人形販売所(左)
暖簾が「大」吉」と並んだ



堤焼きづくりワークショップ



佐大ギャラリーと御仲改所の
説明板

2-8. 新設した体験窯への火入れ式

ワークショップで制作した作品、子どもたちの作品、人形作家の作品は、それぞれ10日間ほど天火で乾燥させた後、一緒に窯の中に入れられて素焼きされた。焼き上がりには、温度管理と自然冷却などで丸一日かかることから、窯入れと焼き上げを前日に佐藤吉夫氏にお願いし、それを取り出すところを子どもたちが行うことで火入れ式とした。子どもたちや地域の方、ネットワーク仙台のメンバーら約50人の参加者と多くのマスコミが見守る中、佐藤達夫氏と子どもの代表の手によって窯の蓋が開けられ、窯から取り出された作品は、一つ一つ子どもたちの手渡しで大事に台へと並べられ、肅々とした中にも喜びにあふれた火入れ式となった。

III. 活動の効果及び今後の課題

今回の活動によって、地域は窯の火とともに消え去り、人々の記憶からも忘れ去られようとしていた堤町の堤焼が、まちにとってどういうものだったのか、そして便利な生活を追い求めるための都市開発と、歴史を守ることの意味とそれらのバランスについて、改めて意識するようになっていった。それはつまり自分たちの住む環境について、どういうまちに住みたいのか、何を守りたいのかを考えることでもあった。現在では、また焼き物が始まったという噂を聞きつけた地域の人々、特に高齢者がギャラリーに集まるようになっているという。焼き物の歴史と技術を大事に思いながらも、自分とともに消えてしまうだろうと諦めてもいた窯元の陶工は、まちかど博物館として自分の想いとコレクションが一般の人に公開されたことによって広く受け入れられてその価値を認められ、大事にされるに値するということを知り、館長としての新たな生きがいを見いだして生き活きとするようになった。その様子がまた地域の人をギャラリーに集める魅力の一つとなり、子どもから高齢者に至るまで様々な人が集まるという賑わいを見せている。

次の段階として、N P O (専門家集団) + 地域 + まちづくり行政の連携によるまち学習を展開することで、子ども・大人・地域のそれぞれを活性化させる可能性を求める。今後は「堤町

まちかど博物館」を核とする「地域体験学習センター」として整備し、子どもたちをはじめ、地域住民、市民に堤町の歴史と文化そして歴史的資源の保全の大切さに触れてもらいたいながら、よりよい住環境を考えてもらう場として、更に整備していくたいという構想を持ち始めている。例えば、体験窯を使った焼き物ワークショップや、焼いた堤焼を利用して造形・音楽・自然・歴史・まちづくりなどが融合した総合芸術ワークショップを行う計画があり、それに向けて準備を始めているところである。例えば堤町の歴史を調べた紙芝居を作り、堤焼で笛や打楽器を作ってその紙芝居に合わせた音楽を作曲して演奏し、堤焼の茶碗でお茶を飲みながらその上演を見せるということを、大人も子どもも一緒にやって行けば、いろいろな人がそれぞれの得意分野でまちに関わりを見出すことができ、それによってまちづくりは一時のイベントで終わるのではなく、地域の人の手によって持続されていくのではないかと考えられる。



窯のふたを開けた瞬間



作品を手渡しで運ぶ



できあがった作品を囲んで

<団体活動データ>

■建築と子どもたちネットワーク仙台

活動テーマ	地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」
活動目的	子供・地域住民・市民など多くの人々が、地域の歴史的な資源の大切さを認識し、よりよい住環境を考えていけるよう、「堤町まちかど博物館」を地域体験学習センターとして機能させる。
設立年月	1993年4月
代表者名	細田 洋子
活動地域	仙台市青葉区堤町
メンバー	45名 大学関係者、建築家及び公務員、対象地域の住民(37名)

●団体設立の経緯

アメリカで開発された建築や都市を題材にした総合的学習法である「建築と子どもたち」に基づき、そのカリキュラムを用いた住環境教育等のプログラムを開発し実践普及することを目的に1993年4月に設立。

仙台のほか、東京、千葉、新潟に支部があり、情報交換等の交流を行っている。

● 活動地域図



青葉区堤町は仙台市の北部にあたり、人口約4,000人弱の町である。仙台城下北部の警固のため配置された足軽集の町で、その後足軽の内職としてはじまった堤焼や堤人形により焼き物の町として知られるようになった。町名は町の南に流れる梅田川を堰止めた大きな堤があったことに由来する。奥州街道沿いの堤町は仙台城下の北の玄関口として栄え、江戸時代には御仲下改所（おすあいどころ）が置かれ、城下に持ち込まれる商品から関税を徴収していた。

●これまでの活動

「建築と子供たち」に基づき独自の住環境教育プログラムを開発し、これをもとに、設立以来学校と協力した環境学習授業や国際交流を目的としたワークショップ・シンポジウム等を実施している。2001年度の当助成事業により「建築と子供たちワークショップ2001」を開催した。子どもたちが、ポラロイドカメラを片手に「堤町まちたんけん」を行い、町をかたちづくっているものを観察し、それを記録した。その際、今回の助成事業の活動拠点となっている佐大窯（仙台に唯一残る6連の登り窯）と「堤町まちかど博物館－堤焼佐大ギャラリー」が大きな反響をよび、ワークショップ後も地域住民の見学が絶えなかった。そこで、堤町まちかど博物館を子どものための地域体験学習の拠点と資するとともに、訪れたすべての人に町の歴史と文化、歴史的資源の保全の大切さを実感してもらう場として活用することとなった。2001年度の活動の成果が2002年度の継続助成へつながった。



登り窯を利用したパネル展



人形作家の指導で行われた堤人形制作ワークショップ



まち探検後感想を記録する子どもたち



まち探検の感想を発表する子どもたち



未来のまちの模型を作り終えて



米国ニューメキシコ州の小学生とのテレビ会議

●助成対象活動

・佐大ギャラリー工房の整備

御仲下改所の記念板の製作・設置、人形展示室の分類作業、ギャラリー展示室のキャプションボードと人形キャプションの製作、暖簾の取り付け等

・松根窯修復ワークショップ、体験用窯の新設

当初予定していた松根窯現地復元が不可能となり、佐大ギャラリー内に松根窯を復元した体験窯を作った。

・堤焼づくりワークショップ

地域の小学5年生80名が体験用窯で型抜き人形、生活陶器等の焼き物づくりを行った。また、小学生以外にも地域住民が参加して、窯出しを行った。



登り窯修復ワークショップ

●これからの予定

体験窯を使った焼き物ワークショップ及びそこでつくった堤焼を利用した総合芸術ワークショップ等を行い、「堤まちかど博物館」を地域の体験学習のセンターとして整備していくこととしている。地域の人の手によって、まちづくりが持続されることが当団体の描く将来図である。

グループホーム設立のための路上生活者実態調査活動

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会
(東京都台東区・墨田区)

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

山谷地域は、東京の台東区と荒川区をまたがる地域で、日雇労働者の街として知られています。日雇労働者が素泊まりをするための簡易宿泊所（通称：ドヤ）と一般住宅とが混在している街です。1990年代に入り、不況と建築の工法などが変化した影響で日雇労働の需要は激減し、失業による多数の路上生活者が生まれました。「ふるさとの会」は、こうした路上生活者の自立支援を行うために発足しました。1998年からは、NPO法人自立支援センターふるさとの会として、路上生活者が地域で自立するための通過施設である宿泊所の運営を始めました。



炊き出しに並ぶ路上生活者

1-2. 目的

この活動の目的は、2002年度に路上生活者等生活困窮者のためのグループホーム（宿泊所）を設立するに先立ち、地域の路上生活者の実態及びニーズを調査し、施設のサービスプログラムの作成等に活用することです。また、活動を進めていくなかで、施設のサービスプログラムにとどまらず、地域の一員として自立をしていくための“まちづくり”的視点が欠かせないことがわかり、活動自体がまちづくりのきっかけづくりにしていくことも目的に加えて活動を行いました。



自立のための通過施設
「ふるさと千束館」

II. 活動の内容

この活動は、「調査活動→プラン作成→評価」の流れで行われました。

2-1. 隅田川沿岸調査活動

隅田川は台東区と墨田区の間を流れしており、河川敷に多くの路上生活者がブルーシートを使った小屋を設置して定住しています。隅田川調査活動では、隅田川河川敷（水神大橋～桜橋付近）で生活する路上生活者の聞き取り調査を4月から7月にかけて行いました。調査により隅田川沿岸のブルーシート小屋で生活している人の実態がわかりました。



隅田川沿岸での調査活動の様子

ブルーシート小屋で生活する人たちの多くは、空き缶や銅線集めなどの都市雑業に従事しており、月に2～3万の収入を得て生活していました。家賃を支払うほどの住宅費ではなく、収入と炊き出しなどを利用して生活しているという状況でした。東京都では、路上生活者自立支援事業として緊急一時保護セン

ターと自立支援センターを設置し、就労可能な路上生活者が就労活動を行う支援を行っています。こうした施設を利用して就労自立を果たした人達がいる一方で、中には日雇労働を長く続けてきたために一般の就労に転換して自立できるという見通しが持てず、確保した都市雑業の仕事とブルーシート小屋を撤去するまでに至らない路上生活者もいることがわかりました。



炊き出しの様子



ふるさとせせらぎ館



ふるさとせせらぎ館外観

2-2. 就労支援グループホームプラン作成

調査活動をもとに、検討チームをつくり、以下のプランを作成しました。

1. 2001年12月に開設した「就労支援ホームなづな」を宿泊所の営繕清掃、イベントの設営などをするグループホームとして位置づける。
2. 「就労支援ホームなづな」の仕事の一部を隅田川沿岸等で路上生活をする人達へも提供する。
3. 8月に開設する「ふるさとせせらぎ館」にて、①就労可能であるが常用雇用が難しく、生活保護と合わせて自立を目指す人達と②就労が不可能で介護やメンタルケア等のサービスを受けながら安定した生活を確保する人達へのプログラムとして、就労体験プログラム、識字プログラム、娯楽プログラムなどを導入する。

2-3. 隅田川沿岸調査評価

上記のプランの実施について以下の評価を行いました。

1. 就労支援ホームなづなの仕事として、宿泊所の定期清掃、敬老室（高齢者交流センター）の受付・清掃をグループホームや宿泊所の利用者と路上生活者の就労グループに提供。（総計400,000円／月程度）就労グループでの就労をきっかけに、ふるさとの会従業員としての自立、東京都の自立支援事業の利用に繋がったケースが生まれた。一方で、就労機会の提供によってブルーシートでの生活が安定し、日雇労働の形態が継続してしまうケースも生まれてしまった。
2. 8月に就労支援、要介護者支援、精神保健福祉型の複合施設である「ふるさとせせらぎ館」を開設。合計38人の利用者へのプログラムとして、就労体験プログラム、娯楽プログラムが導入された。また、他施設職員により識字プログラムが行われ、就労に繋がったケースが生まれた。（1名）

2-4. いろは商店街調査活動

いろは商店街は山谷地域の中心に位置する商店街です。8月～9月にかけて調査を実施しました。調査により、生活保護の生活からスリップし、行き場を失った人や就労可能であってもブルーシート小屋を作るまでの力量がない人が多いことがわかりました。

また、いちは商店街では、アーケードがあるために多くの路上生活者が集まり、商店と路上生活者との間で常に緊張関係がありました。いちは商店街に集まる路上生活者は、隅田川沿岸とは異なり、生活基盤がなく、路上で死亡することも少くない状況でした。また、閉店した商店の前には、夜間だけでなく昼間も定着する路上生活者が増え、さらに顧客が減少するという悪循環になっていることもわかりました。

2-5. 在宅支援プログラム・宿泊所プログラム

調査により、以下のニーズに合わせたプログラムが企画されました。

1. 痴呆症などを含めた身寄りのない要介護者・家族のサポートのない知的障害者、精神障害者の在宅支援を「ヘルパーステーションふるさと」と協働して行う体制をつくる。
2. 「まちづくり」とつなげた宿泊所プログラムとして、商店街のイベントに参加するプログラムを導入する。



ふるさとせせらぎ館内部

2-6. いちは商店街調査評価

いちは商店街調査活動では以下のように評価を行いました。

1. 2002年11月にいちは商店街に開設された「ヘルパーステーションふるさと」と協働して、宿泊所の入居者や宿泊所を退所して地域で生活する独居の高齢者や障害者が、再び路上生活へ転落することのないよう、路上生活者への訪問相談を行うアウトリーチ活動と地域生活を支えるリビング事業（独居高齢者が平日に通所できるリビングスペースを開放している事業）、訪問介護事業の担当者で構成する「地域支援事業部」を設置。定期的（毎週1回）に情報交換を行う体制が整備された。
2. 宿泊所利用者が、いちは商店街のイベント（福引など）に参加するプログラムを実施。商店街に「路上生活の人達が路上生活から脱却し、地域で自立をすることで、商店街の購買力の向上にもつながる」ということをアピールするきっかけとなった。また、宿泊所利用者やリビング事業の利用者は、イベントに参加することで地域とのつながりを持つことができた。



ヘルパーステーションふるさと

III 活動の効果及び今後の課題

3-1. 活動の効果

2002年度のこの調査活動では、主に隅田川沿岸といちは商店街の路上生活者の実態及びニーズ把握を行うことができました。ふるさとの会では、冬期に毎年調査を行って来ましたが、調査活動→プラン作成→評価といったように、プログラムにつなげる形で行われたのは初めての試みでした。宿泊所の運営は3年前から始め、「ふるさとせせらぎ館」を含めて5つの宿泊所があ



ヘルパーステーションふるさと内部

りますが、路上生活者のニーズや行政機関の支援体制の変化と同時に、宿泊所の機能やプログラムも変化させていく必要があることがこの調査を通じて明らかとなりました。また、この調査活動を通じて路上生活者の人達とのつながりができ、継続して訪問相談ができる体制となりました。そして、いろは商店街では、地域住民や商店とのつながりを持つことができ、路上生活者問題の解決とまちづくりとを結びつけて活動していく方向性を見出すことができました。

3-2. 今後の課題

今後は、隅田川沿岸、いろは商店街共に路上生活者への訪問活動を継続していく予定です。実態とニーズ把握と同時に情報提供や相談活動を行い、路上生活から地域生活までのサポートプログラムを充実させていくと共に、グループホーム（宿泊所）のプログラムを常に点検・改善していく体制としていきたいと考えています。

2003年度は、就労支援型の宿泊所或いは住居となる施設を開設していく予定です。隅田川沿岸で生活している就労可能な路上生活者の自立のステップとなるようなプログラムを検討していきたいと思っています。

ふるさとの会では、これからも、「路上生活者が地域の中で住居だけでなくコミュニティの一員としての役割を回復できる」プログラムを目指していきたいと考えています。そのためには、路上生活者の実態だけでなく、コミュニティ全体のニーズを理解していく姿勢が欠かせないことがわかりました。今回の調査活動で生まれたネットワークを活用し、まちづくりの視点を常に取り入れながら活動していきたいと思います。

<団体活動データ>

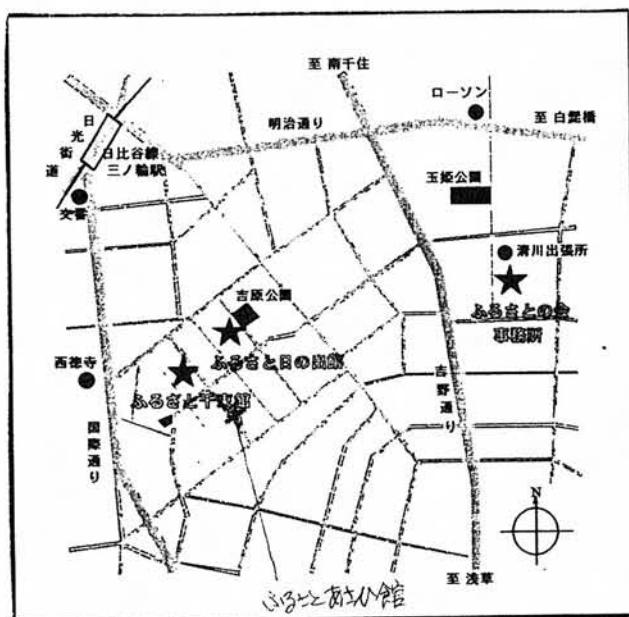
■特定非営利活動法人 自立支援センター山谷ふるさとの会

活動テーマ	グループホーム設立のための路上生活者実態調査活動
活動目的	通称山谷と呼ばれる地域において、路上生活者、高齢者、障害者など生活困窮者の地域社会における自立生活支援及び福祉の増進ならびにまちづくりの推進に寄与することを目的とする。
設立年月	1999年10月
代表者名	水田恵
活動地域	東京都台東区・荒川区・台東区
メンバー	42名 NPO職員、会社員、大学教員、学生等

●団体設立の経緯

台東区と荒川区にまたがる通称山谷地区は、日雇労働者が仕事を得る「寄せ場」として長年、高度成長期の日本の経済を支えてきたが、経済状況と労働現場の需要の変化に伴い、様々な理由で路上生活になった人が増え、その高齢化も問題になってきた。こうした中、山谷で労働運動の活動を行ってきたメンバーが中心になって、1990年に、山谷の路上や公園で寝泊りする路上生活者への支援として、毎日曜の炊き出し、夏祭り、年末年始の越年事業などを始めた。その後1999年に特定非営利活動法人格を取得し、宿泊事業などの活動を行っている。

●活動地域図（活動位置図）



(ふるさと日の出館のパンフレットより)

●これまでの活動

設立後5年ほどたって、毎日曜の炊き出し等の活動から、路上生活を脱出し自立を支援する活動の必要性を感じ、当財団の助成を受け、生活保護を受給している元路上生活者の共同リビング事業を開始した。それを皮切りに地域の空いているもと旅館や置屋だった建物を借りて、自立への中間・通過施設としての宿泊所を5棟開設している。また、地元の商店街の中に、ヘルパーステーションを開設したり、行政から施設の管理や就労支援の事業を委託するなど、団体の活動の幅を広げている。

①宿泊所事業

家のない高齢の生活保護受給者が再び地域社会で自立するための第一歩としての中間・通過施設。地域の住宅や元旅館、空き工場などを借り上げて開設している。

- ・「ふるさと千束館」(1999年10月開設)
- ・「ふるさと日の出館」(2000年8月開設)
- ・「ふるさとあさひ館」(2001年6月開設)
- ・「ふるさとせせらぎ館」(2002年8月開設)

②就労支援事業

2001年12月より墨田区向島に「就労支援なづな」を開設。入所者は、掃除当番制などの生活訓練を実施しながら、ふるさとの会運営の宿泊施設等の清掃や営繕などの仕事を担当している。

③自立支援センター事業

高齢・疾病・障害などのために就労自活の展望がなく簡易旅館、アパートで生活保護などを利用して生活している高齢者を対象に、共同リビングサービスの提供、食事提供・家事援助・安否確認などデイサービスの提供を行う。

④敬老室管理委託事業

2001年4月より社会福祉法人有隣協会の再委託を受け、東京都城北福祉センターハンターハウス・敬老室の管理委託業務を開始した。

⑤「ヘルパーステーションふるさと」の開設

2002年1月に地元いは商店街の一角に開設。

また、このほかに、都の自立支援センター墨田寮の生活相談業務、「山谷地域就労自立促進事業」、の受託（ヘルパー取得の支援）をしている。

●助成対象活動

施設のサービスプログラムの作成等に活用するために、地域の路上生活者の実態及びニーズを調査した。

- ・隅田川沿岸調査活動
- ・就労支援グループホームプラン作成
- ・いは商店街調査活動



▲ふるさと日の出館

・在宅支援プログラム・宿泊所プログラムの企画作成

●これからの予定

路上生活者への訪問、調査活動は、今後も継続し、その結果を宿泊所のプログラムに反映してゆく予定。また、商店街との連携、山谷のまち全体のまちづくりの視点に立った活動をしてゆく。

『共生の暮らしを目指す』NPO相互の連携の場づくり

松陰コモンズ
(東京都世田谷区)



松陰コモンズ外観と内観



地区150年の古民家のもつ魅力と豊かな外環境が松陰コモンズの大きな魅力のひとつ



敷地内にて交流会

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

都市部においては多くの屋敷と屋敷林が相続のために失われ、マンション建設や小さな建売住宅が連立するミニ開発で、長い年月を経て形成されてきた緑豊かな環境が悪化してきている。

世田谷に江戸時代から続いている家の7代目当主、鈴木さんも相続のため、母屋とその周りの屋敷林を手放すつもりだった。普通のディベロッパーに頼めば、即7階建てのマンションが建つか或はミニ開発された建売住宅になる事は目に見えている。そこで、鈴木さんは他の解決策を模索するため、世田谷まちづくりセンターに相談に訪れたのである。まちづくりセンターから紹介をうけた世田谷にコレクティブハウスを実現する会（以下、せたコレ）とエコロジー住宅市民学校（どちらも世田谷まちづくりファンド卒業生）が、鈴木さんへの提案を行うことになった。前者は賃貸コレクティブハウスを、後者は環境共生型コーポラティブ住宅の提案を行った。どちらも現在の環境を如何に残せるかという地主さんの思いを第一にした提案を模索していたが、賃貸によるコレクティブハウスの提案を行ったせたコレは税対策の面から計画を断念せざるをえない状況があり、土地売却を受け止められる環境共生型コーポラティブ住宅が、相続のために売られる庭にて実現することになった。

一方で、話し合いの経過の中で相続税対策の方も何とか母屋が残せる方向に状況が変化した。せたコレグループはNPOコレクティブハウジング社、民家コモンズ推進協会を含むプロジェクトグループとして母屋をコレクティブな暮らしの実践を目的としたシェアードハウスと地域に開かれたコミュニティの場として再提案した。鈴木さんは自分が受け継いできた古民家と屋敷林のある周辺環境を守り、そこがコミュニティの場となることを選び、同時に母屋を相続されたお姉様もこの提案に賛同された。この様な背景で松陰コモンズがスタートした。

1-2. 目的

古民家を再生し、集まって住むことによって現代の暮らし「コレクティブライフ」の実践を行う。また、そのコモンズスペースである座敷の一部を開放したり、発足した松陰コモンズグループによる様々な企画で地域やNPOを連携したコミュニティ形成を図る。こうした交流の場を通じて、地域住民や他の

NPO団体との交流を深めて行き、地域コミュニティの活性化につなげることを目的にしている。

II. 活動の内容

2-1. 古民家再生を自分達の手で・・・壁塗りワークショップ

2002年3月、居住者の引越し。松陰コモンズの暮らしの始まりだ。入居までの間、長い年月の間に積み重なった荷物を整理し、なんとか生活できる状況までにはなっていた。古民家の改修も、床下の構造補強など最低限のことしかしていかなかった。

2002年4月、壁塗りワークショップ。松陰コモンズは古民家らしい装いに様変わりした。壁塗りに使った土は、庭の一角にあった土蔵の土の再利用だ。この土はその後も保管し、庭造りや松陰エコヴィレッジの壁に再利用される予定となっている。60名もの参加者が自前のコテを片手に壁塗りに奮闘し、きれいになった壁を喜んでいる。その姿に、建物の再生以上の喜びを感じた。



壁塗りワークショップ

2-2. 松陰コモンズオープニングパーティー

2002年5月、壁塗りを終えて、一段落した松陰コモンズのオープニングパーティー。9団体それぞれが屋台を準備して、さながら縁日のような賑わいを見せた。松陰コモンズ居住者はタイカレーに青菜ジュース、松陰エコヴィレッジのおでん、世田谷まちづくりセンターの流しそうめんなどなど趣向を凝らした屋台だった。パーティーには300名もの人が参加した。



オープニングパーティー

2-3. 畑での収穫を楽しんだ夏

松陰エコヴィレッジが着工する2002年10月までのひと夏の間、庭に畠が出現した。9団体のひとつであるキッズエナジーを中心にきゅうりやなす、トマト、スイカなどの野菜畠がつくれられた。さらに、赤米、黒米などの古代米の立体苗床もつくられた。この米の苗が生長した段階で、新潟県松代町へ運んで育てるという都市と農村の新たな関係づくりも同時に行なわれた。この模様はビデオにまとめられ、「世田谷棚田物語」上映会も開催された。



松陰エコヴィレッジ着工
前の庭を畠に活用

2-4. 松陰カフェはじまる

松陰コモンズの活動を広く知ってもらうために「松陰カフェ」を名づけた月1回のイベントをおこなうことになった。第1回はアコーディオンの2人組みのミュージシャンを招いてのライブを開催した。70名の人がコモンズを訪れた。第2回は、ギターと薩摩琵琶による演奏会。参加していただいた地主の鈴木誠夫さん曰く、「60年前の傷痍軍人を招いて開いた演奏会を思い出した。まだ小さな頃の話でとても怖い思い出だったけれども、不思議なつながりを感じる。」150年の歴史の中にいま私達の活動があることを実感させられた。第3回はアコーディオン

と二胡のライブとスケッチ展。松陰コモンズ居住者のあわたさちこさんのイラストを大広間に飾り、絵を楽しみながら素敵な音楽を聴いた。第4回は染織作家の駒田佐久子さんの手仕事展。型染めの素晴らしい着物に古民家が息を吹き返した3日間だった。無料開放していたため、誰もが気軽に訪れる能够があるので、ご近所の方もいらしてくださったのが一番の収穫だった。



第3回松陰カフェ

2-5. そして松陰コモンズでの暮らし

松陰コモンズの活動の基盤は、入居者7人の暮らしだ。これまで紹介した地域や関連団体との共同の試みにも必ず居住者の理解と協力がないと成立しない。また、外へと開いていくことの意味も、古民家をつかった現代におけるもうひとつの暮らしの形の存在を広くしってもらうことにある。そうした目的を達成するために、奇数月の第二土曜日を見学日として、コレクティブな暮らしの実態を広めていく試みも始めている。

III. 活動の効果と今後の課題

3-1. 活動の効果

①古民家再生

まず、歴史財としての古民家を現代の暮らしに再生するためには、専門家、居住者、NPO、地域との連携をはかりながら進めていったことが挙げられる。下記にあげるワークショップを通じて、単なるハードの再生にとどまらない成果を得ることができた。

②コレクティブな暮らしの実践

7室の個室に男女7名が居住、リビング、キッチン、風呂場、トイレさらに冷蔵庫や洗濯機、台所道具なども共用し合理的な暮らしの実践をしている。ライフスタイルの多様化する未来社会の住まいを考える上での新しい提案として多くのマスコミ、行政、住まいづくりグループ、研究者などに注目されている。

③環境共生の地域づくり

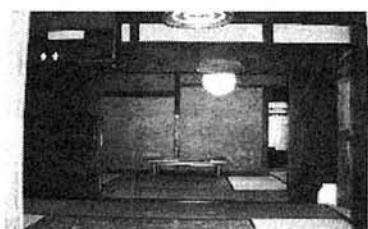
元々同じ敷地だった隣地の環境共生コーポラティブ住宅「松陰エコビレッジ」が現在建築中（2003年9月竣工予定）。入居予定者は会議や懇親会には松陰コモンズの座敷を使っている。松陰コモンズ居住者との交流もあり、将来同じ敷地内でどのようにそれぞれの環境を活かして暮らしていくかのワークショップも準備中。座敷はNPO活動、研究活動、ミニコンサート、展示会などで外へも開かれており地域住人の参加もある。

④記録作成

以上の活動の記録をスチール写真、スライド、文章などに残して今後の活動に活かしていく。



共用キッチン



パブリックコモンスペースとして開放している座敷

3-2. 今後の課題

松陰コモンズは9団体のネットワーク組織として一年間活動を行なってきたが、居住スペースを活用しての活動であるため、主に7名の居住者が運営にあたっていた。しかし、7名だけで運営するには限界があり今後もこのスペース、環境を生かし、さらに価値ある場としていくためには様々なサポートが必要とされる。秋には完成する松陰エコビレッジと松陰コモンズ両方を有機的に関連づけ、今までよりさらに大きな規模でのコミュニティー作りをしていきたい。そのための運営方法、サポートシステムの構築が必要とされている。

<団体活動データ>

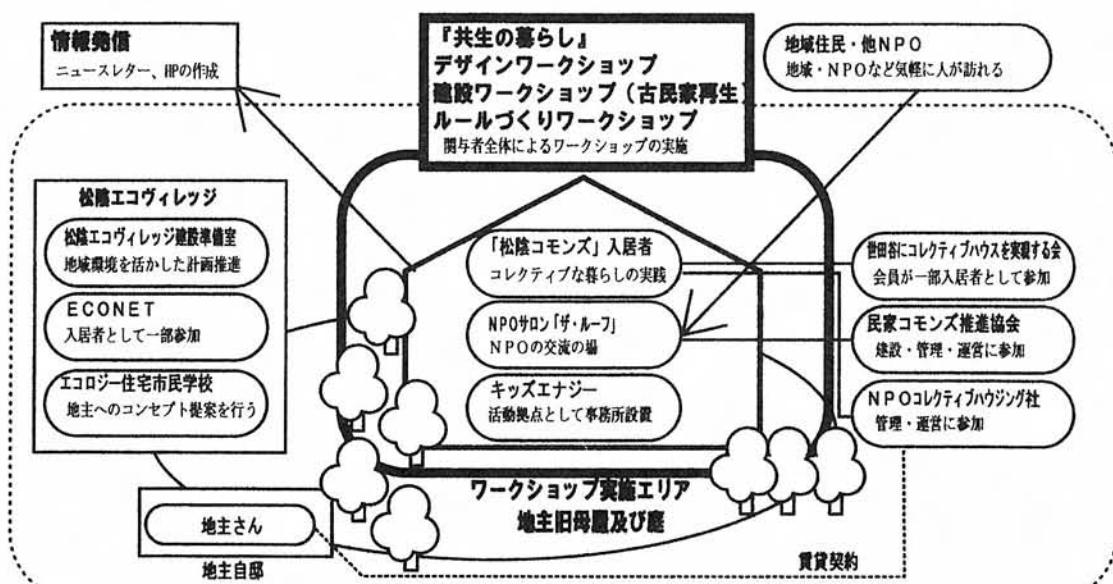
■松陰コモンズ

活動テーマ	『共生の暮らし』を目指すNPO相互の連携の場づくり
活動目的	江戸時代からの古民家を再生し、集まって住むことによってコレクティブな暮らしを実践するシェアードハウスと、その一部をNPO相互の連携の場、地域活動の場として開放し、地域コミュニティの活性化を担う場とするプロジェクト「松陰コモンズ」を実施する。
設立年月	2001年5月
代表者名	新居誠之
活動地域	東京都世田谷区
メンバー	「松陰コモンズ」に居住する7名を中心に活動 テレビ番組プロデューサー、マーケティングコンサルタント、イラストレーター、会社員など

●団体設立の経緯

相続問題によって解体の危機にあった古民家を再生し活用するために、「世田谷にコレクティブハウスを実現する会」と「NPOコレクティブハウジング社」によって提案されたプロジェクト「松陰コモンズ」の実行組織として設立された。NPOコレクティブハウジング社、民家コモンズ推進協会、世田谷にコレクティブハウスを実現する会、入居者グループなど9団体によって構成される。

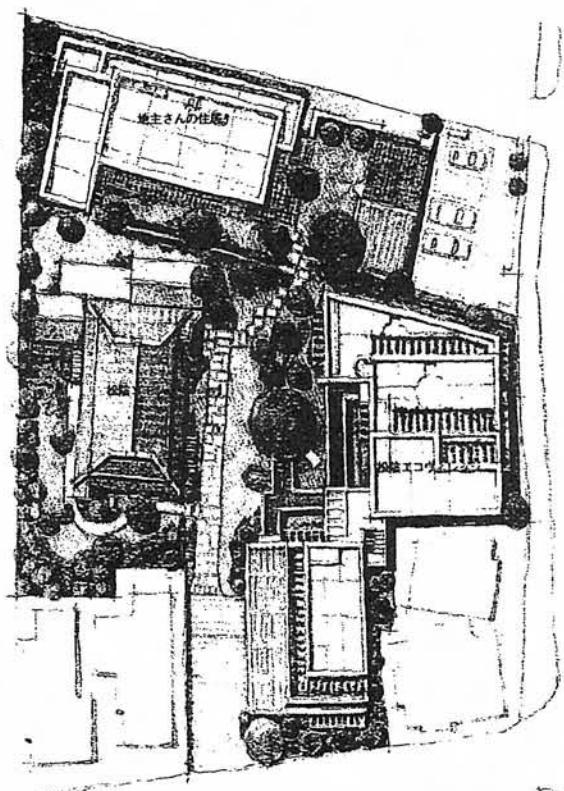
〈団体の全体像〉



位置図



敷地配置図（左の日本家屋が松陰コモンズ）



イラスト／ボイスプランニング 堤野仁史

●これまでの活動

古民家の活用方策を提案。古民家に住むために、柱の補強や一部部屋の床張りなどの改修作業、家財のガレッジセール、1階の大広間を開放してコミュニティ活動などを行ってきた。

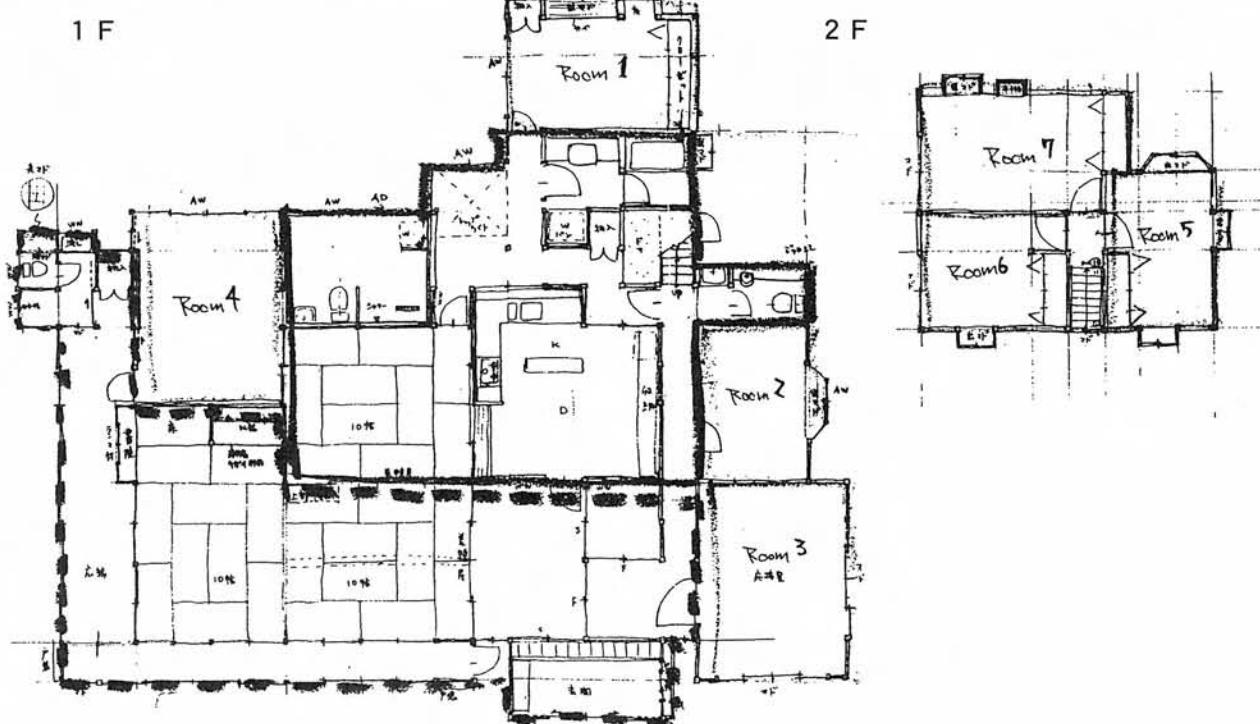
2001年 相続税のため売却を余儀なくされていた地主の鈴木氏が「世田谷まちづくりセンター」に相談をもちかける。世田谷まちづくりセンターから紹介をうけた「世田谷にコレクティブハウスを実現する会」と「エコロジー住宅市民学校」が敷地の活用案を提案。「エコロジー住宅市民学校」による環境共生型コーポラティブ住宅の提案が採用される。

2001年10月 「世田谷にコレクティブハウスを実現する会」やその他組織により結成されたプロジェクトグループにより、当時使われていなかった売却する庭に隣接した築150年の母屋を再生してシェアードハウス「松陰コモンズ」として活用し、その母屋の一部を地域活動の場として開放する案が提案される。

2002年1月 提案を受け入れ契約（2007年までの5年間の契約で一括借り上げし、入居者に個別転貸しているサブリース事業）

2002年3月 改修作業やガレッジセールなどをを行い、3月に入居。

（松陰コモンズの平面図）



●助成対象活動

古民家を再生し共生の暮らしづくりの実践と、NPO交流の場を提供・運営。さらにそれらの活動を記録し、新しい住まい方を世の中に発信する。

・壁塗りワークショップ

庭の一角にあった蔵を解体したときに出た土壁やその他の材料を活用して、地域住民に参加を呼びかけて壁塗りワークショップを実施。和室の壁を土壁に塗り替えた。

・松陰カフェ

月1回程度、1階の大広間を開放してコンサートやイラスト展、染織物の展示などを行った。

・NPO交流の場を運営

NPO相互の連携の場、地域活動の場として開放することを目的に、1階大広間の貸し出し等を運営。

・見学会の開催や情報発信

コレクティブな暮らしの存在を広く知ってもらうために、奇数月の第2土曜日に見学会を実施した。実体験に基づく情報をホームページなどで発信した。

東日暮里での多世代・賃貸型コレクティブハウスの実現

特定非営利活動法人 コレクティブハウジング社
(東京都荒川区)

I. 活動の背景と目的

私達は今、急速な少子・高齢化、家族形態の変化、女性の更なる社会進出、暮らし方の多様化、環境破壊、などが進む時代を生きています。物質的豊かさを享受する一方、子どもから高齢者まで、私たちの日常生活は近隣や地域から孤立し、ますます商品経済や公共サービスに頼ることになり、かえって潤いのない不経済で不安な住環境を生み出しています。災害に強いまちづくりとしてもコミュニティの重要性が言われていますが、多くの人々が豊かな人間関係のある生活環境のありかたに目を向け始めています。私達NPOコレクティブハウジング社は、『共に住む、共に生きる、共に創る』をテーマとする暮らしづくり、住まいづくりであるコレクティブハウジングを普及推進することにより、豊かに重ね合わせる人間関係のある住環境の実現をめざす事を目的として2001年2月に設立、活動を開始しました。

1-1. 私たちが提案する賃貸コレクティブハウス

家をつくる事は、本来はとても楽しい事です。住宅は資産として価値が決まるのではなく、住まう事によって生まれる「居場所としての心地よさ」が価値そのものだと私たちは考えます。

NPOコレクティブハウジング社は、選択する住まいから自分に合った暮らし方を実現する住まいづくりへの転換を、コレクティブハウスの実現を通して、住まい手の皆さんと一緒にめざしたいと考えています。

「コレクティブハウス」は、個人の自由で自立した生活を前提としながら生活の一部を共同化したり、空間や設備を共用化することによって、個人や小さな家族だけでは充足できない、合理的で、便利で、楽しみと安心感のある自分らしい暮らしができる住まいの形です。共働きや単身で子どもを育てている親たちや、将来が心配な高齢者にとってはもちろんのこと、子どもたちが育つ環境として、また単身者の生活にとっても好ましい集合住宅です。

このようなコレクティブハウスの第1号として、<コレクティブハウスかんかん森>を実現することは、新たな住まいの選択肢を広げる第1歩となります。



北西側からの外観



日暮里コミュニティハウスI階の
共用スペース

階		戸数
12	一般浴室	
7~11	ライフハウス(一般居室)	41戸
4~6	シニアハウス(介護居室) 食堂、健康相談室、介護浴槽	44戸
2~3	コレクティブハウスかんかん森	28戸
1	ライフハウス、シニアハウスの共用スペース 保育園、クリニックほか、 共用スペース（食堂、多目的室）	

日暮里コミュニティの階層図

II. 活動の内容

2-1. 「コレクティブハウス“かんかん森”」プロジェクトにおける主な活動内容

- 1 : 参加者募集のための説明会、セミナー開催
- 2 : 参加希望者へのコレクティブをつくろうワークショップ
- 3 : 居住希望者参加の設計や暮らしづくりのワークショップ
- 4 : 居住希望者コーディネート
- 5 : コレクティブハウス空間計画コーディネート
- 6 : 賃貸契約コーディネート
- 7 : 事業主体との調整
- 8 : 居住者組合の暮らし運営立ち上げ支援、ワークショップ
- 9 : 居住希望者ウェイティングリストの管理



内覧会でモデルルームを見学

以上の様な活動を行いました。それを以下、時系列で示します。今年度は前年からの継続で助成されましたので最初からの経過を記載しました。

2-2. 「コレクティブハウスかんかん森」の活動経過

2000年 5月	事業主体より日暮里計画参加要請、企画案づくり
12月	企画案をもとにかんかん森コレクティブハウスパンフレット作成
2001年 1月～2月	参加希望者説明会3回開催、セミナー
2月～4月	第2期つくろうワークショップ全6回開催
2月下旬	NPOコレクティブハウジング社認可
5月～	かんかん森居住希望者の会がスタート
6月	居住者による仲間募集チラシ作成 NPOコレクティブハウジング社ホームページオープン
7月～10月	第2期豊な暮らしづくりのワークショップ全6回開催

このワークショップは共有空間の検討など、計画案に反映させるもの。計画案の作成にともない、希望住戸の選定、家賃の決定などを行いました。28戸の住戸が各々の住戸から13%程度を出し合う形で家賃負担もして生み出した共用空間160m²の内容や配置もワークショップでの模型や図面の検討、原寸の模擬平面体験などをしつつ空間を確認し要望を検討してきました。

9月	居住者組合準備会として居住者の集まりがスタートこの頃参加者は増減しつつ14名、居住者のHP作成
11月	入居希望住戸を選定 ほぼ計画案が決まった11月に希望住戸選びが行われました。 大小11戸の住戸が予約されました。

実施設計図作成に向けての調整

かんかん森ホームページやメーリングリストも開設され、徐々にアクセスも増えてきました。

- 12月 第2期居住者募集活動開始、プレスリース用資料作成、第3期プレワークショップ開催
朝日新聞取材

1月5日の朝日新聞“スローでいこう4暮らし方再発見「隣人感じ集集合住宅」”でとりあげられ、地方からの反響も大きかった。

- 2002年1月～ 第3期豊かな暮らしづくりのワーク
ショッピングⅡ全6回開催

第3期のワークショップは1月から3月まで行われ、個々の住戸の空間や設備の検討も全員にオープンに行い、賃貸住宅であっても計画に参加でき、基本的な住み続けられる心地よさをどう創れるかを話し合いました。共有の空間の話し合いは、居住者が共同化する具体的なこれから暮らし方やここでみんなで持ちたい空間について、イメージ喚起しつつ、設備や空間を検討し、設計への最終的要望をまとめあげました。

- 1月 地鎮祭（18日）、居住者組合発足（27日）

建設会社も決まり、2002年1月18日に地鎮祭が行われました。居住希望者の会が居住者組合「森の風」として正式に発足しました。

- 1月～2月 新規募集説明会開催（1月26, 29日, 2月3, 26日）

1月から第2期の入居者募集説明会も2週間おきに開催され説明会の度に居住希望者が増加した。

- 3月 説明会（2, 17, 26日）、着工
2002年4月 説明会（23日）

4月には森の風会員は20名を超え、空いている住戸も半分以下になりました。第3期ワークショップ終了後の図面調整期間として施工者、設計者と最終的な打合せを集中的に行いました。

ライフハウス住人との第1回交流会
(13日)

森の風定例会（13日）

上階に住むライフハウスの住まい手の皆さんとの交流をNPO福祉マンションをつくる会と合同で企画開催しました。参加者は30名ほどでした。

- 5月 説明会（9, 19日）
森の風第1回総会、定例会（11日）
第4期ワークショップ開催（26日）
第1回コモンミールについての検討

共同の食事づくりについて、具体的に検討をはじめる。

- 6月 説明会（5, 22日）



内覧会でまだこれからのコモン
キッチンを見学



ライフハウス（有料老人ホーム）
居住予定者との懇談会風景

第1回コモンミール（8日）

4人で30人分の食事をつくる、実地体験と食事会がはじまる。

定例会、ライフハウスとの第2回交流会
(15日)

第4期第2回ワークショップ：家具、備品について（30日）

7月

説明会（9, 20日）

定例会（13日）

第2回コモンミール（20日）

第4期第3回-1 ワークショップカラー
ヒストリー（24日）

色彩から自分史をなぞる、わたしの色との出会いを発見する。

8月

定例会（2日） 夏休み

9月

説明会（8, 21日）

定例会（8日）

第4期第3回-2 カラーヒストリー2

第3回コモンミール（21日）

10月

説明会（5, 19日）

定例会（5日）

第4期第3回-3 ワークショップカラー
ヒストリー3（7日）

第4回コモンミール（19日）

学習会ジェンダーについて（24日）

居住者の企画による学習会。講師を呼んで、知らず知らず刷り込まれている、男女間の役割分担や差別感を確認し、かんかん森での運営に活かしたいということであった。

11月

説明会（16日）

定例会（8日）

第5回コモンミール（16日）

12月

説明会（14日）

定例会（8日）

第4期第4回空間の仕上げと暮らし方の
ワークショップ（8日）

シンプルに合理的に暮らす事について話し合う

第6回コモンミール（14日）

2003年1月

説明会（25日）

定例会（19日）

第4期第5回-1 ワークショップ外構を
考えよう（19日）

1階の庭づくりをライフハウスの住まい手と合同のWSで検討した。

第7回コモンミール（25日）

2月

説明会

インテリア、備品、緑化委員会（2日）



外構ワークショップ



定例会

定例会、暮らし方委員会（8日）
 第4期第5回-1 ワークショップ 外構を考えよう2（8日）
 合同ワークショップ第2回、プランをまとめて設計へ要望
 第8回コモンミール（15日）
 建物内覧会 居住者対象の内部見学会（22日）
 委員会責任者会議（26日）

11の委員会があるが、入居が近づき、購入する備品、共同で行うコモンミール、コモン内部の設えを検討するインテリア委員会。暮らしの様々な取り決めや会則を検討する暮らし方委員会などが主要な任務を担って積極的に活動を行いはじめた。

3月 説明会（29日）
 定例会、暮らし方委員会（2日）
 第9回コモンミール（15日）
 コモンミール委員会（26日）
 インテリア委員会（28日）
 第5期第1回ワークショップ（29日）

コモンミールのローテーションと回数を考える。

4月 説明会（12日）
 定例会、インテリア、暮らし方委員会（5日）
 インテリアワークショップ（12日）
 暮らしのマネージメントワークショップ1（19日）
 暮らしのマネージメントワークショップ2（27日）



コモンクッキングのワークショップで当番を決める



お試しクッキング（4人で30人分の食事を作る体験）の様子

日暮里コミュニティハウスの竣工は予定よりおくれて2003年6月でした。2002年3月に着工し、4月に第3期ワークショップが終了してから空間に関する住民ワークショップは一先ず終了し、建築については、施工者管理者、事業主との折衝や調整が主になりました。5月に居住者組合の第1回総会が開かれ、居住者組合の活動も本格化し、10の委員会がスタートしました。第4期ワークショップは5月から始まりましたが、1ヵ月に1回という頻度で、じっくりと居住者間のコミュニケーションを図り、新たな視点を広げる目的で行いました。

講師を外部から呼んでの、カラーワークショップや日暮里コミュニティの他のフロアーの住まい手ライフハウスの皆さんと合同の1階の外構を考えるワークショップなども2003年にはいってから行いました。さらに、共同の食事づくりをより具体的にイメージするために、4人で30人分の家庭の夕食メニューをつくる体験、「お試しクッキング」を、荒川区のひろば館の調

理実習室をかりて月1回6月より行いました。このクッキングの後に、皆が参加しての食事会は和気あいあいで楽しく、途中から参加したメンバーにも馴染みやすい場となりました。

いよいよ入居が近づき、暮らしのルールづくりや、みんなで行う共同の食事づくりやメニューの研究、エコロジカルな管理運営のしかた、掃除の分担や作業内容、内装や色彩計画、みんなでそろえる家具や什器備品の検討など、様々な検討項目が住まい手の皆さんのが活動で行われました。私たちNPOの居住者との活動も、かんかん森の牽引者から、ワークショップを利用しつつ居住者組合の主体的活動を広げ、推進するための支援活動へと変化しました。2003年にはいり、次第に入居が近づくにつれ短時間で、管理運営の内容、方向性を決めるために、3月29日より第5期ワークショップをほぼ毎週開催して委員会活動を支援しました。また、3月ごろから居住者と事業主の住戸等の賃貸契約の支援も行なってきました。



コモンルームのインテリアワークショップ

III. 活動の効果と今後の課題

3-1. 活動の効果

(1) 今年度の活動の最も大きな内容「居住者による賃貸コレクティブハウスの自主運営の仕組み」の創造

日本ではじめての試みとして、住まい手が共同で担いあうことで合理的で豊かになる暮らし、暮らし方のディテールとはどういうものであるのか、それにはなにが必要なのか、なにをすれば良いのか、何一つはっきりわかっている事はなかったのです。

この1年でそれを発見するために、居住者と一緒に行ったシェミナーや検討は次のようなことです。

- ①居住者間のコミュニケーションを図り、相手との適切な距離感を理解しあうためのいろいろなワークショップ
- ②共同の食事運営を検討するためのお試しクッキングとコモンミール
- ③みんなの空間であるさまざまなコモンルームの心地良い設えを検討するインテリアワークショップ
- ④共同で購入する備品、什器の検討と、出資の額や仕組みの検討、備品ワークショップ
- ⑤共同と個々の暮らしを守り運営するための居住者組合の会則や水光熱費などの運営経費の検討、マネージメントワークショップ
- ⑥皆で担う料理や掃除のルールなどの検討、ローテーションづくり

結果としては、6月の入居を目指し以下のようなこと決まりました。

◎ 週3回の共同の夕食づくりを行い5チームが1週間交替受け



コモンルームのインテリアワークショップ、発表風景

持ちローテーションする

- ◎備品の費用は一人あたり15万を出資し、掃除用具、洗濯機、コモンルームのテーブル、イス、カーテン、食器、調理器具菜園の土から道具まで皆で検討した必需品を購入する。退居する時は、償却して返金する。
- ◎インテリアは専門家を組合で雇い、担当の居住者とたき台を検討し、皆に提案して内容を決め、皆の心地よさをつくり出す。
- ◎居住者組合の会則 「森の風ハンドブック」の作成
- ◎光ケーブルによるインターネット環境の実現
- ◎コモンルームの使い方、掃除の内容と方法のルール、ローテーションの作成
- ◎ハウスマネジメントのための運営体制づくり

こうしたことは、少しずつ担いあう事で一人では創りだせない、機能や空間を生み、そして何より暮らしのなかでお互いがネットワークすることで生じる豊さにつながる事を居住者が次第に確信したから出来た、本当に新しい暮らし方の創造であったと思います。

(2) 日本でコレクティブハウスをつくるための事業フローの創造

今回の事業は2年半ほどの経過をへて実際に実現するものであり、この経緯から私たちは一つの事業フローを得る事が出来ました。

コレクティブハウジングという共働して住まう新しい住まい方を、コレクティブハウスという共用の空間を内蔵した集合住宅において、ソフトとハード両方を同時に住まい手が検討しキャッチボールしながらつくっていく方法を、かなり解明する事が出来たと思います。

3-2. 今後の課題

(1) 新たなメンバーを迎えるなど かんかん森の継続的支援

6月から実際に生活が始まりましたが、まだ空室があります。居住者を募集中ですが、入居までに、今までのような活動をすることができないなかで、既にいるメンバーとのコミュニケーションや暮らし方への理解を深めてもらうために、別の方法の検討が必要であると考えています。この事は、転居する人ができて新しい人が入る時の仕組みとしても必要だと思います。ここで、重要な事は既にいるメンバーが新しく仲間になる人を選ぶのではなく、開いてみせる事で、新しくはいる人が自らこの暮らしを気に入って選択するというスタンスを保つ事だと考えています。

この暮らしが特殊な暮らしでなく、望めば誰もが選択できる



暮らしの「場」と暮らしの
イメージアップワークショップ



共用リビング



共用洗濯室



コモンキッチンにて

ものであるということは、コレクティブハウジングのもっとも根本にある主体的に担いあうという考え方によっています。

今後、運営は居住者組合主体で行われると思いますが、居住希望者ウエイティングリストづくりや事業主と組合の運営上の調整など、NPOとして継続的な支援をしていきたいと考えています。

(2) コレクティブハウスづくりの事業フローをまとめる

今回の多くの試行錯誤を含む経験で得られた事を、整理し、一つのガイドとなるようにまとめ、今後のコレクティブハウスづくりの推進に役立つ物とする予定です。

住まい手が参加してつくるプロセスは時間がかかり、経費を誰がどう負担するか、スケジュール管理ができるかなどが常に難しい問題があります。今回のようなフローがある程度わかれば、時間や経費の予測がかなり可能になり、いつまでかかるかわからないという不安も減り、合理化できる点も検討出来ルのではないかと思います。

事業者にも住まい手にも、有効なものをつくりていきたいと思います。

2003年6月から、コレクティブハウスかんかん森の暮らしが始まりました。まだまだ糸余曲折があるのではないでしょうか。でも、森の風の皆さんには意気揚々と船出をする、航海者のようです。何かあれば話合う事をモットーに、笑顔と、何気ない配慮が感じられる日々を支援していきたいと思います。皆様も是非注目して下さい。

また、新たなコレクティブハウス実現の取組も行い、多くの皆様に豊かなそして合理的な、自ら担う事でネットワークをつくる暮らしを知っていただきたいと思いますので、NPOコレクティブハウジング社への御支援もよろしくお願いします。

御質問、ご要望などありましたらご連絡下さい。

ホームページも是非ご覧下さい。

NPOコレクティブハウジング社 HP

<http://www.chc.or.jp/>

コレクティブハウスかんかん森 HP

<http://www.chc.or.jp/project/kankanmori/>

＜団体活動データ＞

■特定非営利活動法人 コレクティブハウジング社

活動テーマ	東日暮里での多世代・賃貸型コレクティブハウスの実現
活動目的	21世紀の少子高齢化社会、男女共同参画社会、高度情報社会、環境共生社会に対応した、人と人、人と社会、人と自然の共生を目指した生活者主体の住まいづくり、コミュニティづくりであるコレクティブハウジングの普及、推進に取り組むことを目的とする。
設立年月	2000年10月
代表者名	小谷部育子
活動地域	日本全域。助成事業の地域は荒川区東日暮里
メンバー	43名 大学教授、不動産業、都市プランナー、プロデューサー、研究員等

●団体設立の経緯

理事長の小谷部育子日本女子大学教授が中心となって、約10年前から本格的コレクティブハウジングの実現と普及を目指して、「ALCC」(*1)や、「世田谷にコレクティブハウスを実現する会」(*2)などが活動していたが、(株)生活科学運営(*3)が荒川区立の中学校跡地に介護や子育て等の複合施設を含む共同住宅(*4)をつくりにあたり、1部の階をコレクティブハウスにする提案を行った。小谷部氏をはじめ上記グループのメンバーが、そのコーディネートを行うことになったが、それを実行する上にも、また、本格的なコレクティブハウスの普及活動推進のためにも法人組織の立ち上げの必要性を感じ、それらのメンバーが中心になって設立された。

コレクティブハウスは「コレクティブハウスかんかん森」と名づけられた。

(注)

*1 「ALCC」(アルック)

既成の家族概念、住宅概念、福祉概念にとらわれずに自立した人と人とが新しい関わり方を模索し自ら主体的に行動することによってより自由で、楽しく、安心して住み続けられる住まいづくり、まちづくりを目指す研究・活動グループ。

*2 「世田谷にコレクティブハウスを実現する会」

住まい手一人一人が主体的に関わることで楽しく皆がいきいきできるコミュニティを作り出せるような住宅づくりを世田谷に実現させようとしてできた会。1998年6月に発足。コレクティブハウスが実現すればすぐにでも住みたい人たちと、コレクティブハウスの社会的重要性を考え、実現のサポートをしたい人たちの集まり。

*3(株)生活科学運営

有料老人ホーム、高齢者向けの各種サービスのついたマンションなどの企画・運営を手がける。

*4 日暮里コミュニティハウス

●所在地／東京都荒川区東日暮里3丁目9-21

●敷地面積／2,814.47 m²

●延床面積／9,306.61 m² (ライフ&シニアハウス日暮里 7,078.50 m²)

●建物構造／鉄筋コンクリート造12階建

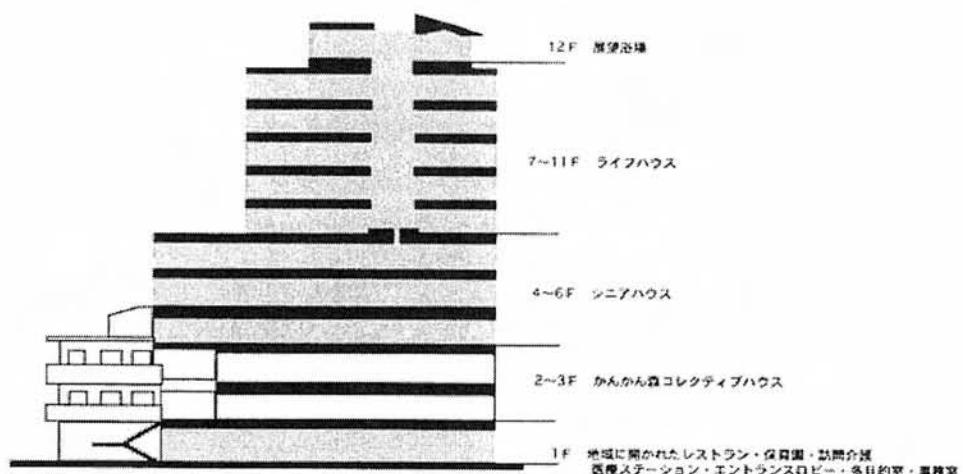
●専用居室／85室 (一般居室41室、介護居室44室)

●共用施設／食堂、多目的室、一般浴室、特別浴室、介護浴室

健康相談室、ゲストルーム、トランクルーム、駐輪場、駐車場等

●コレクティブハウス／28戸(2,3階)

●開設／2003年6月



(コレクティブハウジング社のホームページより)



●活動地域図（活動位置図）



●これまでの活動

2001年2月の設立後、日暮里コミュニティハウスの2～3階部分のコレクティブハウスについての入居者募集及び説明会の開催、入居後の暮らし方についての入居希望者によるワークショップ、入居者組合のコーディネート、建物運営事業主体との調整等を行った。

2000年5月 建物事業主体より参加要請。企画案づくり

2001年1～2月 説明会3回 セミナー

2～4月 第1期ワークショップ6回開催

7～10月 第2期ワークショップ6回開催

11月 入居希望住戸の選定

2002年1月 居住者組合発足

1～3月 第3期ワークショップ6回開催

3月 着工

●助成対象活動

引き続きワークショップや入居者募集や説明会などを開催。組合が発足したので、入居後の具体的暮らし方や共同の食事づくりの実地体験などを行う

2002年5月～ 組合の定例会、共同の食事づくりの実地体験（毎月）、説明会
第4期ワークショップ8回開催

2003年2月 建物内覧会

3月 第5期ワークショップ

6月 建物竣工。入居開始

●これからの予定

建物完成時点では全室満室ではない為、今後も入居者の募集を行う。また、入居後も入居者組合の運営支援を行う。初めての本格的なコレクティブハウスが実現したことで、この経験を整理し、今後のコレクティブハウス推進のためのひとつのガイドとなるようにまとめていく予定。

佐渡島における空き民家の維持・活用に関する調査

佐渡住環境研究会
(新潟県両津市・佐渡郡)

I. 活動の背景と目的

1-1. 活動の背景

島内を車で走ると空き家が目につく。島の人口は1950年当時ピークだった12.6万人が現在7.2万人である。2025年には推計5.5万人弱であり（新潟県離島振興計画・素案より）、空き家は今後も増えることが予想される。

農林水産業をはじめとする就業者、後継者の減少、島内経済のおとろえ、人手が入らず荒れつつある里山や農地…。この島をおおう空気は決して明るいとは言いきれない。住まい手を失い茫然と立ち尽くす空き家の姿は、この島に巣喰う欠落の象徴に他ならない。

しかし、だとすれば、空き家が再び人の暮らしで満たされることができれば、この地の再生へのターニングポイントになるのでは。そんな思いによってこの調査はなされた。

1-2. 活動の目的

本調査の目的は大別すれば三点ある。一つ目は「空き家の現状把握」である。島内の空き家数や場所はもとより、所有者の事情や空き家をかかる地元集落の考え方等々、空き家をめぐる現実を明らかにしたいというのだ。二つ目は「空き家の維持・活用への提案」である。前記現状把握をふまえ、空き家の維持・活用の意義や方策につき、その可能性や展望を端緒でも示したいというものである。

こうした内容は当然のことながら当会単独で成し得るものではない。特に行政との協働は不可欠である。本調査の実施を通じて行政や地域をはじめとする「各方面との関係づくり」をすすめること。それは手段であるとともに第三の目的でもあったといえる。

II. 活動の内容

前述した三つの目的にそって本調査を行った。具体的な方法としてはヒアリング、既存資料調査、およびアンケートである。

2-1. 空き家の現状把握

(1) 佐渡の推定空き家数

全島の空き家数は、住宅地図をもとに当会では1,600軒以上と推測する。そのうち両津市部分については300軒となる。一



廃屋になった空き家



市街地の空き家

方、2002年9月に両津市役所が職員を通じて調べた市内空き家数は270軒であった。したがって住宅地図による推測はある程度信頼できると考える。ちなみに佐渡の現住世帯数は約25,000であることから、空き家数はその約6%であると思われる。

(2) 「空き家」と「留守住宅」

ただし調査の過程で空き家とはそもそも何か、という疑問が起きた。辞書的にいえば空き家とは「人が住んでいない、または使用していない家」(岩波国語辞典)である。

しかし、ヒアリングや既存資料調査を通じて、「空き家」の多くはまったく利用されてないわけではなく、特にお盆や年末年始の帰省時に持ち主やその家族、親戚が滞在利用する場合が一般的であることがわかった。そのことは後述のアンケート結果でも確認された。

こうした「人が住んでいない」が、年間数日であっても「使用されている家」を「空き家」と呼ぶことについて、若干問題の余地はありそうである。加えて所有者の感情にも配慮し、アンケート調査(両津市、畠野町と連携。詳細は後述)にあたっては新たに「留守住宅」という用語をつくり、用いることとした。(本報告では「空き家」のまま)



両津市役所職員とともに
留守住宅調査



戻ってきたアンケート

(3) 地域にとっての空き家

今回の調査期間中、どの地域ヒアリングにおいても空き家の増加を指摘する声がきかれ、住民、ことに子供の減少を寂しいと感じる声も少なくなかった。行政担当者の話では、放火やその他の犯罪面から空き家の存在を憂慮する声が寄せられているという。

空き家の増加や住民の減少は徐々に進むものである。目に見える急激な変化やあきらかな実害を地域の側がつきつけられることは多くはない。それよりも地域をおおう漠然とした欠落感を醸し出す要素、加えて防犯、防災といった具体的な不安の両面で、ネガティブなものとして空き家が受けとめられていることがうかがわれる。

(4) 空き家所有者のアンケート結果から

本調査では、地域ヒアリングなどであきらかになった空き家の所有者につき、両津市役所および畠野町役場と共同で「留守住宅に関するアンケート」調査を行った。

発送数は両エリアあわせて136、回答数は87であった。主な質問項目および回答内訳はつぎの通り。ちなみに同一設問に対して複数回答可とした。

① 留守住宅を使っているか

「自分や家族の帰省時に使う」という回答が57と最多く、ついで「親戚、知人が必要な時使う」が11だった。一方、「特に

使っていない」は21で、回答者の7割以上は空き家の使用を続けている様子がうかがわれる。

② 維持管理はどうしているか

「自分や家族が帰省時にする」が48、「親戚、知人に頼んでいる」が34である。そのうち両方をともに行っているという回答は17。「維持管理をしていない」は15であり、8割以上の空き家が何らかの形で維持管理されていることがわかる。

③ 維持管理で困っていることはあるか

「困っていることはない」は23であり、7割以上の空き家の持ち主が維持管理に困っている。主な内容としては「、「老朽化、破損」が37、「防犯、防災」が19であり、「維持管理を頼める人がいない」が12である。また、「維持管理を頼める人がいない」以外の回答者でも、自由記載欄で維持管理の担い手確保に関する不自由や不安にふれたものが10あった。したがって4人に1人が信頼できる維持管理方策の必要性を感じている。

④ 住宅を貸すことはありえるか

「積極的に検討したい」「条件によってありうる」をあわせると24で回答中の3割弱、逆に「貸すことはあり得ない」は33で回答中の4割弱だった。残りである3割強は無回答またはその他であり、所有する空き家の今後について方針を決めかねている様子がうかがえる。

⑤ 住宅を売ることはありえるか

「積極的に検討したい」「条件によってありうる」をあわせると20で回答中の約2割強、逆に「売ることはあり得ない」は40で回答中の4割5分を占めた。残りである3割強は無回答またはその他であった。「貸すこと」と似た結果だが、若干「売ること」の方が抵抗感が大きいようである。先祖伝来の暮らしの根っこを断つことへの抵抗感が想像される。

以上が、今回の活動である調査を通じて判明した、佐渡での空き家の現状の一端である。

2-2. 空き家の維持・活用への提案

本調査の方法としてはこれまで述べた、関係者ヒアリング、既存資料調査、アンケート調査に加え、当会メンバーと行政担当者のディスカッション、および都市部のNPO法人スタッフ(よこはま里山研究所)を含む当会内部でのブレーンストーミングを行った。

以上の成果を総合し、空き家の有する意義や可能性、および考えられる維持活用策につき、次のようにまとめた。



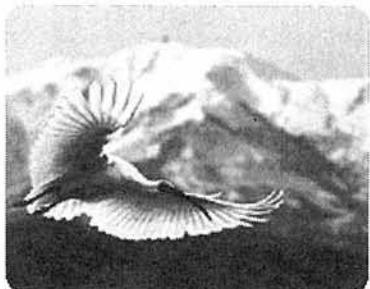
農村部の空き家



山村部(畠野町) 調査の一場面
ヒアリングのお札は薪で

(1) 空き家の意義、可能性

今後の空き家利用については、非常に多岐にわたる意義、可能性が考えられる。羅列的に例示すると次のようになる。ちなみに、これらはさらに相互に関連するため、そうした構図が理解されやすいよう、『佐渡で空き家はよみがえる之図』を作成した。



トキの野生復帰のための里山整備作業も進む



佐渡の特産物「カキ」の養殖風景大量に排出されるカキ殻を原料とした貝灰塗喰を作り、空き家のリフォーム用自然素材として活用する予定

- ① よし、佐渡に住もう。 佐渡へのUターン、Iターン者が増える

老若男女で村がふたたび活気づく／農林水産業の従事者が増える／島内消費者が増える／新鮮な発想、視点が持ち込まれる

- ② 家の寿命がまっとうされる。 人が住んでこそその家
廃屋が減る／防災、防犯上安心／村の雰囲気が明るくなる／解体処分がへりゴミが減量／焼却がへり地球温暖化が抑制

- ③ ライフスタイルを表現したい。“懐かしくてあたらしい島づまい”的あり方をつくる

島内での若い世代の独立、自立のための住居として／手仕事、伝統芸能の見直し。鬼太鼓を迎える家／エネルギーだって考えたい。太陽熱、木質バイオマス…

- ④ 住み心地よく美しい家でくらしたい。 家が生氣をとりもどす

リフォームでの仕事人の出番。大工、左官…／リフォームでの佐渡産材の使用／“風景を形づくる家”を大切にする

- ⑤ ふるい家の新しい使い方を考える。

古民家再生塾(仮称)の会場に／地域のたまり場に。趣味、子育て、研修、作業場…／グリーンツーリズムで利用する／その他

(2) 維持・活用のための仕組みづくり

前述したような空き家の意義、可能性は、これがもし実現したならばすぐれて公益的効果を及ぼすものである。島社会という枠をこえて、島外の都市生活者まで含めた不特定多数の利益に寄与するものと考える。しかし反面、空き家そのものはあくまで個人の財産である。したがって空き家の維持活用策とは、空き家のもつ社会的資産としての側面に注目しつつ、その私有財産としての現実に充分配慮して行われることが不可欠といえる。

①コーディネート・システム

空き家の意義、可能性のところで示したとおり、空き家の活用方法は多岐にわたり、さらにそれぞれが関連しあう。一軒の空き家の利用でも様々な意義や可能性が重複することになる。したがってそれらを常に見渡し、もっとも効果的な形で組み合わせつつ実現することのできる仕組みが必要である。

またそのためのコスト負担の問題がある。たとえば空き家の維持管理にかかる費用負担をどうするか。受益者負担の観点からいえば、空き家利用が不特定多数に寄与する部分は行政が補助金などのかたちで、特定の利用者がある場合はその利用者が使用料や家賃で、さらに資産の維持管理という面では所有者がたとえば管理委託料などで、それぞれの受益に応じた負担をすべきである。利用の態様に応じた適正な負担配分を検討し、各当事者の合意の下に運用していくことになる。

こうした機能をになうコーディネート・システムは、社会的責任や継続性への信頼感など考慮する必要がある。とすれば個人や任意の組織より、できれば法人をもってあたることが好ましいだろう。もっぱら公共性、公平性を重視して行政内におく方法、公共性に民間の専門性、柔軟性などを加味して公益法人、N P O 法人、企業組合などで行う方法、効率性、経済性に重心をおき営利企業の体裁をとる方法など、いくつもの選択肢が考えられる。

②空き家維持、活用の試行によるイメージの共有化

これまで述べてきた空き家の意義、可能性、および活用やコスト負担配分のシステム化は、佐渡にかぎらず他地域でも現実にほとんど社会的経験の蓄積がない、あるいは模索が始まりつつあるといった状況だろう。いわば前例のない試みとして踏み出すことになる。

そこでいきなり制度化、システム化を目指すのではなく、まずは特定の地域、特定の空き家に関し、短期単発の試行として行うことが適當だろう。そのことでシステム実施にあたってのリスクを最低限に抑えつつ、空き家の持つ意義や可能性について、また改善すべき問題点についても実体験をふまえた共有化が、当事者間（空き家所有者、利用者、行政、地域等）でおこなわれることになる。そうした試行段階をふまえることで、はじめて有効な仕組み、システムは準備されるにちがいない。

2-3. 各方面との関係づくり

さて、今回の活動の目的の三つ目は、空き家をめぐる多様な主体との関係づくりであった。まず行政は、佐渡島内の10市町村のうちこれまで付き合いのあったいくつかの自治体に打診した結果、両津市と畠野町が共同作業に応じてくれた。この二つの自治体では、域内の空き家に関する調査の機運があつたこと



空き家の新しい住人と来訪者

も幸いした。地区長ヒアリングや所有者アンケートについては、行政に対する信頼感があつてこそ実施が可能になったと考える。

また当会メンバーがヒアリングに訪問した地域は12ヶ所にのぼるが、そのことで空き家をかかえる地域との接点が生まれた。くわえて本調査のことを伝え聞いた空き家借用希望者との関係もいくつか出来た。

これらの関係は、今後の空き家をめぐる取り組みに大いに生かせるものである。

III. 活動の効果及び今後の課題

3-1. 活動の効果

佐渡に「空き家」という社会問題」が確固として存在すること、および空き家は負の財産のみならず、活用によっては意義、可能性の高い社会的資産となりうるという理解の萌芽をつくることができた。こうした理解、とりわけ「社会的資産」としての見方は、現時点では当会メンバーとその周辺および行政担当者の一部での共有化にとどまっている。ただしそこから佐渡の内外に広く理解を波及させていくための最小限の基盤は、この一年の活動で固めることができたと考える。

3-2. 今後の課題

まず行政との連携について、今回は2自治体にとどまること。今後はこの二つの自治体との関係を進展させつつ、また2004年3月に迫った「佐渡市」誕生（島内全10自治体が合併）を見すえつつ、県をはじめ他の自治体、およびそのエリアの地域住民との関係づくりを行っていく必要がある。

二点目としては、空き家所有者との直接の関係づくりである。今回の活動では所有者との関係はアンケート調査を通じての間接的なものであった。今後は直接顔の見える付き合いを築き、共通のテーマである「空き家」に向っていきたい。

三点目としては前述したような、「空き家の維持・活用の試行」を実際にやってみることである。行政や地域、空き家所有者の関係づくりもこうした具体的な実践を通じてより進展するにちがいない。

佐渡で空き家はよみがえる
チャート図



<団体活動データ>

■佐渡住環境研究会

活動テーマ	佐渡島における空き民家の維持・活用に関する調査
活動目的	佐渡島の風土に根ざした暮らしのあり方を求め、伝統と未来をともに見据えた住環境や集落景観の保全と創造を目指す
設立年月	2001年1月
代表者名	光井 高明
活動地域	新潟県佐渡島（両津市及び佐渡郡）
メンバー	メンバー数6名（地元地区内住民4名、地区外NPO職員2名）

●団体設立の経緯

森林作業、自然エネルギー活用、里山保全活動等の環境をテーマにしたメーリングリストを通じて、2001年1月に設立された。メンバー各人が、佐渡の風土に根ざした暮らしを求め、そのあり方を模索するという共通の問題意識を有していたことが、団体設立のきっかけとなった。

●活動地域図



佐渡島の面積は845.6km²、東京23区の1.5倍に相当する。北に大佐渡山脈、南に小佐渡山脈が走り、中央に国仲平野が広がっている。国仲平野の東に両津湾、西に真野湾が深く入りこみ、洋上に浮かぶ蝶の形をしている。島内には1市9町村が存在する。

気候は佐渡沖を流れる対馬海流の影響で冬暖かく、夏は涼しい。

人口は減少を続けており、ピーク時1950年の12.6万人から、2000年は7.2万人となっている。平成37年人口は約5万1千人と推計される。また、高齢化率は現在33.5%あり、県平均の22.3%を大きく上回っている。

米、おけさ柿、カキの養殖のほか、島の4分の3が山林で、森林資源も豊富で、近年はナラ原木のシイタケ栽培が盛んである。

●これまでの活動

- 2001年1月 佐渡のカキ殻による貝灰漆喰試作 →建築への地域素材の活用
2001年5月 真野町新エネルギー・ビジョン勉強会参加
→住宅での自然エネルギーの活用
2001年5月～ 両津市内の里山管理作業及びトキの棚田復元作業への参加
→里山の担い手定住の必要性及び集落景観の再評価
2001年8月 島内の空き家数調査の実施 →約1700戸の空き家を確認



10市町村ごとの空き家数	
両津市	301
相川町	390
佐和田町	210
羽茂町	52
赤泊町	101
小木町	84
金井町	167
畠野町	212
真野町	104
新穂村	91
計	1712戸

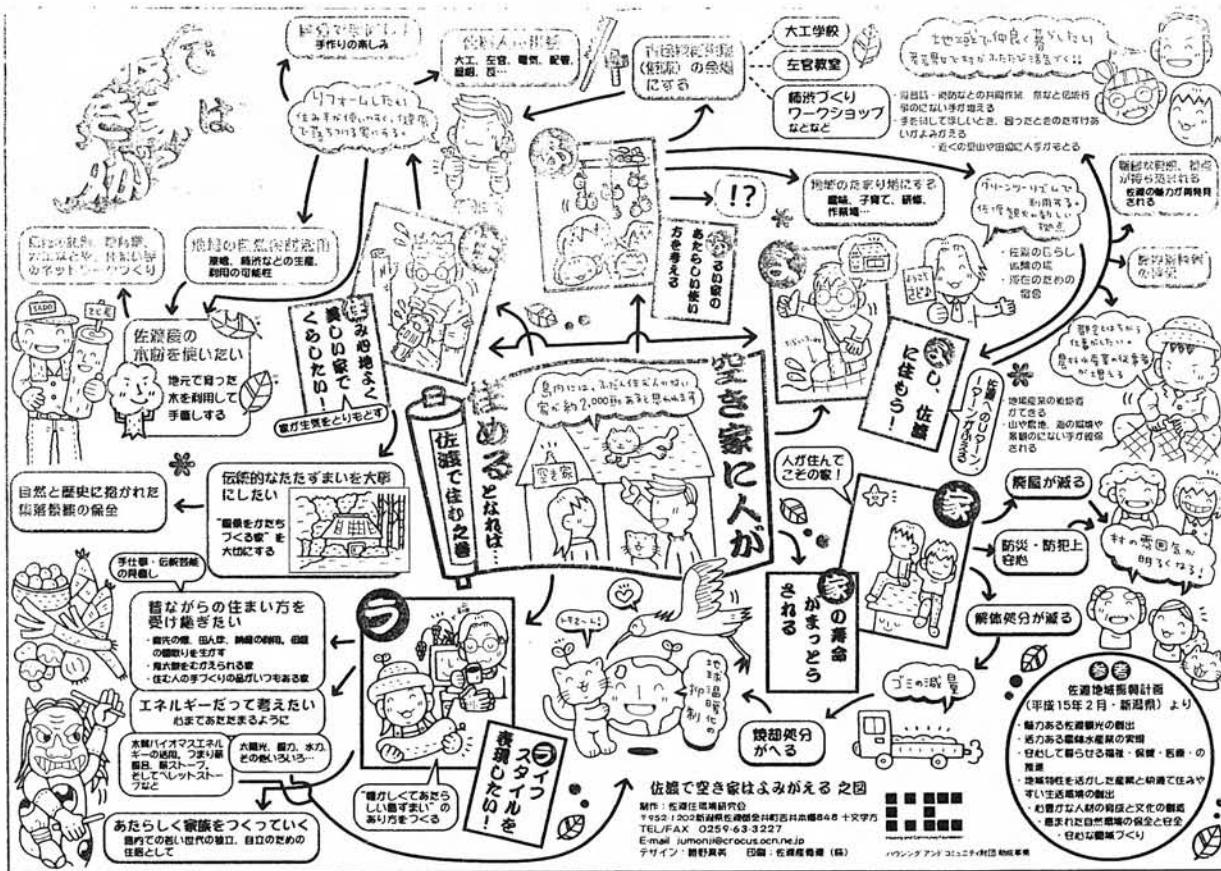
●助成対象活動

- 行政（新潟県佐渡地域振興局、両津市役所、畠野町役場等）および島外の佐渡出身者の会（関東畠野会等）との関係づくり
- 両津市役所、畠野町役場と共同で、島内の空き家に関する現状把握－アンケートの実施

<アンケート調査票の質問項目>

- 質問1： 両津市にお持ちの住宅を、誰がどのくらい使っていますか
質問2： 両津市にお持ちの住宅を使う場合、それはどういう時ですか
質問3： 両津市にお持ちの住宅は、建物や敷地の手入れ、維持管理についてどのようにしていますか
質問4： 両津市にお持ちの住宅の手入れ、維持管理についてお困りの点はありますか
質問5： 新たに両津市に住みたいという人に、住宅を貸すと言うことはあり得ますか
質問6： 両津市での暮らしを体験してみたいという人に、所有者が使用していない時期に、短期間（1ヶ月～3ヶ月程度）住宅を貸すと言うことはあり得ますか
質問7： 新たに両津市に住みたいという人に住宅を譲渡すると言うことはあり得ますか
質問8： 居住する人の以内住宅の手入れ、維持管理または活用について、行政その他に望まれることはありますか
質問9： 回答者についてお聞かせ下さい

- ・アンケートの結果を受けて、空き家の維持・活用のための提案（「佐渡で空き家はよみがえる之図」作成）



アンケートの結果、所有者が正月やお盆に帰省する意向が強い半空き家が多いことがわかった。そこで当団体は、

1. 都会でリタイアした人が、田舎で暮らしたいと考えた時に集落そのものを体験するエコツーリズムの短期滞在型施設、
 2. 小中学校の総合学習がらみで利用してもらう学校の付属施設等の活用を考えるにいたった。

● これからの予定

これからの予定としては、①行政との連携の強化、②空き家所有者との直接的な関係づくり、③実際に空き家の維持・活用の試行、の3点があげられている。佐渡島では、現在全島を一市にするための合併協議が続いている。本活動は、行政との連携のもとに進めていることから、合併後の行政のあり方を見極めながら、活動方針を検討していくこととしている。

市民の手作りによる町屋小路 600 mの黒塀建設と灯の祭

チーム黒塀プロジェクト
(新潟県村上市)



黒塀が続く町並み1



黒塀が続く町並み2

I. 活動の背景と目的

新潟県村上市は県内でもっとも古い城下町と言われ、歴史的建築物が多数残っています。しかし地域の人はその価値に気が付かず、それを充分活かしてもおらず、逆に町は近代化が進んでき、中心市街地は衰退を続けていました。そんな折危機感を強くした市民が立ち上がり、市民の力で伝統的建造物である「町屋」に光を当てたイベント「町屋の人形さま巡り」(3月1日～4月3日)、「町屋の屏風まつり」(9月10～30日)を行ない、これが大成功して町に春、秋には数万人もの人が訪れるようになったのです。村上にとって大変革でした。このような流れの中で市民の意識は変りだし町に対する誇りを持つようになってきました。また「村上には旅人が訪れるようになったのだ。昔のような風情ある町にしよう」といった町並みの保存、再生の気運が高まってきました。そこで「誇りある町づくり」と「地域の活性化」のために住民が発起人になって市民グループ「チーム黒塀プロジェクト」が結成されたのです。

1-1. 黒塀プロジェクト

村上には歴史的建造物が多く集まる小路（安善小路と周辺）があります。村上の中でも城下町の風情漂う場所ですがやはり充分には生かされていませんでした。風情ある黒塀（黒板塀）もある一方、現代的ブロック塀が多く占める半端な状態でありました。しかしここは可能性を秘めた場所で、少し手を加えることによって小路の景観が見違えるほど変わるはずだと思いました。黒塀に変えることでここが地元の人にとっても風情ある安らぎの場所になり、この小路が歴史的建造物が集まる「黒塀通り」として名物スポットとなり今まで以上に旅の人が立ち寄る場所になるのです。商店街の活性化にもつながり、さらに村上の発展のための力となります。この夢を実現するために行なう黒塀化計画「黒塀一枚1000円運動」とこの黒塀の小路で竹の灯篭を使った灯りのまつり「むらかみ宵の竹灯篭まつり」の2本柱が「黒塀プロジェクト」です。

1-2. 黒塀一枚1000円運動

黒塀はブロック塀を壊して新たに作るのではなく、ブロック塀の上に板を打ち付け表面のみ黒塀に変える手法で行うものです。安い工事で安くでき、景観の向上には著しい効果を果た



黒塀プロジェクトの案内
(チラシ)

します（個人のブロック塀を使うのですから家主の同意をうけた塀に限って行ないます）。「黒塀一枚千円運動」とは市民をはじめ幅広い人から黒塀一枚1000円の寄付を募り、集まった寄付金で黒塀を作っていくものです。黒塀の製作は大工まかせではなく子供からお年寄りまであつまり市民の手作りで行なうものです。これにより市民がお金を出し、市民が手作りで作る、市民の愛着のある黒塀となるのです。

1-3. 宵の竹灯籠まつり

単に黒塀を作るだけではなく、できた黒塀の通りに光りを当てる光と音のアートプロジェクトです。門松のように斜め切りした竹3千本（高さ40～60cm）にロウソクの灯りをともし、この小路約200mと料亭の庭やお寺の境内、民家の庭に並べます。3千本の灯りがユラユラと揺れ動くさまは実に幻想的な雰囲気を作ります。この雰囲気の中で料亭の座敷、古民家、お寺のお堂、境内を使い伝統音楽である雅楽、琴、三味線、尺八、和太鼓、ピアノなどを市民の演奏家が演奏します。光りと音のこの催しは今まで村上にはなかった夜のおまつり（アートプロジェクト）です。これを継続していくば県内外に名を轟かす村上の名物イベントに発展する可能性が強い企画であると思っています。

II. 活動の内容

2002年の一年間で黒塀プロジェクトは動きだし約110mが市民の力で黒塀になりました。「宵の竹灯籠まつり」は10月に2日間行なわれ5千人もの人が訪れ、内容的にも非常にレベルの高い光と音のアートプロジェクトになり大きな話題となりました。黒塀の並ぶ城下町らしい通りを整備し町並み景観を整えるだけに留まらず、この通りに更に光りを当てるための「宵の竹灯籠まつり」を行う、これは村上に芽ばえ始めた活性化の動きと町並みの保存、再生の気運に大きく拍車をかけることになったのです。

2-1. 「黒塀一枚1000円運動」140mの黒塀完成

当初の計画は3月から一ヶ月間行なわれる「町屋の人形さま巡り」が終了してからの黒塀一枚千円運動で寄付金を募り、6月から8月迄のうち一定区間を市民の手作りで黒塀にする計画でした。しかしこの黒塀プロジェクトが、何も始まっていない1月に新聞で大大的に取り上げられ、チラシを作る前から寄付金が集まり始めたのです。さらにメンバーの中から、寄付金を本格的に集めるためにも一区間でもいいからサンプルとなるような黒塀を作つて披露したほうがいいのではという意見や、どうせやるなら観光客が大勢来る「人形さま巡り」の前にこのサンプルを作つてしまおうではないか、などの積極的な意見が出さ



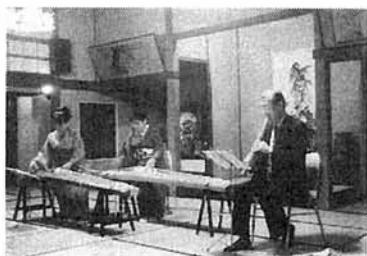
宵の竹灯籠まつりの案内
(チラシ)



黒塀一枚1000円運動で
寄付金を募っている



宵の竹灯籠まつりのようす



宵の竹灯籠まつりでの和楽の演奏会

れました。結局、2月の末に60m区間を黒塀にしてしまったのです。そしてかつて武家屋敷のイベントで使った簡単な塀（仮塀と呼ぶ）が保管されていることが分かり、これを使用してもいいということになりました。黒塀プロジェクトの黒塀は縦板形式でありブロックに直接張り付けていくものですので、予定の黒塀とは違うのですが、これも仮の塀としてとりあえず使用すればベロック塀の小路が一時的であるとしても、広い範囲で景観ががらっと変り、市民もこれは良いと関心をよせるようになるのではないかと考えました。予定外であった仮塀90m分も取り付け、黒塀60mとあわせ合計で150mの塀が3月を前に完成したのです。「夢を語っていたら本当に実現してしまった」と早期において予想以上の長い区間が黒塀と仮塀に変身してしまったことに、中心メンバー自身はみな驚いたのです。集中的に行なった第一期工事の2月24日は青年を中心に子供からお年寄りまで60人ほどが駆け付け、釘打ちや黒ペイント塗りなどそれぞれができる仕事を行ないました。テレビ、新聞などのマスコミも多数来て報道され、村上の黒塀プロジェクトは県内に一举に広まったのです。7月の下旬と9月の始めに2期、3期の工事を終え現在、黒塀が110mと仮塀が20mとなっています。

2-2. 「宵の竹灯籠まつり」の実施

竹灯籠まつりは黒塀の通りにある料亭「新多久」で「竹あそび」と称して独自で行なったことがきっかけで始まったことです。「もっと規模を大きくしてこの小路の200m区間でやろう」「村上には今まで夜の灯りのまつりはなかった。あっと驚くようなことをやって村上の名物を作ろう。」と意気込んで計画ができました。計画がすぐにできたのも実は（竹は加工することと技葉を処分することが非常に厄介なのですが）、「新多久」の口つきで同じ郡内にある栗島浦村から竹を既に加工したものが、1本100円の破格値で取り寄せ注文ができると知ったからなのです。あとは竹を並べてロウソクを入れ火をつけるだけでいいと実は安易な動機より始まったのですが、物事そんなに簡単に行くものではありません。竹灯籠まつりの2ヶ月前になって突然、竹の加工をする人からとても大変なので3000本は無理だ、1000本にしてくれと連絡がきたのです。残りの2000本を一体どうするということになり、慌てて大工さんに相談、竹を譲ってくれる人を探し、仲間を集めて竹を切ろうということになりました。山の斜面の竹林より土まみれになり竹を切り出していました。竹を切る若い仲間を集めることから大変で、竹切りの作業も悪戦苦闘しながら行ないました。切りだし作業が終ったのは竹灯籠まつりの1週間前のことでした。

また「竹灯籠が3000本あっていくら美しくても単に見て終りになってしまう。もうひとひねりしたほうが良いのではないか」との意見から、急きょ普段はなかなか聴くことのない和の音楽

演奏をやろう、料亭や古民家の座敷、お寺のお堂や境内でやつたらきっと素晴らしいということになりました。さっそく市民で和楽をやっている人を調べ、雅楽はじめ琴、三味線、尺八、和太鼓、大正琴、津軽三味線、ピアノの演奏家に参加依頼をし、嬉しいことに皆快くボランティアで引き受けってくれました。この演奏家に呼び掛けたのがなんと9月初め、ドタバタとことは進み、ポスターが丁度1ヶ月前に間に合いました。天気にも恵まれて本番を迎えるもドタバタの繰り返しのなかで、やっと開幕しました。1日2500人（2日間で5000人）の人が訪れるこの小路始まって以来の大賑い、予想を上回る光りと音の織り成す素晴らしい芸術祭となり、訪れた人は皆感動してくれました。この竹灯籠まつりは、今後もっともっと凄いものになっていくと確信しながら全て無事終了しました。

黒塀のできるまで



III. 活動の効果及び今後の課題

「黒塀一枚1000円運動」の課題としては黒塀にしたい塀であっても住人の同意が得られず手が付けられないところもあることです。黒塀の良さを時間をかけて理解してもらい、あせらず続けて行こうと思っています。また寄付金は90万円もあつまつたのですが工事費用が予定よりもかかり、余裕をもってはやれない状況です。背水の陣の気持ちで、先ずは作ってしまってそのあと寄付金を必死になって集めようということで、3期の工事は金足らずのところで行なったりしました。またこの運動を理解し、自費を投じて自分の敷地のブロック塀を黒塀に変えてくれる住人も現われたことは非常に嬉しいことでした。

「竹灯籠まつり」の課題は、これから規模を拡大しもっと広い範囲でやれたらもっと凄くなるのですが、それにはスタッフと協力者、そして資金が必要だということです。この問題をクリアしながら全国にも名を轟かす素晴らしいアートプロジェクトに発展させていきたいと思います。

この「チーム黒塀プロジェクト」の中心メンバー2人は「町屋の人形さま巡り」「町屋の屏風まつり」の主催団体「村上町屋商人会」のメンバーでもありますが、今まで話題を巻き起したこれらの町屋のイベントで関わることのなかった市民が、この黒塀プロジェクトでは参加、協力し町づくりの一端を担ってくれました。新しい市民が町づくりの仲間に加わってくれたということは、和が広がりもっと色々なことができることであり、町を思う気持を持った市民が増えることは、これからもっと町が良くなつて行くということにつながると思います。今の村上は「村上町屋商人会」や「チーム黒塀プロジェクト」の市民自らの心意気で行なうこれらの取り組みに刺激を受け、行政や商工会議所に頼むという姿勢から、それらを当てにせず町は自らの心意気で良くするという考えを持ち始め、行動する人達が増え始めました。黒塀プロジェクトなど単独での成功の範囲に留



まらず、刺激となり連鎖し合って広がっていく今の町の風潮は
実に素晴らしいと思います。町を本当に良くするにはやらなければいけないことは山程ありますが、市民の心意気が他の市民
の意識を変え、行政も変え、町を変えていくと信じこれからも
活動に取り組んで参りたいと思います。

<団体活動データ>

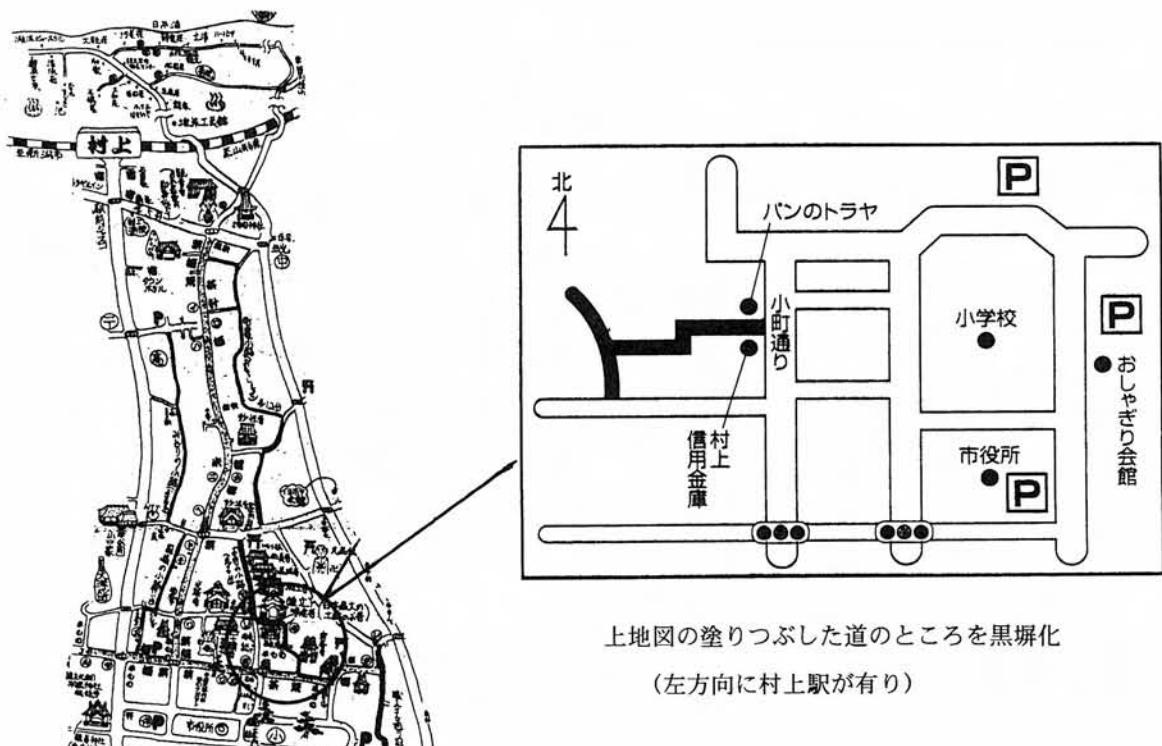
■チーム黒塀プロジェクト

活動テーマ	市民の手作りによる町屋小路 600m の黒塀建設と灯の祭
活動目的	村上市内の歴史的建造物が集まる小路において、ブロック塀を風情ある黒板塀に変えることで、歴史的景観を復活させ、誇りあるまちづくりと地域活性化につなげること。
設立年月	2001 年 10 月
代表者名	山貝博
活動地域	新潟県村上市
メンバー	12 名 商店主、住職、建築家、写真家等

●団体設立の経緯

市街地衰退の問題を抱える、かつての城下町村上市で、危機感を覚えた商業者有志（村上町屋商人会）によって歴史的建造物や歴史的資産を活かしたまちづくり、活性化を図ろうと、「町屋の人形さま巡り」、「町屋の屏風まつり」などのイベントを行った。これらの街を回遊するイベントによって多くの人が村上市内を歩くようになった。そこで、村上の町並を保存・再生しようとする気運が高まり、村上町屋商人会のメンバーや他の市民とともに、歴史的建造物多く集まる小路を昔ながらの黒塀が立ち並ぶ通りにしようと結成された。

●活動地域図（活動位置図）



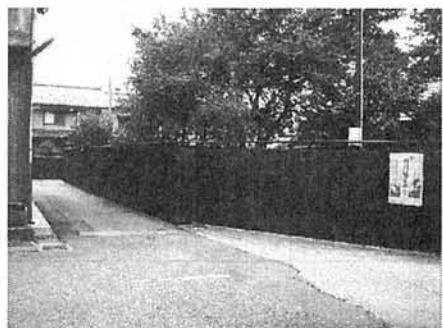
●これまでの活動

所有者の了解を得たブロック塀の上に黒板を打ち付け、黒塀に変える手法をとった。黒板は市民から板一枚 1000 円で寄付を募った。黒板の製作と取り付けは市民の参加を募り、手作りで行った。

2002 年 2 月 3 月から行われる「町屋の人形さま巡り」の前に小路 60m 区間を黒塀に変える。



取り付け作業の様子



取り付けが終わった状態

●助成対象活動

2 期にわたり、黒塀の取り付け工事を行う。また、黒塀を取り付けた通りで夜に風情ある空間を演出しようと、ろうそくを入れた竹 3000 本を並べる「竹と灯籠まつり」を行った。そこでは料亭や古民家の座敷、寺のお堂の中で市内の琴や三味線などの和楽器ができる人を呼び、演奏してもらった。

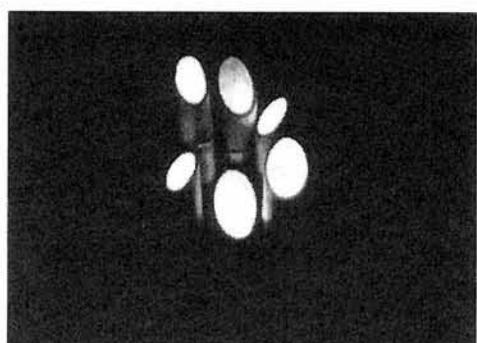
2002 年 7 月 第 2 期黒板取り付け

9 月 第 3 期黒板取り付け

10 月 竹灯籠まつりの実施（2 日間）



竹灯籠まつりでの雅楽の演奏



竹灯籠

●これからの予定

引き続き、黒塙に黒塙にする活動は行う。竹灯籠まつりも今後毎年開催してゆく予定。



村上町屋商人会が開催する
屏風まつり

街並み、コミュニティーを壊さない駐車スペースづくり

やつお街並み研究会
(富山県八尾町)



八尾町全景



「おわら風の盆」開催時の町



街並みを壊さないよう配慮した駐車スペースも一部見受けられる

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

富山県の中南部にあり、岐阜県に接する八尾町は、1年に3日間、町が一変する祭り「おわら 風の盆」が開催される町として知られています。また八尾は、おわらだけでなく曳山、和紙などの先人の築いた文化を當々と受け継いできた職人たちの伝統が息づく町でもあります。そんな伝統文化を感じさせる町には歴史の流れを偲ばせる古い町並みが残っています。

八尾では毎年10月に、町家や通りを展示会場とした美術展「坂のまちアート」が開催されます。その会期中に、出展作家と主催者メンバーである地元住民が、町の今後のあり方について話し合ってきました。それがやつお街並み研究会の始まりです。

正式には2000年に、美術展出展作家である建築家と地元の関係者をメンバーとしてスタートしましたが、昨年から、都市や街の歴史的研究を行っている法政大学陣内秀信研究室がグループに参加し、多様なメンバーで活動を行っています。

1-2. 目的

グループ設立の目的は、おわらの舞台としての街並みと、生きた町としてのコミュニティーの共存を考察し、より理想的な町づくりを行うことです。伝統的なものを維持していくことと、現代の生活に即した町づくりにはいろいろな点でズレがあり、八尾でもそのような問題が目立ち始めています。

その一つに車、駐車場の問題があります。間口の狭い密集した町家型集落では、駐車スペースの設け方や道のあり方など車との関係を間違うと美しい街並みの連続が失われてしまったり、コミュニティーの崩壊にも繋がります。住民には、街並みの連続を破って車のための空間を確保するか、スペースに余裕のある他の土地へ移るかの二通りの選択肢しかありません。

今回の活動は、この「街並みと車」の問題に第三の選択肢を模索したものです。町と車の理想的な関係を検討し、町づくりの可能性を提示しました。

II. 活動内容

2-1. 町を理解するために

グループ結成当初は、八尾町に生じている諸問題に対して、解決策の提案を積極的に行うことを活動の中心に考えていましたが、提案を行うより先に八尾を理解しなければならないこと

に気づきました。そのため、都市や街の歴史的研究を行っている法政大学陣内秀信研究室のグループ参加に伴い、もう一度原点に戻り街を読み取る作業を行おうと、調査を行いました。

その具体的な内容は次の通りです。

- ・街の成り立ち（旧町）を知るために古い資料を探し、分析し、町の成り立ちを図面化する。
- ・町家を実測し、図面（平面図、断面図）を作成し、生活空間を読み取る。
- ・実測の際にヒヤリング調査を行い、住民の考え方や問題点を理解する。
- ・町家の連續写真（ファサード）を撮影し、分析しデータ化することで街並みの特徴を探る。
- ・航空写真を撮影し、鳥瞰的に町を読み取る。

このような活動によって、町を深く理解し、より身近なものになったと思います。また、この活動内容をグループメンバーだけでなく、町の人にも見ていただこうと展示を行いました。

2-2. 今回の具体的な活動

やつお街並み研究会は、下記の三つの活動を中心に、月1～2回の打合せと前記の研究調査を進めながら、多様な活動を行いました。八尾町に対しての有効性、実益性を重要視して、なるべく多くの住民に関心を持ってもらうことを考えながら取り組みました。

(1) 町づくりについての講演会、町民を招いての座談会

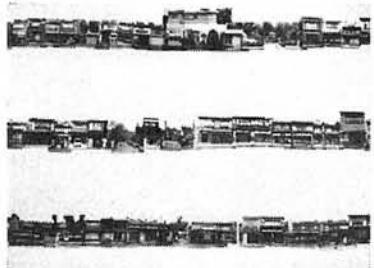
町民に問題点や方向性の認識をしてもらい、まちづくり気運を高めようと、都市史の専門家である陣内秀信氏による講演会を企画しました。八尾と同じくらいの規模のイタリアの小さな町についての講演を行い、町の今後のあり方を探りました。またやつお街並み研究会の紹介も行い、後に行う活動の予定を説明しました。

講演会の後で座談会を行い、町民と意見交換を行いました。座談会の出席者は町づくりに積極的な方が多く、グループの活動を好意的に評価していただきました。

(2) 「坂のまちアート」において研究提案の展示、シンポジウムでの発表

「坂のまちアート」は八尾住民、作家、観光客が一体となって行われるイベントです。そこで展示は町民、関係者に直接アピールすることとなり、町について語り合うきっかけになったと捉えています。

提案内容としては可能性のあるアイディアをなるべく多く提



町屋の連續写真



陣内秀信氏による講演会



町屋を展示会場とした「坂のまちアート」

示し、解決策を限定しない方法としました。これは展示を見た町民の意見をまとめて、もう一度検討しようと考えたからです。

(3) 研究、提案のパンフレットの作成

(2)で行った研究提案の展示内容を再度検討し、編集してパンフレットにしました。1年間の活動のまとめとして、地元関係者に配布しました。このパンフレットの内容については今後も話し合い、考察していく予定です。

III. 活動の効果及び今後の課題

3-1. 活動の効果

八尾の住民はすごく保守的な人と活性化を計ろうとする積極的な人の両方がいます。後者からは非常に反響があり、好意的な評価を得ました。提案したアイディアを具体化したいという声も挙がりました。

私達の活動は提案、アイディアを示しただけで、具体的には何もできていません。将来、私達が示した内容が町につくられ、良くなっていくことを願っています。

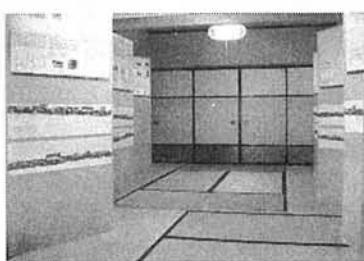
3-2. 現在の問題点

やつお街並み研究会は、なるべく開かれた会を目指したため、メンバーが不確定でグループの枠組みがはっきりしないことが問題としてあげられます。また、多様なメンバーがいるため、とりまとめに苦労することがあります。しかし、活動参加の自由なところなどは、情報が集まりやすく、良い点でもあると考えています。

3-3. 今後の課題

現在、八尾町では個別排水（共同浄化槽）から下水道への排水方式の切替え工事が行われています。この工事の際に町家の建て替えが行われることが多く、急速な街並みの変化も予想されます。やつお街並み研究会では、この変化が街並みの崩壊にならないように、建て替えの指針となる提案を行いたいと考えています。

また、八尾町ではセカンドハウスとして町家の使用が多く、空き家が目立ってきています。この空き家問題にも取り組んでいく予定です。



「坂のまちアート」にて研究提案を提示



町屋調査



パンフレット作成作業

<団体活動データ>

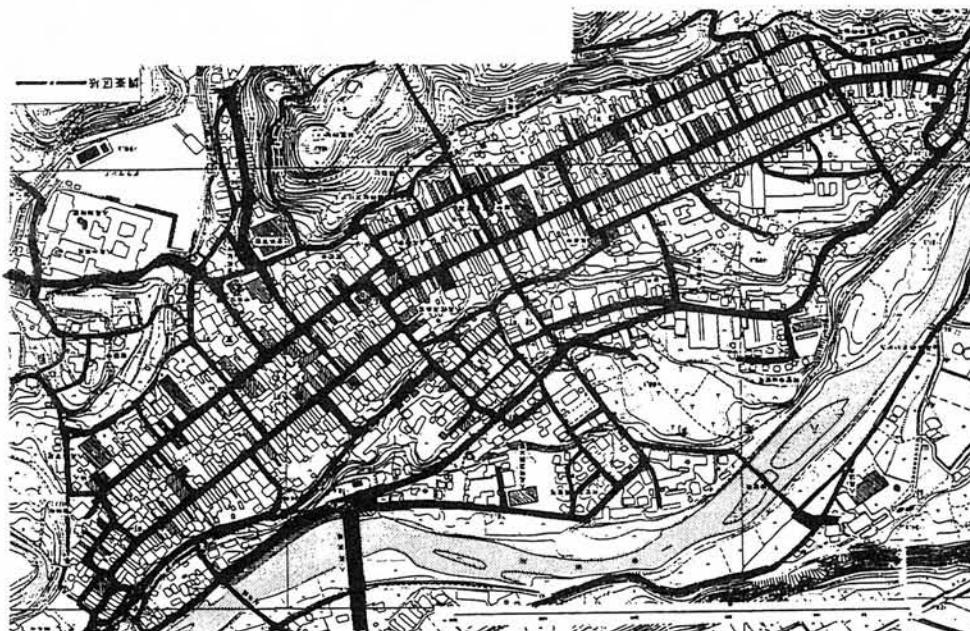
■やつお街並み研究会

活動テーマ	街並み、コミュニティを壊さない駐車スペースづくり
活動目的	「おわら風の盆」で有名な八尾町。その舞台として古い歴史のある街並みと、生きた街としてのコミュニティ共存の方法を議論、提案することを目的としている。「おわら風の盆」以外の八尾の魅力づくりを目指している。
設立年月	1999年9月
代表者名	山下隆司
活動地域	富山県八尾町
メンバー	10名 建築家、地域情報紙出版関係、デザイナー、会社員など

●団体設立の経緯

八尾町では毎年、町家や通りを展示会場とした美術展「坂のまちアート」が開催される。そのアート展に出展した東京在住の建築家と、主催者メンバーである地元住民が、会期中に今後の町のあり方について話し合ってきた。そして同団体の活動が始まった。

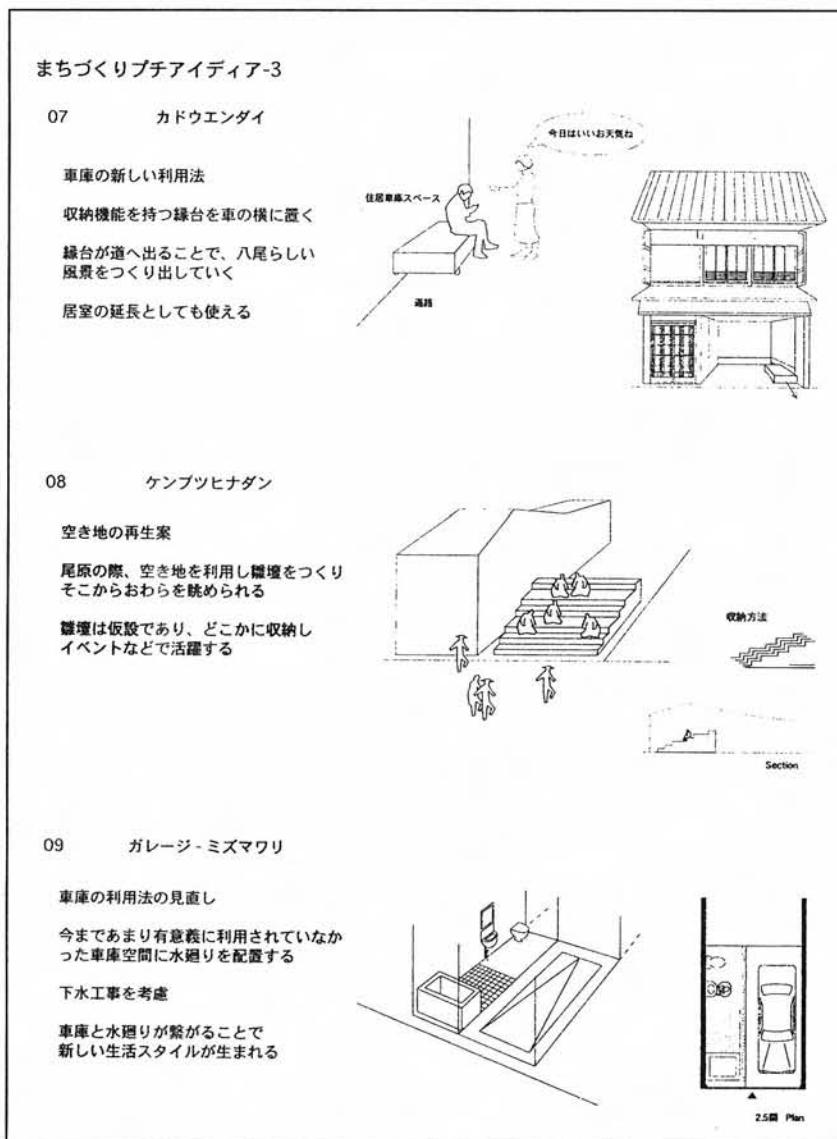
〈地域図〉



●これまでの活動

間口の狭い町家に「駐車スペース」の問題はつきものであり、街並みの連續を破って車のための空間を確保するか、スペースに余裕のある他の土地へ移るかの選択がせまられている。これまで「街並みと駐車スペース」に焦点をあてて取り組んできた。

2001年 八尾町諏訪町と東新町の街並みの現状把握や各住戸の車庫形態の分類、空きスペースの調査を行い、まちづくりプチアイディアとして住民に提案した。



2001年「まちづくりプチアイディアの提案」から一部抜粋

●助成対象活動

八尾町の町に成り立ちや町家の研究、住人へのヒアリングを実施し、まちづくりの提案を行った。

・講演会の開催

多くの住民に問題点や活動を理解してもらい、まちづくりの気運を高めるために、都市史の専門家を招いて講演会を開催。

・調査とヒアリング

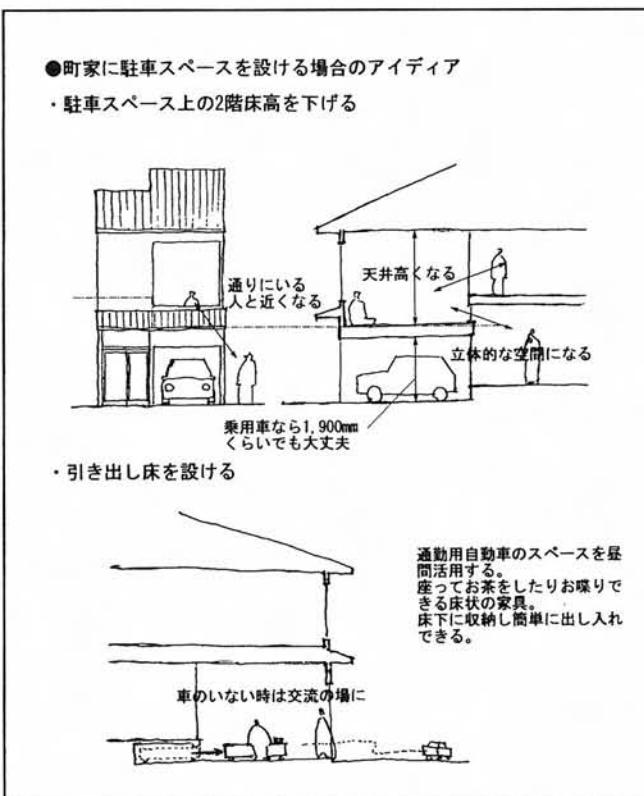
町の成り立ちを調べ図面化。町家の実測と住人へのヒアリングを行い、住民の意向などを整理。

・まちづくりの提案

調査結果をもとに、街並みに合う駐車スペースづくりなどを展示にて提案。解決策を提示するのではなく、複数のアイディアを提案することで、町について語り合うきっかけづくりとした。

・パンフレットの作成

展示で提案した内容をパンフレットにまとめ、地元関係者に配布。



2002年度「まちづくりの提案」から一部抜粋

●これからの活動

ひきつづき「駐車スペース」と「空き家」の問題に取り組む。当初の計画では、諸問題について積極的な解決策の提案を考えていたが、より町の現状にあった提案を行うために、町並みを読み取る作業や町の成り立ちを調べる活動をベースに活動していく。町並みの調査においては、都市や街の歴史的研究を行っている大学と連携して行う。

エコハウス建設を通した新世紀の住まいと環境の提案

富士エコハウスプロジェクト
(神奈川県藤沢市)

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

今世紀最大のテーマの一つが「人類と地球環境との共生」であることは疑いのない事実である。一方日本では木や土、紙という自然素材で家を作るという豊かな伝統があるものの、戦後の新建材の普及や経済原理で建物はスラップ・アンド・ビルドし、家は買うものという意識が根付き、現代において「環境と共生」する建築という視点はやっとはじまったばかりである。

欧米やオーストラリア、ニュージーランドでは環境意識の高まりと共に、自然素材の家を自分達の手で(セルフビルド)つくる運動が広がり、全世界にネットワークが出来ている。その中にあって、リサイクルした藁のブロックで壁を作り、それに土を塗って仕上げるストロー・ベイル・ハウスは環境負荷が少なく、断熱性があり、ローコスト、セルフビルドなどの面からも世界で大きく拡がっている建築である。日本でも数年前から建設がはじまつたが、日本の風土に合うかまだ未知数で、つくり方も各自が試行錯誤の段階でデータもオープンにされていない。

私たちはこれまで藁や土といった自然素材で家や場をつくる活動を独自に行ってきたが、この動きを日本に根付かせるため、ストロー・ベイル・ハウスを実際に建設しながらデータを取り、日本で自然素材やセルフビルドで家を作るアピールをすることが必要と考え、今回のプロジェクトを企画した。

1-2. 目的

エコハウス建設を通した新世紀の住まいと環境の提案

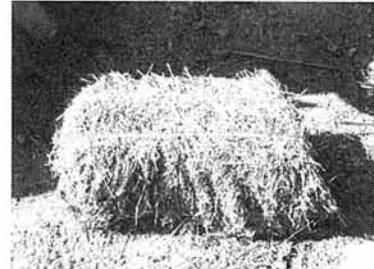
1-3. 方法

(1) 建設

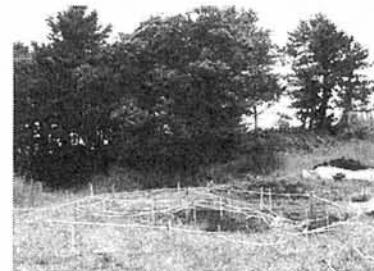
日本大学湘南藤沢キャンパス郊外にストロー・ベイルと版築工法を組み合わせた実験施設「アトムハウス」をボランティアと学生が部分的に職人さんの指導を受けながら自力建設する。

(2) データ収集

その過程と結果を学生が卒業論文と修士論文としてデータ化し、雑誌、ホームページ、チラシ、建築学会での発表などで一般に公開する。



藁のブロック



地縄張り

(3) ネットワークづくり

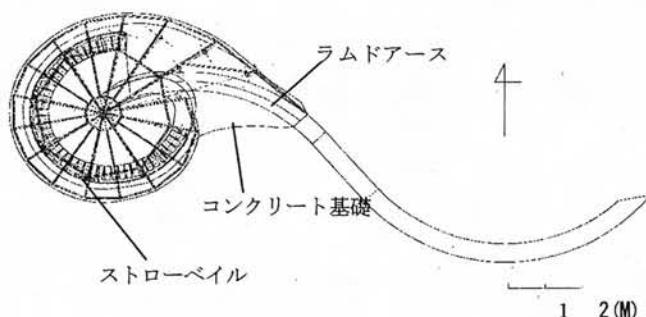
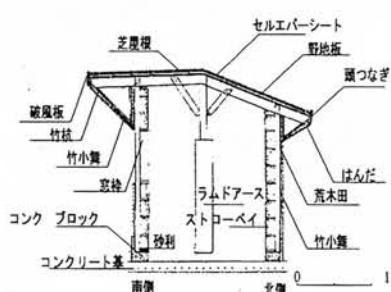
建設過程と建設後においてホームページやちらしを作成し、成果やデータを発表し、ワークショップ、全国交流会などを行うことにより、日本のみならず世界的な自然素材とセルフ・ビルドのネットワークづくりと一般への普及を行う。

II. 活動の内容

2-1. アトムハウス計画内容

2002年7月に富士エコハウスプロジェクト新組織として、遠野未来建築事務所、日本大学糸長研究室、職業能力大学校藤野研究室の3者共同プロジェクトとしてスタートし、主に遠野未来建築事務所が設計・デザイン、職能大が構造、日大が施工、データ収集を担当、実際の施工はエコハウスと日大が中心となり、ワークショップ参加者も含めたセルフビルドで行った。土壁指導は土蔵工法に詳しい左官の湯田工業の湯田 雄二氏、基礎指導は小関田中園が行った。

アトムハウス詳細断面



アトムハウス平面図(職能大藤野研究室作成)

(DATA)

建築面積 / 9.90 m^2 室外面積 / 12.56 m^2 室内面積 / 6.90 m^2

(設計・施工)

富士エコハウスプロジェクト

遠野未来建築事務所：遠野未来・高橋慎一郎・宇田川美穂

日本大学糸長研究室：糸長浩司・栗原伸治・佐瀬ゆかり・福森治樹・須藤拓哉・金子善敬・木村愛子・森下亜由美・吉岡亮

職業能力開発総合大学藤野研究室：藤野栄一・佐藤知美・和田佳麻里+ワークショップ・メンバー・地域の子供たち。

土壁指導：湯田工業 湯田雄二 基礎指導：小関田中園

工程は活動内容参照のこと。

(1) 設計概要

メインテーマは環境、地域と共生する自然素材による建築を自分達の手でつくること。材料は可能な限り自然素材、地元の

素材、リサイクルした素材を使うことを基本方針とし、セルフビルドで建設可能なやり方で細かい施工方法を検討した。

建物は日大の敷地が環境共生の実験場となっており、その中のビオトープの池や川の流れの延長上に配置され、その流れを受け継ぐ曲線のかたちで配置と全体構成を決定した。ストローベイルの円形の壁にラムドアース（版築）の円形の壁が入り込むかたちで、ストローベイルの断熱性とラムドアースの蓄熱性を組み合わせている。屋根は草屋根の予定である。冬の昼間に暖められたラムドアース壁が、気温の下がった夜間に熱を放出して、その熱をストローベイルが室内に閉じ込めて、室内温度が快適になることを想定しており、建物の規模は建築申請が必要ない 10 m^2 未満で決定された。

2-2. 施工

施工は土壁指導を湯田雄二氏、基礎を小関田中園に指導していただきながら、自分達のセルフビルドで行った。節目で何度も地元の子どもたちや全国から募集したセルフビルドに興味のある参加者を集めたワークショップを行い、彼らが重要な戦力になった。

(1) 基礎

基礎は地盤が悪いため、やむを得ずコンクリートのべた基礎を採用。それにコンクリート・ブロックで立ち上がりをつくった。

(2) 木軸

土台はヒバ材の板、柱となる丸太は地元神奈川のヒノキの間伐時を使用。梁材は職能大提供のツーバイ材を使用。

(3) ストローベイル

ストローベイルは地元農家から無農薬のものを 1ヶ 500円で分けていただき、約 100ヶ 使用。それを千鳥格子状に積み、上から竹杭を通す。つみ終えたベイルを土台に固定したフックで 90mm のマニラロープ（麻）で上下に圧縮し、固定する。それに土を塗り重ねる。

(4) 土壁

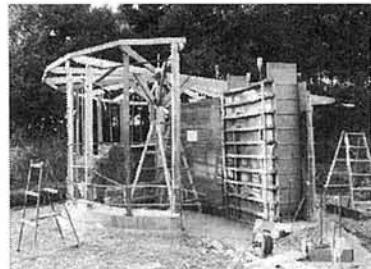
ストローベイルの外側に下塗り、中塗り、仕上塗りの 3 工程で土壁を塗り仕上げる。仕上げは土と土佐漆喰を混ぜたハンダを使用する。

(5) 竹小舞

竹は職能大提供。ベイル積み以前にアールの外壁面を竹で縦横に編んだ。これは日本の土蔵工法を取りいれたもので、前例がないもの。この竹小舞のためベイルの曲面積みがしやすかった。

(6) 土

土壁に使う土は地元神奈川のものは粘性がないため、埼玉・美里の粘土を使用。9月初旬に約 3.5 m^3 の粘土と同量の長藁を



木軸



ストローベイル約 100ヶ



土壁づくり

混ぜ、3ヶ月寝かして荒壁として使った。

(7) ラムドアース

敷地の土（敷地工事の時の残土）：消石灰=8~10:1の割で突き棒で突き固めた。乾燥後のひび割れ対策として途中から保水性のあるにがり（代用として塩化マグネシウム）を1/50で混ぜた。

(8) 屋根

野地板に接着剤にホルムアルデヒドを含まないFco合板の24mmを使用。防水はセルフビルト可能な屋上緑化用のゴムシートを2重に接着し、その内外にアスファルトルーフィングを貼り、計4重にシートを重ねている。最終的にその上に50mmの土を載せ草をはやす予定。

(9) 施工期間

ストローベイルハウスの唄い文句にローコスト、セルフビルド、短い工期というものがあるが、実際はつくる内容によりさまざままで、相当の時間と手間がかかることは間違いない。そして今回のテーマである自然素材や環境共生、持続可能性を突き詰めると、計画当初は仮設で数年の耐用年数のものを簡易に作り、2003年4月までに終わらせるということだったが、建物を最低数十年持たせるつくり方で時間をかけて継続的につくるという方向になった。今回は学生が主体の施工体制で、その過程でデータを取りながら施工したいという学校の要望もあり、今期は土壁を外のみ仕上げ、来期に中を塗るという感じで少しづつ様子を見ながら仕上げる方針とした。最終的には平成15年8月完成を目指している。



ストローベイル積み



子供ワークショップ集合



日干し煉瓦を作る子供たち

2-3. 地域とのつながり・ワークショップ

このプロジェクトが環境・地域共生をメインテーマにしており、できるだけ地元の素材や人材を集めてプロジェクトを進めた。2002年8月には地元のネットワークづくりに8月24日藤沢市弁慶果樹園でのエコロジー・フェスティバルに参加した。神奈川県、特に湘南地域では環境をテーマにして活動している方や団体が多く、そこで得たネットワークがその後のプロジェクト推進の大きな力となった。特に今回土壁指導として参加していただいた土蔵工法に精通されている地元大和市在住の左官・湯田雄二氏の参加が得られたことは大きなことで、計画内容の質や幅が大きく拡がった。

また今回プロジェクトを共同している日大の糸長助教授が日本における環境関係の大きな組織パーカルチャーセンタージャパン（P C C J）の代表で全国に大きなネットワークを持っており、参加者を呼びかけ、地元の丸太の間伐材手配、敷地の一角に土のかまど（アース・オーブン）づくりなどが実現できた。初回ワークショップの前日2002年11月8日に、小学校2年生全生徒90人が土の体験学習としてトーテムポールづくりを

行い、計画内容に彩りを沿えた。

ワークショップとしては施工期間中、節目で3回実施した。地元の小学校の子供が20人、全国から大人が20名ほどの参加があり、友好的なムードの中作業が行われた。2003年3月2日には第一期打上げ式を行った。

地域コミュニティとのつながりという面では前述の地元のネットワークの他に、今回地元の行政にこのプロジェクトに対する賛同が得られ地元小学校が課外学習として参加してくれたことが大きな収穫で、このプロジェクトが地域に開かれた場となりつつある。また子供のワークショップを行い感じたことは、地域コミュニティで大人と子供が時間を共有する機会が少なく、今回のように地域に開かれた場がある事の重要性である。今後も継続的に地元小学校などと交流する機会をつくりたい。

また一般ワークショップは雑誌とEメールでの呼びかけを中心だったが全国から反響があり、ストローベイル・ハウスやセルフビルド、土壁づくりへの関心の高さと全国へのネットワークの広がりを感じた。参加者の感想はストローベイル・ハウスは「気持ちが良さそう」で「住んでみたい」という声が多かった。

2-4. 発表・ネットワークづくり

このプロジェクトは構想段階と施工途中で新聞や雑誌・TVで紹介され、それによる問合せやワークショップに参加してくださる方も多かった。2002年度の成果は日本大学系長研究室で卒業論文としてまとめられ、建築学会関東支部で2003年3月8日に発表された。

現在日大では卒論として新4年生に引継ぎ、継続して施工方法、湿度・温度等データを取っている。

予定している一般アピールのためのチラシ作りは夏冬両方のデータの必要性と建物完成後のほうが良いという判断から今年夏を予定している。完成後は夏以降に雑誌などでも発表する予定であるが、今回の施工ではストローベイルの日本の施工法として竹小舞との併用などのアイディアが盛り込まれており、海外の雑誌でも日本からのストローベイル、土壁文化を発信してゆこうと考えている。



ストローベイルを積み終えた状態



平成15年3月2日第一期打上げ式

III. 活動の効果及び今後の課題

3-1. 活動の効果

この活動を始める一年前には考えていなかったようなエコロジー建築やセルフビルドの全国ネットワークが出来始めている。

ストローベイルは海外ではワークショップとインターネットで拡がったといわれるが、日本でも近い状況が生れ始めているのを実感している。現在特に日本全国で同時多発的にストロー

ベイルや土壁の建築が建てられはじめており、北海道、栃木、藤沢、奥多摩、千葉、甲府、三重、滋賀、熊本、沖縄など全国にオープンなネットワークが出来つつある。今回のワークショップは主にEメールで呼びかけ、20数名の参加者を得たが、その参加者も数名、今年実際にストローベイルや土壁の家を作る予定で、このワークショップの波及効果として全国に輪が拡がっている。



南面外壁

私たちのアトムハウスへの見学者も多く、このプロジェクトが関東方面の藁と土の家の一つの情報拠点になっている。人が場所として行きやすい、コンピュータと直結しデータ収集ができる、地域とのつながりがあるなどの面で藤沢に敷地を移して良かったと思う。

3-2. 今後の予定・課題

現在、環境共生やシックハウスの視点から自然素材を使い、自分の手で家を作ることに注目が集まっているが、ストローベイルや土壁の真の普及には信頼できる施工者や施工法のデータの共有が欠かせない。そのために以下の方法で日本のみならず、全世界にアピールを行ってゆく。

(1) チラシの作成

平成15年夏に完成後、一般へのストローベイルと土壁の普及のためのチラシを作製、全国の環境や建築関係の拠点に配布する。

(2) インターネットでの情報発信、リンクの制作

現在日大の糸長研究室のホームページ上でこのアトムハウスの施工過程を公開している。

<http://www.brs.nihon-u.ac.jp/~areds/>

今後はエコハウス独自にホームページを作り、ストローベイルやセルフビルド、土壁などを日本に根付かせるためのオープンなネットワークを作り、全国での普及とウェブ上でデータのやり取りを行う。

(3) ストローベイル全国大会

日本各地でストローベイルの事例がでてきており、そのデータ共有と交流のため2003年8月2,3日の両日、パーマカルチャー全国大会の一環としてストローベイル全国大会を、安曇野で企画した。

以上、1年間活動を行ってきてストローベイルや土壁の建築をつくることで人や場などあらゆる面でその地域や土地とつながるきっかけをつくることが出来た。

この間少なからぬ反響があり、活動内容の幅も拡がってきて

いる。さらに、この運動を日本に根付かせるにはこのアトムハウスを完成させ、きちんと成果を整理して発表し、オープンにネットワークをつくってゆくことが必要である。そして最終的にそれがこの活動を行う人たちにとってきちんと生活、ビジネス、地域振興につながるというモデルを示すことが必要で、その視点をしっかりと持って今後も活動してゆきたいと思う。

<団体活動データ>

■富士エコハウスプロジェクト

活動テーマ	エコハウス建設を通した新世紀の住まいと環境の提案
活動目的	土と藁によるエコハウス建設を通じた地球環境を考慮したこれからの住まい・環境のつくり方、あり方の提案を目的としている。つくる過程を含め空間を体験しながら、それを楽しく学ぶ場をつくる。
設立年月	2001年11月
代表者名	遠野未来
活動地域	神奈川県藤沢市亀井野地区
メンバー属性	数名のコアメンバーと多数の賛同者によって動く流動的な団体 建築家、会社員、農業、大学教授、学生など

●団体設立の経緯

自然素材を使って自宅兼オフィス（「神田 SU」）を改築した建築家が、そこを拠点にまちづくり活動を行っていた。その建築家によって、土と藁によるエコ建設を通して、これからの住まい・環境のあり方を提案しようと同プロジェクトが企画された。

●これまでの活動

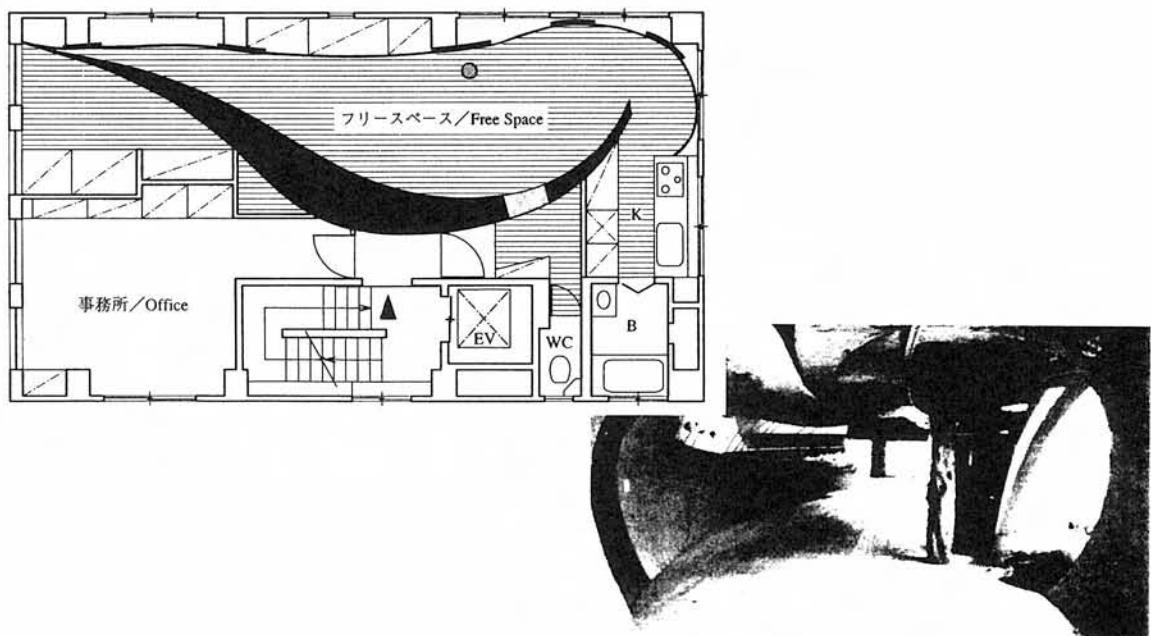
1996年～1999年 自宅兼オフィスを「神田 SU」として改築

1998年 まちづくり団体として活動を開始

1999年 「千代田まちづくりサポート」事業の助成を受ける。都心におけるコミュニティづくり、土と緑の空間によるフリースペースづくりなど、定期的にコミュニティづくりの活動を行う。

2000年～2001年 日本とイギリスで土と藁による空間制作を行う

〈神田 SU 平面図と内観〉



●助成対象活動

富士エコハウスプロジェクト、日本大学系長研究室、職業能力開発総合大学藤野研究室の共同プロジェクトとして、日本大学湘南藤沢キャンパス内において、ストローベイル建築およびラムドアース建築を合体させたエコハウスの建設を実験的に行う。アトムハウスの建設においては、地域の小学生や全国から集まったボランティアとともに、ワークショップ形式で建設する。建設とともにエコハウスの可能性と性能を研究するためにデータの収集を行う。

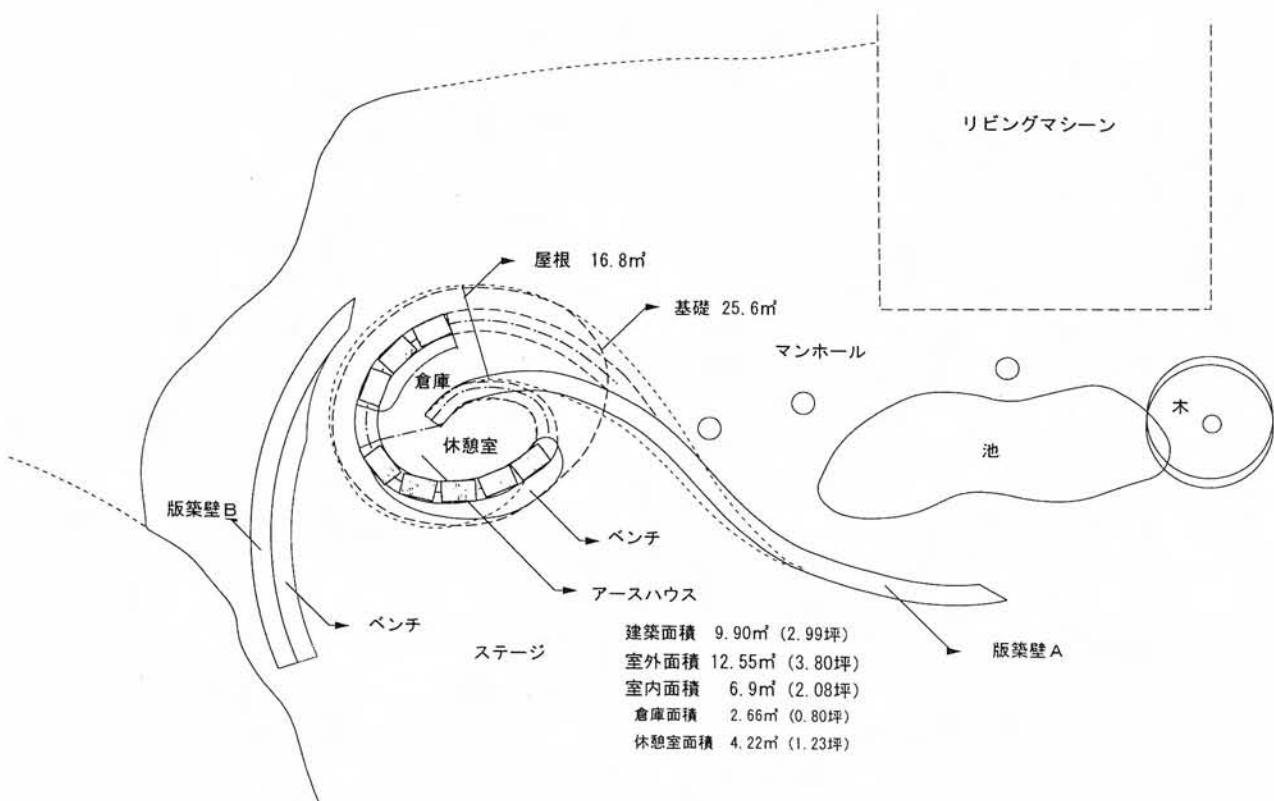
・アトムハウスの建設

小学生やボランティア、学生が、部分的に左官職人などの指導を受けながら、ワークショップ形式で建設した。2003年8月完成予定のアトムハウスは、完成後は「地域の広場」として活用してもらう予定。

・データの収集

室内外の温度・湿度、仕上がった土壁の耐久性などを記録し、土と藁の空間の断熱性、吸湿性、居住性を探る。

〈アトムハウス配置図〉



OLD & NEW 辻長蔵と憩の場の整備と活用

とよさとまちづくり委員会
(滋賀県豊郷町)



辻長蔵と町並み



辻長蔵での定例会

I. 活動の背景と目的

豊郷町は少子化や若者の流出で、若年層の減少が続いている。江州音頭の発祥地や近江商人発祥地でもあり、歴史的資源を持ちながら、十分に活用できていない現状もある。そんな中で、「ここに住み続けるのだから何か楽しいことができないか」と20代、30代の若者を中心に声があがり、2000年2月に第1回の会合を持った。

地方分権、市町村合併と変革する時代の中、自分たちの暮らす「まち」について、若い世代の視点で見つめ直し、活性化を図っていこうと20代を中心とした若者たちが「とよさとまちづくり委員会」を結成した。

町のことを少しでも把握しようと、月に1度定例会を各地域の公民館で開き、今、自分たちが持っている町のイメージやこれからどんな町にしていきたいかなどを話し合い、4つの柱をつくった。

- ①まちのPRをしよう
- ②まちの夏祭りをもりあげよう
- ③まちの先生になろう
- ④すみよいまちにしよう

地域の公民館をまわり、定例会を重ねるなかで、自分たちの自由に集まれる場所が必要であることを認識し始めた。そんななか、メンバーの一人が聞いた、取り壊し予定の蔵の話。その蔵は、100年以上前のもので、民家は先に取り壊しをされていた。

蔵は、約500年前にあった吉田城の跡地にあり、周辺は「城屋敷」といわれていた。現在は、蔵の隣に城跡碑が建てられている。

空き蔵の持ち主は、大阪に在住の老夫婦。体が不自由になり、大阪から帰れなくなることを考え、取り壊しを望まれていた。まちづくりのために蔵を使わせてほしいとお願いしたところ、快く無償で貸りることができた。

かつて呉服屋を営んでいた家の古蔵を借りて「人が集い、憩える場」である活動拠点として、2001年11月から1年かけて、メンバー自らが修繕し蔵を再生した。

蔵は持ち主の名前にちなんで、「辻長蔵」と命名された。改修前の蔵の2階には「長もち」がたくさんあり、そこに「辻長」と

いう屋号が書かれていた。土地にちなんだものにしたいという思いと、大阪に住んでいる持ち主に、「田舎に帰ってきて蔵を見て欲しい」という思いから名づけた。

自分たちが楽しいことをやっている、それがたまたま「まちづくり」だった。発足から3年目蔵の改修も終わり、これから活動をどうしていくかを模索しながらも、当初の基本である「自ら楽しもう」と集まってくるメンバーである。

登録メンバーは約40人、10代から70代まで年代は幅広い。中心は20~30代。考えの前向きな人、楽しいことをしたい人の集まり。会合のみの参加の形をとっているメンバーもいる。

II. 活動の内容

(空き蔵を核にいろんなことをやってみよう)

2-1. 町の特産物を考える

町内で生産されている「ぼっちゃんかぼちゃ」(手のひらサイズのミニかぼちゃ)がまちの特産物。物産品づくりとまちの特産物の活用について学ぶため、先進事例を視察。食べるだけでなく、かぼちゃの可能性を考えるイベントも企画。

2-2. 特産物にふれてもらう パンプキンまつり

ハロウィンにちなんで、まちの特産物、ぼっちゃんかぼちゃのアピールイベントを開催。親子でランタン作りや、地元も菓子屋さんの協力を得て、特別にかぼちゃのお菓子を作ってもらった。参加したのは就学前の子どもやその親を中心に200人。保護者も楽しめるようにと、フリーマーケットやミニ屋台も出店。地元の人による「風船ショー」などの地域の協力もあった。

2-3. キリンフェスティバルへの参加

町のPRと、豊郷町は江州音頭発祥地であることのPRをかねて、キリンビール多賀工場で行われるフェスティバルに参加。幼稚園児たちに江州音頭を披露してもらい、豊郷町の風景写真も展示了。

2-4. 町のまつりに企画運営から参画

8月に行われる町全体のまつりに企画の段階から参画。まつりの会場周辺を手づくりのペットボトルのあんどんで囲んだ。参加する人が楽しめるイベントをメンバーで話し合い企画運営。町の行事には積極的に参加しており、行事に合わせてイベントを開催するなど、町行事の活性化にも力を注いでいる。

2-5. カロム日本選手権豊郷大会

まちの地域にある蔵の街並みや昔から滋賀県湖東地域に残るカロムを通して、まちの魅力を再認識してもらうことを目的に



第3回ゆめ街道とっとまつり
(8月に開催された町の祭り)



カロム日本選手権豊郷大会

開催。カロムは、おはじきを使ったビリヤードのようなもので、90センチの四方の木の枠を使って行う。地域では、老人福祉のリハビリにも利用されていることもあり、子どもからお年寄りまで世代間を越えて楽しんでもらえるゲームである。

蔵のとなりにある酒蔵の2階を貸していただき、町内外の参加者をつのって、対戦してもらう。終わったあとは、辻長蔵のイベントで交流を深めてもらった。

地域の大人と触れ合うことが少なくなってきた小学生のこどもたちに、地域で楽しむことを実感してもらえた。

この大会で優勝したチームには、彦根市で行われる「カロム日本選手権大会」に出場してもらい、メンバーが応援幕をつくってエールを贈った。

2-6. 蔵の整備

地域の憩いの場として提供するため、周辺の照明を整備し、外でくつろいでもらうイスやテーブルなどにペンキを塗り重ねた。また、2002年度は、昨年手間どった藤棚づくりの経験を生かし、屋根つきの建物を設置することができた。この設置に伴い、蔵の敷地内は、6月から8月にかけてバーベキュー施設として貸し出すことを計画している。

照明器具は、商工会が管理できなくなった街灯を、蔵の周辺へ移設した。移設費を節約させるため、工事はみんなで行った。

また、蔵の前には町内の案内看板を設置した。看板は、手作りで2002年度新たに加わった大学生メンバーが中心となって製作した。

2-7. その他

豊郷町が主催するオータムフェスティバルへの参加やオールディーズコンサートなどの独自イベントを開催した。

III. 活動の効果および今後の課題

2002年度の活動は、前半はイベントの開催、後半は、蔵整備を行った。

親子で参加できるイベントを実施したことにより、就学前の家庭に活動が浸透してきたという手ごたえがあった。

辻長蔵を再生させたことで、「できる」という自信が出てきている。蔵のある地域周辺では、かなり活動を知ってもらえるようになった。地域との協力関係もできつつあり、この秋、共同でイベントをやろうという話もでてきている。

ただ、この1年はいろいろなことをやってきたので、結成3年目を迎えてじっくりと蔵をテーマに活動しながら、方向性を探っていきたいと考えている。

2003年度は、出来上がった辻長蔵をどのように活用させ、運用していくか、いくつか出している案を検討し、みんなの意見を



外灯整備



看板づくり



辻長蔵の隣りの酒蔵で開催した
オールディーズコンサート

取り入れ再度改築をしていく予定である。

また、空き家の調査を行ったが、地域に点在させて再生をすすめるのか、それとも、今のエリアを拡大させていくのか再生した後の活用方法と運用方法を考えながら、検討しているところである。

これからも、空き家や空き蔵をテーマにじっくりと活動しながら、またみんなで楽しみながら、何ができるか探っていきたい。蔵のある街並みの再生に取り組んでいきたいと考えている。

<団体活動データ>

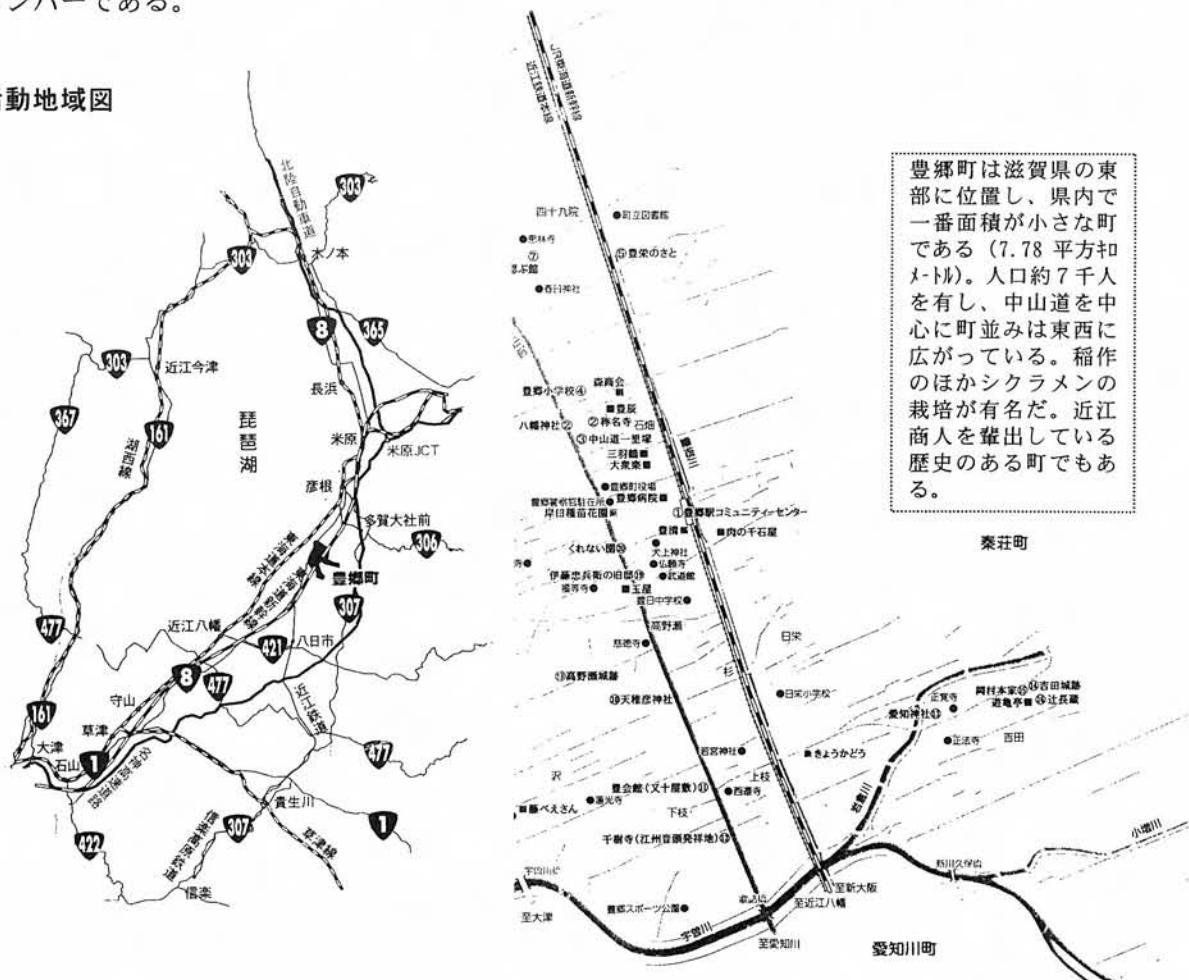
■とよさとまちづくり委員会

活動テーマ	OLD & NEW辻長蔵と憩の場の整備と活用
活動目的	取り壊し予定の蔵を「辻長蔵（つじちょうくら）」と名付け、修繕整備の上コミュニティスペースとして活用し、町内に点在する昔の面影の残る建物（点）を結ぶ核とする。これにより、地域間の交流を深めるとともに町の魅力を高める。
設立年月	2000年2月
代表者名	青山 裕史
活動地域	滋賀県豊郷町
メンバー	62名（うち地区内住民51名）、20代及び30代の若い世代を中心に構成

●団体設立の経緯

進学、就職、結婚を期に、町から若い世代が流出していることをきっかけに、「町の若者が集まって話し合う場をつくろう」と、2000年2月に設立された。自分達の暮らす「まち」について、若い世代の視点で見つめ直し、活性化を図っていくことを目的としている。豊郷町役場の若い職員がコアメンバーである。

●活動地域図



●これまでの活動

メンバー間の意見交換で、歴史的、伝統的なものを新しい感覚で整備して残し、新たな憩いの場として再生する「OLD & NEW」を委員会のコンセプトに据えることとした。それまで定例会は毎月町内の公民館を回って利用していたが、吉田に取り壊し予定の古い蔵があるという情報を入手したのをきっかけとして、大阪市在住の持ち主から無償で借り受け、2000年12月から1年かけてこの蔵と周辺の修繕整備を行い、蔵（辻長蔵）を活用したイベントを開催している。また、町の特産物「ぼっちゃんかぼちゃ」（手のひらサイズのミニかぼちゃ）のPR方法の検討（食べるだけないイベントの企画等）を行い、地域活性化の起爆剤としての活用を模索してきた。



2000年11月　はじめての蔵の掃除



整備後定例会を行っている辻長蔵1階



整備前と後の辻長蔵とその周辺



●助成対象活動

・まちの祭り（第3回ゆめ街道とっとまつり）の企画・運営

まつりの会場周辺を手作りのペットボトルの行灯で囲んだほか、町内の商工業者の協力によるゲーム大会の開催、模擬店の出店等でより多くの参加者を得る工夫をした。

・蔵を活用したイベント（カロム日本選手権豊郷大会、パンプキンまつり等）の実施

パンプキンまつりでは、親子でぼっちゃんかぼちゃのランタン作り、町の菓子屋の協力によるかぼちゃ菓子の無料配布、かぼちゃメロンパンの販売、住民による「風船ショー」の実演等を行い、就学前の子どもと親が楽しめるイベントに仕立て上げた。

・蔵及びその周辺の整備作業（外灯設置、看板づくり等）の実施

町の商工会から外灯管理の話があり、管理者がいない外灯を撤去し辻長蔵に設置し同団体が管理することとなった。看板は、滋賀県立大学生の協力によって完成した。

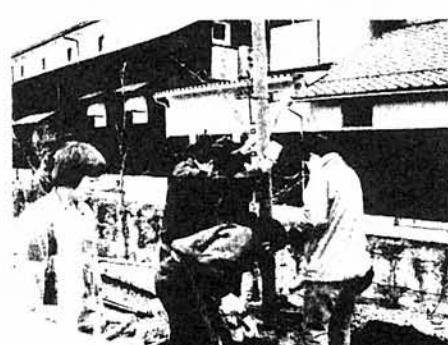
・県内研修会（高島町、永源寺町）の実施

高島ビレッジ（高島町）・・・高島町商工会青年部有志が中心になって古い民家を改装し、新しい観光スポットとした。

ヒトミワイナリー（永源寺町）・・・ワインの製造、販売。ワインの販売生産が、まちのPRと地域の活性化につながっている。



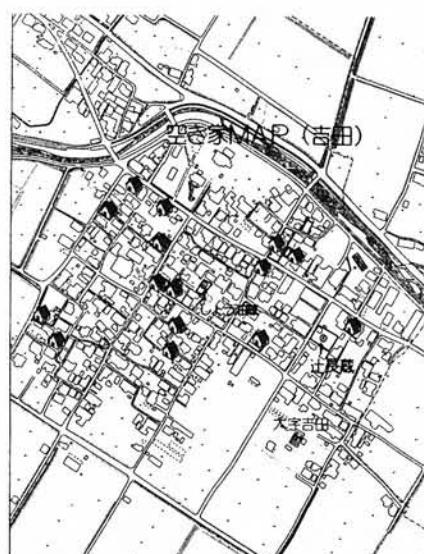
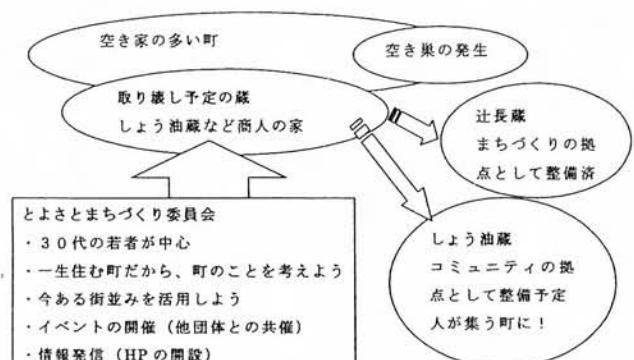
定例会の様子「豊郷町の農家の実状と特産物について」



外灯設置

●これからの予定

平成14年度は、多くのイベント等を実施し、一応の成果が上がった。今後は、できあがった蔵の活用方策を更に検討するとともに、他の空き家（蔵等）の活用をも視野に入れて活動していく。具体的には、辻長蔵の近くにあるしょう油蔵（空き蔵）の活用方法（地域住民が気軽に集まる場所等）を検討する。また、2軒の蔵の改修をきっかけとして、その周辺の空き家を活用したまちの活性化についても検討する予定。



空き家マップ



紫香楽・野焼きでいえをつくろう

「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会
(滋賀県信楽町)

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

信楽は天平時代、聖武天皇が「紫香楽宮（しがらきのみや）」を造営された地であり、最近の発掘調査によるとそれまでの予想に反してかなり大規模な、平城宮に近い本格的な都だったことが明らかになってきています。一方陶器の産地としても日本六古窯の一つであり、信楽周辺から採掘される優れた粘土を使い大物（おおもの：茶壺、水瓶、火鉢等の比較的大きな陶製品）作りを得意として栄えてきました。そして殆どの地場産業が辿っているように「近代化」という美名の元に、工業化、機械化をすすめ、「手」から遠ざかり、このところの「グローバル化」の波により私達の生活からも遠ざかりつつあります。

おりしも滋賀県が行う県民活動支援の補助事業「夢～舞めんと（むーぶめんと）滋賀 湖国21世紀記念事業」があり、これを機会に「やきものの原点とも言うべき野焼きでいえをつくろう」と有志が集まり2001年5月「紫香楽・野焼きでいえをつくろうの会」が発足しました。

1-2. 目的

“太古の人々がやきものを焼いた最初の喜びを「野焼きでいえをつくってみる」ことによって、もう一度思い出し、それをやきもののふるさと信楽の風景に組み込むことで、ここで生まれ、育つ子供たちが、どこに飛び立っても帰れるふるさとの原風景をみんなでつくる。そしてこのプロジェクトを通して、様々な立場の人々と交流しながら、自然とともに生きる21世紀のライフスタイルのあり方を発見し、これから信楽焼を展望していくたい。”と当初の目的を定めました。

そして最終目的として「野焼き」によって、やきものとは何か、信楽焼とは何であるべきかと、信楽焼本来の持つ力をもう一度見つめ直し、世の中の価値観が効率重視から大きく変革する今、まちぐるみで「これが信楽である」といったブランドイメージを戦略的にかたちづくり“新しい信楽＝紫香楽”的イメージを、「SHIGARAKI-ART＝紫香楽アート」として全国、さらに世界に発信し、紫香楽ファンネットワークの構築をも行おうというものです。



家の枠組み作りと煉瓦割り、
粘土の打ち付け等を体験する
ワークショップ



砲弾型の粘土の家の外形が
整ってきた



火入れ式の後、粘土の家の内側
焼成を行った

II. 活動の内容

2-1. 野焼きのいえづくり

「野焼きのいえ」は遊休地や遊休農地を利用していつも作ろうというものです。とはいっても、種々の条件を考慮すると、年にひとつまたは2年にひとつ完成すればよいということで活動を開始しました。私達メンバーはこうした家が少しづつ増えて、村の新しい風景をかたち創ることに想いを馳せながら。



この粘土の家の焼成のために設計し、現地で作りあげたトタン窯を組み立てる

最初の家は2001年7月から、住民と地元陶芸家とデザイナーの共同制作で作り始め、呼びかけにより全国各地からワークショップに参加された皆さんにも作業をしていただき造り上げられました。そしてこの高さ4m50cmの粘土の家全体を6m30cmの軽量C鋼とトタン板で十角錐台形の窯を作り、家一つを丸ごと焼いたのです。このサイズを一度に焼上げるという例は世界でも極めて少なく、全く未経験の作業を都合四回、その最終焼上げは2002年5月（発足1年後）になりました。

これらの作業にはどれも専門的知識と技術が要求されるものであります、手作業にこだわって行ったために、精神的にも肉体的にもかなりハードな作業となりました。特に焼成作業は厳しく、経費節約のためのトタン窯は表面温度が350°C～500°Cにもなり、その状況下での薪をくべる作業は私達が耐えることのできる限界を超えて脱水症状を起こしそうな作業となりました。



大焚き
数日前からあぶり焚きをはじめ、大量に運び込まれたこわ板を割る作業が連日続いた

このように献身的に作業をしていただいた皆さんの努力で当初の計画以上の大きな「野焼きのいえ」が完成しました。私達にとって、完成させたという自信は勿論のこと、作業中の試行錯誤や協議を通じて得た様々な経験とデータは、私達にとっても、このプロジェクトにとっても大きな資産になるに違いありません。

2-2. 第2号棟建設への取り組み

1号棟が間もなく完成という頃、作業をしながら、私達メンバーの中から「この場所にこれ一つではさみしい、この同じ敷地内にもう1棟つくろうではないか」と言う意見が出ました。各自いろいろ意見を述べあいましたが、最後にはその場にいたメンバーはその意見に同意しました。

1号棟完成後、その周辺整備の計画案とそれに大きくかかわる2号棟の建設について企画委員会を開きました。その結果、当初の「信楽町内数箇所へ1棟ずつ設置して、それらをイベント等でネットワーク的に利用する」という計画を見直し、「設置する敷地の風景や条件に合わせて野焼きのいえを何棟か創り、それらをイベント等で単独、もしくはネットワーク的にも利用する」ということに改めました。また、1号棟の周辺整備については「家の周りに木粒を土留に使用した排水溝を掘り、その周りを花畠、薬草畠、歩道をレイアウトする。多目的に利用する

ため資材運搬用の軽トラックの通る道も確保する。」ということ
で意見の一一致を見ました。

第2棟建設については設置場所以外に、どのような規模、形
態そしてどのような制作方法で創るかという課題があります。
しかし、それらも私達の中には1号棟の反省として、もう少し
たくさん的人数が集えるものが欲しいと言う共通の希望ができ
ていますので、仮屋根の設置条件とも相まって、「円筒状、2階
のあるいえ」に決まりました。制作方法は強度や安全性はもちろん
経費や人手間にも大きく係わることであり、1号棟の経験
をふまえて(1号棟では経費が520万円と人手間600人以上かかり
ました。なお間接経費および人件費は含まれていません)、そ
れらの条件を満たすために更なる検討が必要であると課題は残
りましたが、制作準備を進めるために仮屋根の設置を決定しま
した。

2-3. 土鍋づくりセミナー

かねてより検討していました「土鍋づくりセミナー」を2002年11月17日(日)に「野焼きのいえ」の建つ敷地内でNPO法人信楽陶器研究会の協力のもと開催しました。多くの人の参
加を図る為に、次のような呼びかけ文をつくりました。「私達の生活の中で『鍋・釜』と言えばその文字が示すように「鉄」「アルミ」そして「ステンレス」になり、今や「電器」となっています。そうした中でも寒い季節には『土鍋』が根強い人気を得ています。振り返ってみると、つい50年前には私達のまわりに土物は沢山ありました。そして世界には今でも『土鍋・土釜』で生活している人々もいます。土鍋の形と造り方を検証しながら【誰にでもできる楽しい土鍋づくり】セミナー第1回を行います。多数御参加下さい。」

この呼びかけに、当日は天候に恵まれたこともあり、滋賀県内は言うに及ばず、大阪や神戸から、年齢も10歳から60歳代まで30名を越える人が参加して下さいました。

最初に滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場の伊藤主任主査のビデオレクチャー「パパアニューギニア、ペルー、インドの土器づくり」があり、野焼きによる土鍋づくりの要領と注意点が説明されました。参加者はレクチャーの後、野焼き用粘土で各人各様の思いを込めて作り始めました。初心者や大きな鍋を作りたい人は成形が難しいため、主催者が用意した台所用のざるなどを補助型にして作ります。また、ざるを使わないので地面を鍋状に掘りそれを補助型にして作る人もいました。

今回のセミナーは何処でも、誰でもできる方法ということで特別な道具類は使わず、手と簡単なヘラだけで制作しました。参加者の皆さんには昼食を取る時間も惜しむほど熱心に取り組まれ、終了時には全員土鍋を作り上げることができました。出来上がった土鍋は乾燥後、野焼きの家で焼かれ、完成した暁には

陶器の家を焼き上げる
—続き



トタン窯の表面温度は500度に達
していた



ネジをはずしながら1枚ずつトタ
ン窯は解体されていく焼き上がっ
た家の上は人が乗っても大丈夫



メンバーが予想していた以上に陶
器の家は赤く焼き締まっている

その鍋で「ご飯を炊いて皆さん一緒に食べましょう」という提案でセミナーは終わりました。その日は本当にお天気も良く終始、笑い声の絶えない一日でした。技術指導には信楽陶器研究会の皆さんのお力をお借りして楽しい交流会さながらのセミナーを開催することができました。

当日個人的に参加されました毎日新聞社大津支局の奥山記者は土鍋づくりだけでなく、その合間を縫ってしっかり取材もされたらしく、後日新聞に体験記を掲載されました。

III. 活動の効果

この野焼きプロジェクトはまだ始まったばかりです。2001年度は滋賀県の「夢～舞めんと滋賀 湖国21世紀記念事業」の認定を受けた事業ということもあり、また過去に誰も造ったことが無いということも手伝い、このプロジェクトの意図や目的を明確に掲げ「野焼きのいえを造ることが目的ではない」と明言しているにもかかわらず、殆どの人は興味津々の眼で見つめ、陶器に携わっている人は疑いの眼ができるかどうか眺めていました。私達にとっても高邁な理想や夢より、先ず何が何でも完成させなければならないという気持ちで、多分にイベント性を強く感じるものであったことは間違ひありません。

それに比べて、2002年度は1号棟の実績と皆さんの好意に支えられ、落ち着いて取り組むことができました。「野焼きのいえ」が新聞やテレビ、ラジオ放送に多数取り上げられたこともあり、公共団体や建築家さんの問い合わせ、見学等もありました。また、信楽町民の中から「ここに設置してはどうか」という意見や提案も少数ながら出るようになってきたことは私達にとって嬉しいかぎりです。

ところが、今年度は滋賀県に補助する体制がとれておらずまた地元信楽町は社会情勢の悪化も手伝って補助金は出せないとのことでした。そうなるとハウジングアンドコミュニティ財団の「第10回住まいとコミュニティづくり活動助成」と自力で活動するという経済的にはかなり厳しい状態でした。

このような状況の中で開きました「野焼きのいえの土鍋づくりセミナー」は本当に好評で、参加した皆さんに楽しい体験をしていただくことができました。一方、私達にとっては「野焼きのいえ」の目的やコンセプトを皆さんに広く伝えることができる機会もあります。この土鍋づくりセミナーは私達にとっても参加した皆さんにとっても双方負担が軽く、今後は毎年2回程度のペースで開催したいと思っています。

IV. 今後の課題

野焼きプロジェクトを進めるにあたり、資金と人手が必要なことは言うまでもありませんが、その目的とする「新しい価値観を創造すること。紫香楽ファンネットワークを構築すること



世界各国の土器作りを紹介したビデオ鑑賞及び土鍋作りのレクチャー



野焼き用粘土で形作った作品を野焼きの家を利用して仕上げていく



出来上がった作品は野焼きの家中で乾燥させる

と。」は一朝一夕にできるような生易しいことではありません。また、急げばできることでもありません。私達は急がずたゆまざ時間の許す限り長く続け、地元はもとより広く日本および世界の方々に一人でも多く参加していただき、一緒に作り上げていきたいと思っています。

ところで、私達の「焼き物のいえ」「粘土のいえ」は話題になりましたが、確かに日本の自然環境下ではなじみも少なく、今まで殆ど見たことがありません。しかし、考えてみると伝統的な日本家屋には土壁が使われており、土蔵は土で塗り固められて、多湿な自然環境のなかで大きな役割を果たしています。他方世界に目を向けてみると、インド、スリランカ、中近東、アフリカと沢山の人々が粘土のいえ、焼き物のいえで生活をしています。多分その地域はそのいえが非常に快適なものなのでしょう。私はインドとスリランカの経験しかありませんが、やはり、あの太陽が照りつける40度以上の高温の中、厚壁で窓の小さな粘土のいえは大変過ごしやすいと感じました。

小松義夫氏の写真集「地球生活記—世界ぐるりと家めぐりー」を見ていますとアフリカ等の「粘土のいえ」は大変造形的であり、機能的でもあります。例えばブルキナファソのカッセーナ族の家や西アフリカのトーゴのタンベルマ族の家など興味をそそられる家が沢山あります。そして、何と良く工夫されていることでしょうか、私達が悩んでいたことも彼等の知恵を学べば簡単に解決してしまいました。できれば「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会のメンバーが現地へ出向き、実際にそれらの家を見せていただき、作り方などを学んできたいものです。

また、一方でスリランカやインドの粘土の家がサイクロンにより壁が溶けるのを防ぐため、簡単に表面をコーティングする方法はないものだろうか、研究してみようと言員で話し合っています。

今後、やらなければならぬこと、やりたいことは山積みですが、きっと私達は世界中の多くの人の知恵をお借りしながら、必ず達成できる日を信じて息の長い活動を続けていきます。

<団体活動データ>

■「紫香楽・野焼きのいえをつくろう」の会

活動テーマ	紫香楽・野焼きでいえをつくろう
活動目的	<p>以下の活動を目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 歴史あるやきものの里である「紫香楽」と「紫香楽アート」を県内・外、海外に向けて発信すること やきものの生まれる瞬間の感動を多くの人々と共有すること 子どもたちが誇りをもって思い出せる紫香楽らしい原風景をつくること 県内外の人々を巻き込んだ「紫香楽」ファンネットワークをつくること
設立年月	2001年1月
代表者名	西尾矩昌
活動地域	滋賀県信楽町
メンバー	70名 彫刻家、陶芸家、公務員、会社員、主婦等

●団体設立の経緯

特定非営利活動法人信楽陶器研究会の理事長で、彫刻家の西尾氏が中心となって、焼き物の原点である野焼きの家を建て、その技術を活かした新たな住空間を提案し、信楽を核とする地域住民と全国からの参加者が交流する新しいコミュニティの実現をはかると、地元の行政、窯業関係者、デザイナーに呼びかけ、会を結成した。

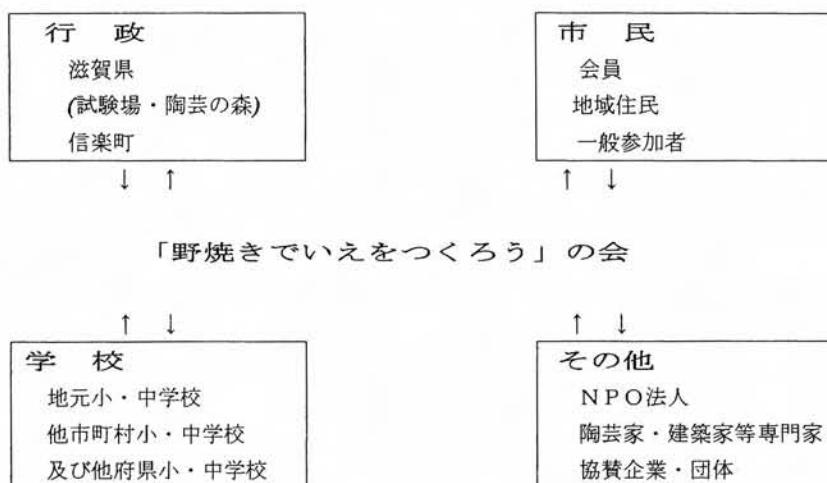
●活動地域図（活動位置図）



●これまでの活動

信楽町多羅尾の六呂川沿いの土地所有者の協力を得て、そこに1棟、野焼きで家をつくった。全国から賛同者を集めて、信楽陶器研究会が協力しながら造りあげた。滋賀県の湖国21世紀記念事業から200万円、町から100万円の補助金を得ている。

(活動の全体像)



2001年5月 発起人会議 家づくりのスタート

6月下旬 現場の草刈り

8月 ワークショップの開催 枠組みづくり、粘土の打ち付けなどを行う。

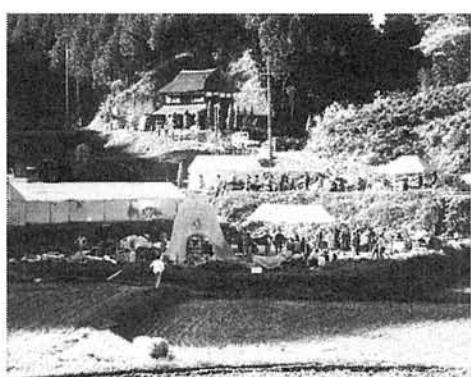
以後11月の火入れまで、粘土で家を形づくる作業を続ける。

11月 火入れ（家の内側の焼成）

12月 大焚き（家全体の焼成）家のまわりに窯を組み立て薪をくべて行う。

2002年5月 2度目の大焚き

6月 窯出し（野焼きの家の完成）



現場風景



野焼きのいえ

●助成対象活動

2つ目の野焼きの家を同じ敷地内につくる準備(借屋根設置、資材搬入)を行った。その一方で、完成した野焼きの家とその目的を広く知ってもらうために、土の焼き物に親しんでもらうことができる土鍋づくりセミナーを開催した。



土鍋づくり



つくった土鍋

●これからの予定

敷地内に2つ目の野焼き家をつくる予定。今後も、予算、時期等を見ながら建設してゆく。

「ヴォーリズ建築を活かしたコミュニティづくり」情報発信事業

特定非営利活動法人 ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会
(滋賀県近江八幡市)

I. 活動の背景と目的

1994年から3年間、行政はヴォーリズの功績をたたえてイベントを開催しました。広く市民の方々と交えてヴォーリズ委員会なる組織を設立し、「W・M・ヴォーリズ」をテーマに新しいまちづくりをしていこうという気運が高まっていました。その一方で、ヴォーリズの象徴である建物は、老朽化して朽ちていくばかりでした。

そんな時、朽ちていくヴォーリズ建築である旧郵便局舎を何とか救ってやりたいと数人の有志が集まり、まず、この建物を元の郵便局舎があった頃のように蘇らせようと活動はじめました。それが「一粒の会」の始まりでした（1996年）。

その後、会はNPO法人格を取得し、会員総数100名を超えるまでに成長しました。設立当初は、ただ朽ちていくヴォーリズ建築を何とか救ってやりたいという一心だけでした。大掃除からはじまり、建物の一部解体撤去、雨漏れの改修、ホールの壁と床の改修へ進み、現在では絵画の常設展示や明かり展、講演会といったイベントができるまでになりました。

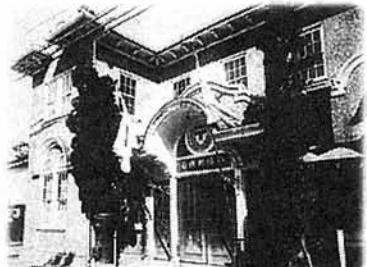
改修を進めるとともに会のもうひとつの目的であるヴォーリズ建築を通じてコミュニティーの育成にも力を入れてきました。滋賀県下でのヴォーリズ建築の調査（県からの委託：2000年度）では、そのまちの方々との交流を通してヴォーリズ建築の良さを再認識していただき、その後互いの交流が深まりました。

また、ヴォーリズ建築スケッチツアーア&スケッチ展では近江八幡市内のヴォーリズ建築を見てまわり、すきなところで絵を描いてもらい、その後スケッチ展を開催し、多くの方に参加いただきました。

さらに、今年度からヴォーリズサロンを開催し始めました。このサロンは、ヴォーリズの知り合いや現在ヴォーリズ建築に住んでおられる方に語り手となってもらい、くつろいだ時間の中で交流を深めることを目的に開いています。

II. 活動の内容

一粒の会も大きくなるにつれて、活動範囲も広くなり、周囲からの要望も多くなってきました。法人格取得後は、会が活動しやすいように改修部会、イベント部会、事務局（広報部門）と3つの部会に分けました。



かつてのファサードが特徴的な
旧八幡郵便局舎



ヴォーリズ建築のスケッチ展



ヴォーリズサロン

改修部会は、雨漏れ等の大掛かりな改修を終えた後、自分たちでできる範囲で改修しました。材料を会費の中からねん出して、休日に集まって改修しました。電気工事や大掛かりな工事は、知り合いの業者に依頼しました。次に中庭の整備を行いました。会員と一般の方と一緒に汗をかくことも目的でしたので、改修はイベントとして一般の方にも告知して参加を募りました。



改修の様子

イベント部会では、サロンを中心にウォーリズファンや市民、会員との交流を企画しました。(詳細は会のホームページに掲載 <http://www.ex.biwa.ne.jp/~hitotubu/>) 昨年7月からはじまったサロンも回数を重ねるごとに参加者が多くなってきました。2ヶ月に一度の開催でしたが、旧郵便局舎がマスコミに取り上げられたこともあり、多くの問い合わせに四苦八苦することもありました。

広報部門は「VoriesMeeting」という季刊誌を発行していました。ホームページを開設するまでは、会員への唯一の情報源でした。今年度は、会費の目減りもあり予算不足から、一回のみの発行となりました。もっと多く発行したいのですが、作成しても発送できないというジレンマがおこりました。

その他、チラシは事あるごとに作成しましたが、協力いただける機関への配布や旧郵便局舎玄関の展示スペースに告知掲載となりました。

III. 活動の効果と今後の課題

今回、H&C財団の助成金事業でパンフレット(1,000部)とパネル(A2サイズ×4ヶ)を作成いたしました。加えて情報の発信基地としてホームページを開設しました。

パンフレットは初版につづくもので、有志ではじめた頃からNPO法人格を取得し現在に至るまでの活動をまとめました。パネルは一見して会の概要がわかるようにイラストや写真を多く取り入れました。どちらも会のPRにはなくてはならないものです。パンフレットは来館された方に活動の趣旨をより理解してもらい、浄財をいただけるよう活用しています。

パネルは東京と大阪でアンテナショップづくりの拠点として常設展示に活用しています。東京はすでに神楽坂のギャラリーにお願いしています。

今後とも、旧郵便局を拠点に改修していく予定ですが、多額の改修費用がともないます。現段階では自主財源を会費収入に頼っていますが、昨今の経済情勢の折り、会員数の減少による資金の目減りは余儀なくなっています。旧郵便局を改修していくために新たな改修費ねん出が必要となってきています。

また、専属の事務局員を雇用し、常に旧郵便局を開館してい



改修が進んでいる内部



作成したパンフレット

たのですが、やはり、費用の面で無理があります。現在、地元の会員を中心に当番制をひいて、週一回開館するのが精一杯です。

今後の予定として、2005年はヴォーリズ来日100周年になります。アニバーサリーとして事業を企画しています。

その事業に向けて、ファサードの復元とトイレの新設を予定しています。ファサードを元通りに復元できれば、旧郵便局を商店街のランドマークとして活用していただけます。また、周辺に公設トイレがないので新設することで、観光客や多くの市民の方にコミュニティースペースとして、憩いの場として旧郵便局を使っていただけると考えています。今回の改修にあたっては、実行委員会を設けます。特に今まで関わりのあった大学生を中心に改修実行委員会を開き、新しい感性で改修していきます。

最後に、これまで一粒の会の活動を通じて、多くの方のお力添えをいたただき、本当にありがとうございました。

旧郵便局の改修も牛歩のごとく、地道な歩みではあります、着実に進めてきています。

時代は環境と再生の時代であります。まさしく一粒の会がめざす、人にやさしい建築の保存再生こそ時代にあった活動ではないかと思います。



現状のファサード



現在の事務所

<団体活動データ>

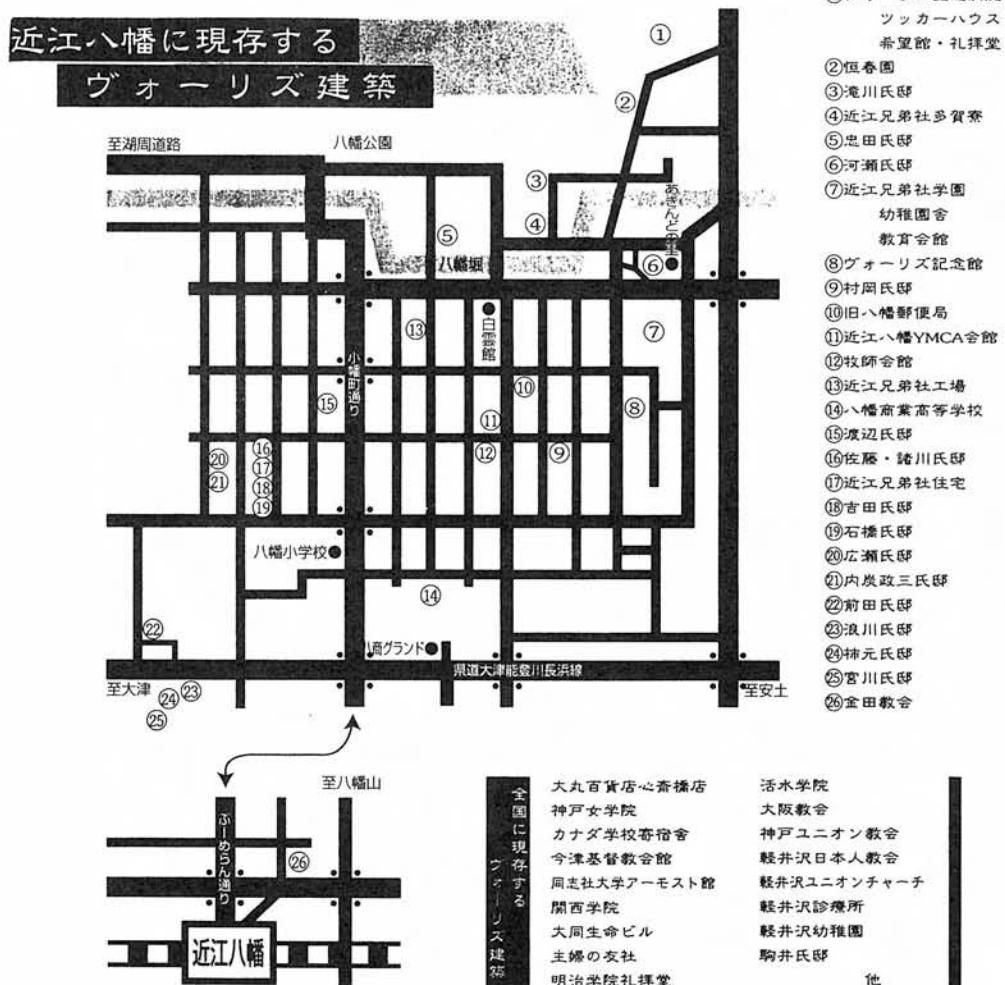
■特定非営利活動法人 ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会

活動テーマ	「ヴォーリズ建築を活かしたコミュニティづくり」情報発信事業
活動目的	ヴォーリズ建築の保存・再生を通して、その精神を活かしたまちづくりを行うこと。
設立年月	1998年7月
代表者名	石井和浩
活動地域	滋賀県近江八幡市
メンバー	17名 建築士、会社経営、商店経営、市議員、研究員、公務員等

●団体設立の経緯

1994年の市制40周年記念事業「ヴォーリズ顕彰シンポジウム」で実施された軽井沢の見学会ツアーで、当地で歴史的建造物を保存運動を行っている様子を見て、参加者が大きな刺激を受けた。それがきっかけとなって「全国のヴォーリズ・ファンとともに、ヴォーリズ建築が語りかけるものを後生に残していく」と、市民が主体となったヴォーリズ建築の保存・再生活動を開始した。

●活動地域図



●これまでの活動

近江八幡市にはW. M ヴォーリズが残した約 30 棟の洋風建築が残っている。その中で当会が保存・再生に特に力をいれているのがヴォーリズ建築の名作と言われる旧八幡郵便局（大正 10 年築）。長く空家になっていたものを、活動の拠点として修復・再生しようとしている。また、ヴォーリズ建築のための調査・コンサルティング、ネットワークづくりを行っている。

①旧八幡郵便局の保存・再生

修復には、数千万の費用がかかるといわれているため、ゆっくりだが少しづつ行っている。1999 年に敷地内中庭の復元整備を行った。ここでヴォーリズに関する展示や講演（ヴォーリズ・サロン）等を開催している。

②ヴォーリズ建築の保存・再生のための調査・コンサルティング

滋賀県を中心に、各地の調査やコンサルティング（改修や活用の提案）を実施している。県の委託調査のほか、近隣の市町や諸団体、企業などからの依頼もある。

③全国のヴォーリズ・ファンのためのネットワークの構築

調査やコンサルティングを通してのネットワークづくり、ホームページや会報による情報発信、各地のまちづくりN P Oとの交流などを実施している。また、最近では各地からの視察受け入れの依頼も増えている。



旧八幡郵便局



ヴォーリズサロン



中庭の整備を終えて



「よこはま洋館付き住宅を考える会」との
交流会

●助成対象活動

情報発信基盤を充実させるためのパンフレット（1000部）、パネル（A2サイズ×4ヶ）、ホームページを作成した。

●これからの予定

- ・2005年のヴォーリズ来日100周年のアニバーサリー企画を予定。
- ・旧郵便局のファサードの復元とトイレの新設。
- ・情報発信力の強化と会員の増加

野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成

釜ヶ崎居住COM
(大阪府大阪市)

I. 活動の背景と目的

大阪市西成区釜ヶ崎では、従来からさまざまな支援団体が、ホームレスや日雇労働者問題に対して就労面や医療面を主体に個別に活動を展開してきた。このなかで当グループは、ホームレス問題の根本的解決のためには安定した居住の保障が最優先課題であると位置づけ活動を重ねてきた。しかし現実には、ホームレス問題は多分野にわたる総合的問題であり、その解消のためには地域住民や諸団体の活動が有機的につながることが最も有効な手段である。そこで、町会、簡易宿泊所経営者、地域施設職員、N P O、各種宗教・運動団体、生活保護受給者支援団体、学生、学識経験者などに呼びかけ、1999年10月に「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」を結成し、ワークショップやフォーラムなどの手法を用いて、釜ヶ崎労働者を含む地域住民や諸団体との情報交換やまちづくりビジョンの共有化を試みてきた。

このような取り組みの結果、まちづくりビジョンに賛同する簡易宿泊所経営者の協力を得て、簡易宿泊所を「サポートイブハウス」に転換し、野宿生活者が生活保護を活用して生活再建と地域社会への定着を行なうための基盤となる住宅を整備することができた。「サポートイブハウス」には、野宿生活者が生活保護を受給して生活を営み地域社会に定着することを支援するために、さまざまなサービスや工夫が整えられている。例えば、居室の狭小性を緩和し部屋にこもりきりになることを防ぐために共同リビング（談話室）を設置し、レクリエーションやイベント、セミナー、昼食会などに利用されている。また、高齢者に配慮して手すりや洋風便器を設置するなど一部をバリアフリー対応としている。さらに、従業員が24時間常駐し、個々の居住者の状況に応じて必要な生活相談や生活支援を実施している。支援の内容は多岐にわたり、たとえば、生活保護申請手続きの介助、金銭管理、安否確認、居室や共用部分の清掃、サラ金問題の相談、服薬時間の管理や見守り、入居者同士のトラブルの仲裁、入退院手続きの介助や入院中の見舞い、介護保険の相談、居住者のためのサークル活動やイベントなどの企画・運営などがある。入居時には敷金・礼金や保証人を必要とせず、場合によっては生活保護が支給されるまでの家賃を後納や分納できるようにするなどの配慮をしている。

現在までに、6人の経営者によって計9軒の「サポートイブハウス」が運営されており、約1,000人の野宿生活者が生活保



釜ヶ崎夏祭りにて屋台を出店するサポートイブハウス居住の高齢者たち（野宿経験者）とボランティア連絡会の人々



菜園づくりに励むサポートイブハウス居住の高齢者たちとボランティア連絡会の人々

護を受給して生活している。内1軒の「サポーティブハウス」では、一部を利用してアルコールによる精神障害者のグループホームが設立認可されている。

住宅保障に次いで私たちが目指したのは、居住者が地域で安定して暮らしつづけるためのまちづくりである。まず、初期に開設した3軒の「サポーティブハウス」が立地する街区を「野宿生活者の社会復帰を実現するモデル地区」と位置付け、居住者が地域で暮らし続けるために必要な施設やサービスなどを整備することを試みた。この活動は、第9回「住まいとコミュニティづくり活動助成事業」の助成を受け、「釜ヶ崎地域の高齢生活をささえる会」や「地域通貨流通促進委員会」などの分科会的新団体の設立につながった。「釜ヶ崎地域の高齢生活をささえる会」では、「サポーティブハウス」の経営者や福祉関係者、医療関係者を中心に、毎月1回、高齢者や障害者の生活課題に関する勉強会を開催し、介護問題や健康維持、アルコール問題などについて検討している。「地域通貨流通促進委員会」では、地域通貨を導入して「生活づくり」「コミュニティづくり」「仕事づくり」を支援することを目的に、地域通貨の流通に向けて広報活動や流通経路の開拓を行なってきた。2001年11月に地域情報誌『やりとり百貨』を創刊し、本格的な流通が進行中である。さらに、当事者の生活づくりやつながりづくりを支援するためには釜ヶ崎地域に精通した優秀な人材を確保することが必要であることから、2001年11月に第1回「釜ヶ崎ボランティア養成講座」を開講した。

まちづくり運動の本格化にともない、「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」には、より高い判断力、構想力、提案力、行動力が求められており、2002年度はとりわけ以下の3つの重点目標を設定して活動を展開していくこととした。一つは、野宿生活経験のある生活保護受給者の生活づくりにおけるニーズを把握し、それへの対応を図ることである。二つ目は、地域通貨の完全定着化をはかり、円滑・潤沢な流通によってコミュニティの形成を支援することである。三つ目は、運動基盤と事業基盤を補強し拡大していくことである。特に初めの二つについては、具体的な活動目標を6点定め、実施した。

II. 活動の内容

2-1. 「サポーティブハウス」居住者の居住意識・ニーズの調査

「サポーティブハウス」のサポート体制が、生活づくりの行程にどのような影響を与えていているのか、その効用・効果や課題を把握し、そのノウハウを地域に広げることが重要である。また、「サポーティブハウス」には、地域社会で自立した生活を望む者から痴呆やアルコール依存のために特別なケアを必要とする者まで幅広い階層が居住しており、各居住者の居住ニーズに応じた支援体制づくりが求められている。そこで、「サポーティブハ



第3回釜ヶ崎ボランティア養成講座では、当事者組織「つきみそうの会」を軸にして、高齢者訪問支援コースも専門コースの中に設けた



トーキングをリードする居住保護当事者の皆さん
野宿時代やアパート暮らしのこと、
仲間同士の助け合いのことなどを語る



サポーティブハウス居住者意識実態調査の経過報告をするメンバー

「サポーティブハウス」居住者に対して面接聞き取りをし、入居までの経緯、入居後の生活状況、将来展望などを調べた。調査は、居住支援研究委員会（住宅総合研究財団2001年度研究助成対象。委員に当グループのメンバーを含む）との共同で2002年4～5月に実施した。6軒の「サポーティブハウス」居住者約670人のうち、71人（46歳～82歳、男性67人、女性4人）から聞き取りを行うことができた。

調査の結果、1)居住者の大半が高齢で健康面に不安を抱えている、2)飯場や簡易宿泊所など非住宅での生活経験が長く家事や家計管理の経験・知識が乏しい、3)生活保護が金銭的制約・心理的抑制となりより高い次元への生活の質の向上を果たすことが困難になっている、などの居住者像が明らかになった。生活再建の過程では、「サポーティブハウス」の人的サポートが大きな役割を果たしており、居住者もこれを高く評価していた。また居住の安定によって健康状態の改善が見られたほか、社会奉仕など新しい生活要求が発生していた。しかし一方で、集団生活や地域社会になじめず生きがいを喪失している人もいた。

「サポーティブハウス」は野宿生活者の居住支援の取り組みとして一定の成果を上げているが、人材や資金的な条件などからその機能には限界がある。今後深刻化すると思われる介護問題や精神的ケアなどへの対応を含め、「自立」と結合した居住支援を推進するためには、公的資金の投入などの検討が必要であることが確認できた。

これらの調査結果については、2002年7月20日および2003年1月13日に地域で報告会を開催し報告した。

2-2. 地域通貨流通の振興

釜ヶ崎の地域通貨「カマ手帳」は、2001年11月から本格的に導入され、「サポーティブハウス」居住者を中心に約250人が利用登録している。今年度は、地域通貨をさらに地域に定着化させるために、専任の地域通貨流通コーディネーター（有償）を配置し、地域情報誌の発行や各種団体への広報活動、地域通貨を利用したイベントの開催などを行なってきた。コーディネーターには、ボランティア養成講座の修了生などが登録している。

地域通貨の流通を促進するためには、「地域通貨を獲得する場」と「地域通貨を使う場」の双方を整備する必要がある。釜ヶ崎の地域通貨の課題は、登録者の大半が「サポーティブハウス」の居住者であり、各人の「できること」「して欲しいこと」が類似しているため、地域通貨の取引に多様性がないことである。また、日雇い労働に長く従事し特に特技や技術を持たないために、「できること」が見つからない登録者も多い。そこで、コーディネーターが中心になって、「地域通貨を獲得する場」と「地域通貨を使う場」を創出することに努めてきた。具体的には、1)季節的イベント（料理教室、菜園づくり、車イス花見など）、2)



年末カマ通貨大感謝祭にて



バザーで地域通貨を使う様子



第3回釜ヶ崎ボランティア養成講座でのワークショップ



釜ヶ崎ボランティア養成講座
フィールドワークコースの人々

「サポートハウス」内の定期的な文化活動など(モーニング喫茶、ヨガ教室、足裏マッサージなど)、3)「金曜作業日(依頼された仕事や地域に貢献する目的で作業を行う)」、などを開催している。「金曜作業日」では、これまでに、ワールドカップの決勝戦を彩る折鶴づくり、識字教室のポスターづくり、地域通貨情報誌『やりとり百貨』の製本、牛乳パックを利用した筆立てや折箱づくり(近隣の施設に寄贈)、地域情報誌としての壁新聞の発行などを行った。6月には「カマやんうちわ」(釜ヶ崎のまち再生フォーラムのまちづくりビジョンのイラストを使用したうちわ)を作成した。金曜作業日は、地域通貨を通して「サポートハウス」の居住者同士や居住者と地域の子供たちが接する場を提供しており、日々の単調な生活に刺激を与えるなど、高齢者の生きがいづくりにも役立っている。また、昨年度に続き今年度も釜ヶ崎夏まつりにソーメン屋台を出店し、地域の諸団体や住民に地域通貨をアピールした。12月にはバザーやお楽しみ会を兼ねた「カマ通貨大感謝祭」を開催した。

2-3. ボランティア養成講座の運営

昨年度から始まった釜ヶ崎ボランティア養成講座は、釜ヶ崎の現状の理解を深め、まちづくり活動の技法を学ぶと共に、講座修了後は当グループをはじめとする釜ヶ崎のまち再生フォーラムの構成団体に参加したりあるいは独自に活動グループを編成して、まちづくり・住まいづくり活動を企画・実践することを目的としている。

今年度は、より専門的な知識や技術を習得してもらうために、「共通コース」と「専門コース」に分けてプログラムを作成し、12月～2月にかけて講座を開講した。専門コースには、「高齢者訪問活動支援ボランティア養成コース」「高齢者のニーズほりおこしコーディネーター養成コース～自助具づくりの小規模作業所づくりをめざして」「地域通貨流通コーディネーター養成コース」の3コースを用意した。「高齢者訪問活動支援ボランティア養成コース」は、釜ヶ崎のまち再生フォーラムと関係の深い、当事者たちの自助組織である「つきみそうの会」を軸にすえて開設したコースで、同団体が実施している安否確認訪問事業を支援するものである。

年末ということもあって参加者は昨年度よりも減少し26名であったが、熱心な受講生が多く、さっそく自主活動グループが生まれ、さまざまな企画を提案し実行している。

2-4. ボランティアセンターの設立

上記の釜ヶ崎ボランティア養成講座と関連して、講座修了生など釜ヶ崎におけるボランティア活動に関心のある人を受け入れる窓口を早急に整える必要があった。このため、2002年春に、地域内の各種団体に対して、ボランティアの必要の有無やボラ

ンティアに求める必要な技能・知識などについてアンケートを実施した。アンケートの結果は、講座修了生に情報として提供したり、今後の講座のプログラム編成に際しての資料とするなど活用した。

また、講座修了生からなる釜ヶ崎ボランティア連絡会が設立された（現在の登録会員は約80名）。釜ヶ崎夏まつりへのソーメン屋台の出店は、釜ヶ崎ボランティア連絡会と地域通貨委員会の合同企画として実施したものである。このほか、車イス花見や菜園しごとなどの各種イベント、識字教室の運営にも釜ヶ崎ボランティア連絡会が携わっている。

2-5. 識字教室の開設

「サポートハウス」居住者の中には、読み書きのできない者もあり、これが円滑なコミュニケーションの妨げや当人の劣等感を生む原因になっていることがある。そこで、第1回釜ヶ崎ボランティア養成講座の「識字教育コース」修了者などが中心となって、「サポートハウス」居住者等に識字教育を実施することとした。2002年3月2日に「ともにあゆむ釜ヶ崎識字教室（もじろうかい）」を開校し、以後毎週土曜日の午後に、釜ヶ崎内にある「太子福祉館（まちづくり活動に理解のある簡易宿泊所経営者によって開かれた地域交流室）」で活動している。メンバーに多少の入れ替わりはあるが、毎回10人前後の当事者と5～6人のボランティア（今年に入ってから参加者はさらに増加）が参加している。

ここでは、狭い意味での「識字」だけでなく、自己表現活動全般を視野に入れたエンパワーメント活動が可能になることを目標に、取り組みを進めており、教室の前半は識字、後半はワークショップを行なっている。このような活動を通して、当事者同士が互いに相談したり情報を交換する「ピアカウンセリング」の動きも現れてきている。

2-6. ホームページ英語版の開設

従来から釜ヶ崎には、JICA研修生などが見学に訪れることがあったが、今年度は、アメリカやイギリスのホームレス問題に関する諸団体との交流があり、釜ヶ崎におけるまちづくり・住まいづくり活動をこれらの国々に広く広報する必要性が出てきた。昨年度の助成金で日本語版ホームページを開設したので、これをベースにして英語版を作成することとした。

日本語版ホームページをたたき台にした英訳作業を5月までに行い、数度の英訳チェックや試行を繰り返し、最終的には11月にホームページ英語版を開設することができた。

III. 活動の効果及び今後の課題

私たちが上記のような活動を行なう中、折しも、「野宿生活者



「投票へ行こう！ 社会再参加キャンペーン」の公開討論会

の社会復帰を実現するモデル地区」を含む地区に新しく町会が誕生した。町会役員には「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」のメンバーも多く含まれている。町会誕生の背景の一つには、「サポーティブハウス」ができたことによって多数の野宿生活者等が住民として地域に定着してきたことがある。余談ではあるが、先の統一選挙において、他校区では軒並み投票率が落ちた中、「サポーティブハウス」が立地する萩之茶屋校区のみが投票率が上昇した。このことも、野宿生活者等が地域住民として定着してきていることの証左と言えるだろう。

町会の発足によって、本格的なまちづくりに取り組む土台ができたといえる。また、「釜ヶ崎ボランティア養成講座」や「釜ヶ崎ボランティア連絡会」によって、優秀な新しい人材も集まりつつある。

一方で、旧来から釜ヶ崎に居住している住民や近隣の町会との関わりが薄いことが課題となっている。また、活動が広がり組織が大きくなるほど、多数の意見を聞き取り集約することが困難になってきた。そこで、2003年度からは、地域のN P Oや団体をつなぐ「N P Oアライアンスづくり」、地域づくりを包括的に考える「ネクストステージビジョンの作成」、きめ細かく地域のニーズを探るための「ききとりキャラバンの実施」を行うこととした。さらに、西成区の地域福祉計画やホームレス自立支援法などを視野に入れて、さまざまな活動を展開していく予定である。

今後の課題としては、これらの事業を展開していくための、人材と資金の確保があげられる。N P O化の検討も行なっているが、いずれにせよ、資金や人材などの点で課題がある。



「もしも西成市民会館を立て替えるとしたら？」ワークショップの様子 1



「もしも西成市民会館を立て替えるとしたら？」ワークショップの様子 2

<団体活動データ>

■釜ヶ崎居住COM

活動テーマ	野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成
活動目的	人間の人間たる根本に居住があるという考えのもとに、釜ヶ崎の労働者、元労働者、野宿者等の居住支援を目的に、調査、政策提言等を行う。
設立年月	1997年9月
代表者名	星野智
活動地域	大阪市西成区
メンバー	15名 団体職員、研究員、コンサルタント、大学教授等

●団体設立の経緯

「国連人間居住会議 HABITAT2」宣言（1996年、イスタン布尔）についての学習会がきっかけ。従来から釜ヶ崎では、支援分野として就労や福祉、医療は呼ばれていたが居住の観点は乏しかった。釜ヶ崎の野宿問題を居住面から探る調査、政策提言活動を行うために、（財）西成労働福祉センターの職員、住宅問題やまちづくりの専門家、大学院生などが核として集まり設立された。

●活動地域図（活動位置図）



●これまでの活動

釜ヶ崎で労働者支援、野宿者支援を行っている団体は数多くあるが、どちらかというとそれぞれが独自に活動していて横の連携がなかった。そこで発生する問題は、多分野にわたる総合的な問題であるとの認識のもとに、釜ヶ崎居住COMが呼びかけ、各支援団体、宿泊所経営者、町会、学識者を横断的に結びつける「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」を立ち上げた。同フォーラムから生まれた様以下の様々な活動を行っていった。

・フォーラムの開催

「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」を1999年10月から2001年6月まで、計10回開いた。地域の各主体が集まり、情報交換、まちづくりビジョンの共有化を行った。第10回目には、老朽化した西成市民館の活用ワークショップを開いた。

・サポートハウス

フォーラムを開催してゆく中で、まちづくりビジョンに賛同する経営者の協力を得られた簡易宿泊所を、サポートハウスと名づけた入居後のサポート体制を付したマンションに転換した。マンションに転換することで生活保護者の居宅保護が可能になり、また経営者にとっても増加しつつあった空き部屋対策になる。2002年3月までに9軒のサポートハウスが誕生した。

・地域通貨「カマ」の流通

「生活づくり」「コミュニティづくり」「仕事づくり」を支援することを目的に2001年11月情報誌「やりとり百貨」発刊を機に本格的に導入した。

・ボランティア養成講座の運営

釜ヶ崎の現状の理解を深め、まちづくり活動の技法を学び、講座終了後は釜ヶ崎で実際にまちづくり・住まいづくり活動を企画・実践する人材の育成を目的としている。また、修了生によってボランティア活動を受け入れる窓口として「釜ヶ崎ボランティア連絡会」が設立された。

・識字教室の開設

サポートハウス入居者で文字の読めない人への識字教育の場として開設した。

・調査・研究・提言

「緊急アピール：釜ヶ崎に人間居住を実現するための緊急策と抜本策」

簡易宿泊所空き2000室活用プラン」の提案

サポートハウスの居住者の居住意識・ニーズの調査。



サポートハウス



地域通貨情報誌

●助成対象活動

2002年度は1)野宿生活経験のある生活保護受給者の生活づくりにおけるニーズを把握し、それへの対応を図る。2)地域通貨の定着を図る。3)運動基盤と事業基盤を補強し拡大していく。の3つの重点目標にして以下の活動を行った。

①ニーズ調査

2002年4~5月 「サポートハウス」居住者の居住意識・ニーズの調査

7月20日 調査の報告会の実施

②地域通貨の振興

地域通過を使う場、獲得する場として「料理教室」「菜園づくり」「車イス花見」サポート内での文化活動（ヨガ教室、足裏マッサージなど）「金曜作業日」の開催。

2002年6月 釜ヶ崎夏まつりにソーメン屋台の出店。地域通貨のアピール

12月 バザーとお楽しみ会を兼ねた「カマ通貨大感謝祭」の開催。

③ボランティア養成講座の運営

今年度は「共通コース」と「専門コース」に分けてプログラムを作成し、2002年12月~2月に実施。

④ボランティアセンターの設立

ボランティア養成講座の修了生など、ボランティアを受け入れる窓口として設置。

地域内各支援団体にボランティアについてのアンケートを実施。

講座終了生からなる「釜ヶ崎ボランティア連絡会」の設置。

⑤識字教室の開設

第1回ボランティア養成講座の修了生が中心となって「ともにあゆむ釜ヶ崎識字教室（もじろうかい）」（2002年3月開設）を毎週土曜日に開校。

⑥ホームページ英語版の開設（2002年11月）

●これからの予定

地域のNPOや団体をつなぐ「アライアンスづくり」、地域づくりを包括的に考える「ネクストステージビジョンの作成」、きめ細かく地域のニーズを探る「ききとりキャラバンの実施」を行う予定。

淡路から全国へ向けてオープンガーデンネットワーク

特定非営利活動法人 アルファグリーンネット
(兵庫県北淡町)



兵庫県立淡路景観園芸学校外観



兵庫県立淡路景観園芸学校
キャンパス

I. 活動の目的

個人の庭は、ガーデニングブームを支える大きなフィールドであると同時に「まちなみ」を形成する重要な要素です。最近一部の市民は、この「庭」を個人の趣味を実現する場としてではなくて、「まちなみ」機能を理解し、良好なまちなみづくりに貢献することや、この活動を通じて地域のコミュニティの形成にも役立てようとして「オープンガーデン」を取組み始めています。

このような動きは兵庫県内においても特に活発であり、既に5地区以上においてオープンガーデンネットワークが組織され、今や兵庫県は「オープンガーデン先進県」とも言える状況にあります。

全国においてもオープンガーデンに取組む多数の団体やグループがありますが、これらの団体が一堂に会して交流を深めることにより、さらなる発展と「花と緑のまちづくり活動」へ踏み出すきっかけづくりになるものと考えられます。また、その成果を全国に発信することにより、花と緑を生かした美しいまちなみの形成とあたたかなコミュニティづくりの推進に寄与できると思われます。

II. 活動の計画・立案

2-1. アルファグリーンネット（以下AGNと称する）の活動内容

AGNは、県立淡路景観園芸学校の生涯学習コースの修了生が、横の連携を深めるために、平成12年3月に結成した組織であります。そして、平成13年10月にNPOの認証取得を行いました。

活動の目的としては、住民主体の「花と緑のまちづくり活動」を活性化していくことにより、人と自然が共生し、あたたかなコミュニティが息づくまちづくり・地域づくりの推進に貢献することを目的としております。

オープンガーデンについてはAGNの会員が主体となって、行政と連携を取った活動を行っているほか、会員独自で行っている地区もあります。

2-2. 推進体制と実施計画

(1) 推進体制

「花と緑のまちづくりフォーラム」として、2000年より年に

1回開催してきましたが、何れも淡路景観園芸学校との共催で行ってまいりました。今回も助成金はAGN名義でいただくことになりますが、これだけの予算では不十分なのと従来の慣例から例年どおり共同で開催することにいたしました。

(2) 実施計画について

①過去のフォーラム開催例に合わせ、実施計画を策定していくことになりましたが、活動発表会と現地見学会を2日間にわたり開催することにいたしました。具体的には、開催日時・基調講演者の選定に時間がかかり、関係する団体の行事計画・スケジュール等も調整して日時を決定しました。また、基調講演をしていただく方には、スケジュール等の関係で、最終決定までにかなりの時間を要しました。



県外発表者3名、県内発表者4名が
初めて一堂に会した

②発表者の選定について、県外発表者については「マイガーデン」誌に掲載されている地区の中から選定することになり、直接電話をお願いした方、役場を通じてお願いした方も含め3名にお願いすることになりました。県内発表者については、オープンガーデンを行っている地域から全てAGNの会員が発表することになりました。

③PR方法については、大々的にPRするためパンフレットとポスターの両方を作成することにいたしました。これにより大きな反響を巻き起こし、440名という多数の参加者を得ることができました。

④「走る県民教室」の利用について

兵庫県には、県民が県の施設などを見学することにより、県政についての理解を深めるため、県がバスの借上げ費用の一部を負担する制度があります。これを利用することにより、参加者の利便性や経済効果もあることから積極的に利用することにいたしました。10月5日(土)、10月6日(日)に各1台を確保することができました。

⑤現地見学会の候補地については、時期的にオープンガーデンの適期を外れておりますので、選定に時間を要するものと思っておりましたが、三田市の「三田花と緑のネットワーク」のご好意により受け入れをしていただくことになりました。

2-3. 役割分担

先述しましたように、AGNと淡路景観園芸学校の関係者による役割分担を行い、責任と権限を明確にしました。この結果たいした混乱もなく、大変スムーズな進行ができました。

III. 活動の内容

3-1. 発表者の事前打合せ

基調講演の先生、活動発表者の7名については、発表当日の午前中に初めての顔合わせを行いました。特に県外の方については、遠路のご苦労や地理不案内のハンディをどのようにカバーするか熟慮を重ねた対応の甲斐があり、無事にお会いしたときは大変感激しました。

全員が集合した段階で打合せを行いましたが、この段階で今回の行事の成功を確信いたしました。

3-2. 活動報告プログラム

- (1) 主催者、来賓挨拶
- (2) 基調講演「路地裏園芸からオープンガーデンへ」
園芸研究家 富山昌克氏
- (3) オープンガーデナー活動報告
①北海道恵庭市 ブレインズ代表 内倉真裕美氏
小布施オープンガーデン代表 跡部由美子氏
③宮崎県宮崎市
サンフラワー宮崎オープンガーデン代表
佐々木喜美枝氏

④兵庫県淡路地区

- あわじオープンガーデン実行委員会 事務局
嶋一史氏

⑤兵庫県三田市

- 三田花と緑のネットワーク代表 高嶋清子氏

⑥兵庫県宝塚市

- アルファグリーンネット宝塚支部長 熊澤良彦氏

⑦兵庫県東播磨地区

- ひょうごオープンガーデン開催機構 牧美紀氏

(4) 全体討論

発表者と参加者の質疑応答の時間を設け、コミュニケーションの円滑化を計ったところ、参加者より発表の感想、日頃感じられている内容等の質問が活発に出されました。これに対し、発表者より経験に基づいた回答があり、納得や感心されておりました。

(5) オープンガーデナー宣言

3-3. 現地見学会－参加者130名

- (1) 集合 国営明石海峡公園淡路地区東浦口ゲート前
- (2) 見学 園内及び淡路夢舞台温室
- (3) 昼食 淡路ハイウェイオアシス
(午後からの行程のみの参加の方)
- (4) 集合 神戸市営地下鉄総合運動公園駅前
- (5) 見学 兵庫県三田市オープンガーデン実施地区



主催者挨拶



参加者であふれかえった会場

(6) 解散 神戸市内

3-4. オープンガーデナーの集いの総括

2日間にわたり開催しましたが、第1日目が440名、第2日目が130名の参加があり、大成功であったと言っても過大評価ではないと思います。

特に第1日目は学校の多目的ホール始まって依頼の収容人数で、床が落ちるのではと心配するほどでした。また、オープンガーデナーによる活動報告では、取組んだ苦労や楽しみがつぶさに理解できたことと思われます。

2日目は実際に家庭の庭を見せていただき、庭主の創意工夫や飾らない応対を見ていると、オープンガーデンの特徴であるコミュニケーションの重要性が良く理解されたと思われます。



全体討論の様子

IV. 今後の課題

「淡路から全国へ向けてオープーガーデンネットワーク」の開催は、成功裡に終了することができましたが、個人の庭を「まちなみ」機能へ、「コミュニティ」の形成に導くためには、さらなる継続が必要と考えます。

オープンガーデンも近年脚光を浴びてきたころであり、まだ規模としても小規模な状況であります。これを近隣からストリートさらには地域に、いわゆる点から線さらには面へ定着させることが必要かと思います。

しかしながら既存の町並みにあっては、閉鎖的なまちなみが定着していて、改善の余地は少ないかもしれません、規模を拡大することによってコミュニティの形成には繋がるものと考えられます。

今後新しい町が開発されるときや既存の一部の町では、まちなみを考慮した住宅や庭が配置されているところがありますので、まちなみやコミュニティの形成に、役割を担ってくれるものと考えます。

アルファグリーンネットの「花と緑のまちづくり活動」は、ただ単に花や緑を植え付けるだけではなく、住民同士のコミュニケーションやあたたかなコミュニティが形成されるような活動を行うことを絶えず考慮し、計画し、活動しておりますので、我々が先陣を切る形で進めていきたいと思います。



オープンガーデン見学の様子

＜団体活動データ＞

■特定非営利活動法人 アルファグリーンネット

活動テーマ	淡路から全国へ向けてオープンガーデンネットワーク
活動目的	住民主体の「花と緑のまちづくり活動」を立ち上げ、活性化していくことにより、人と自然が共生したたかなコミュニティが息づくまちづくり・地域づくりの推進に貢献すること。
設立年月	2000 年 3 月
代表者名	浅原正三
活動地域	兵庫県津名郡北淡町野島常盤地区ほか 兵庫県全域
メンバー	約 400 名 退職者、会社員、主婦等

●団体設立の経緯

兵庫県立淡路景観園芸学校では、県民を対象に園芸を通して積極的に地域づくりに参加する心を育むための生涯学習講座（まちづくりガーデナーコース）を開講している。その受講生がそれぞれ自ら暮らす地域において、同校で学んだ緑化活動等を実践していく上で相互の連携が必要であることから組織が設立された。

生涯學習機能

花と緑に関する地域社会のニーズにこたえる多彩なプログラムを広く県民を対象に開設し、花と緑の講義や実技体験などを通じて、積極的に地域づくりに参加するごころをはぐくみます。



淡路景観園芸学校のキャンパス

L本科コース

社会貢献の想い、技術修得のニーズにこたえる

「本科コース」は前期の「花と緑のまちづくりプログラム」と後期の「花と緑の地域づくりプログラム」の2つのプログラムで構成されています。

地域で花と緑に関する活動を行っている方を中心、基本的な園芸・造園の知識や技術、まちづくりの実践的な取り組み、そしてリーダーシップや情報発信のノウハウまで、講習と実習を織りまぜた本格的なプログラムを提供し、花と緑にあふれたまちづくりや人々の暮らしを創造する地域活性化の指標となる。

前期・後期とも、3日間を月1回、5か月にわたるコースで、前期・後期の両コースを修了すると、花と緑のまちづくり指導者として、「まちづくりガーデナー」の称号を得ることができます。

II. 体験コース

「実際にやってみよう！」がキーワード

広く一般県民を対象とし、花と緑の楽しみ、公園や庭園の大切さ、楽しさをより良く知ってもらい、地域づくりの新たな時代を築きながら、人々により積極的な活動をしてもらおうという願いで作られた3日間のコースです。

できる限り多くの人が参加し、自分でデザインした花壇を実際に作ってみるといった実技体験を通じてだれもが楽しめる内容です。夏休み等には、小学生を対象とした講座も実施します。

III テーマフル

花と緑のまちづくりをすでに実行している方を対象に、課題の解決のためテーマを絞って学ぶためのコースです

- テーマ例 庭木・盆栽の手入れ
- ビオトープづくりと自然観察
- 里山保全活動
- 庭のデザイン
- ワークショップ企画実習



淡路景観園芸学校「まちづくりガーデナーコース」の室内

●活動地域図

淡路景観園芸学校がある津名郡北淡町を中心に兵庫県内全域に及ぶ



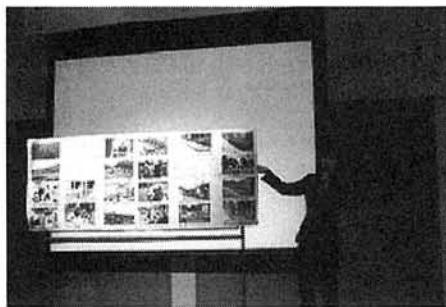
生涯学習受講生を中心として
県内の 54 市区町に支部を持ち、「勝手連」的な緑化活動、
地域の人と自宅の庭を開放するオープンガーデンネットワー
ーク活動、里山保全、環境教育など様々な取り組みを行って
きた。まちは建造物などハードとともに、そこに住む人とコ
ミュニティで構成され、コミュニティはデザインしていくこと
でよりよく成長する。それらをつなぐのが「花と緑」である。
景観園芸学校の使命は、「コミュニティ・デザイン」の担い手
の養成と捉えられている。

●これまでの活動

- ① 花と緑を活かした美しいまちをつくるための公共的空間の緑化等
- ② 行政や他の団体が進める花と緑のまちづくり活動への協力・支援
- ③ 花と緑のまちづくり推進のための啓発
- ④ 花と緑のまちづくり活動推進のための調査・研究
- ⑤ 花と緑のまちづくり活動に関する会報等の発行



活動地域での緑化活動



活動発表会の様子



ピオトープにて環境教育プログラム実演

●助成対象活動

全国各地域のオープンガーデン実践者が一堂に会する「全国オープンガーデナーの集い」の開催並びに来場者へのアンケート調査及びその分析。

この催しは、オープンガーデナー同士の交流の深化、活動の全国的運動への展開並びに各地の住民が庭からまちづくりへ踏み出すきっかけづくりを目指して開催された。

2002年 4月～9月 オープンガーデン実施計画づくり

開催日時・場所の決定、講演者、発表者の人選、参加者募集等

10月 全国オープンガーデナーの集い開催

オープンガーデン実施地区（三田市）見学会実施

来訪者に対するアンケートの実施

12月 アンケート結果の集約



全国オープンガーデナーの集いの様子



開催日 平成14年10月5日(土)・6日(日)
会場
10月5日 兵庫県立出芸寮藝術高等学校 多目的ホール
10月6日 (神戸市立) 国立西宮河原町公園緑地地区、武庫夢舞台
兵庫県三田市オープンガーデン実施地区

主催 NPO法人アートフォーラム・ストラット、兵庫県立出芸寮藝術高等学校
共催 (財)神戸市公園緑化協会
主催 (財)神戸市公園緑化協会／(財)大阪市公園緑化協会／(財)滋賀花卉記念事業協会

全国オープンガーデナーの集いのパンフレット

オープンガーデン

1920年代、イギリスで個人の庭園を有料で公開し入園料をチャリティーにあてたのが始まりとされる。オープンガーデンに登録された庭園は、表紙の色にちなんで「イエローブック」と呼ばれるガイドブックで紹介され、毎年2月に発行されるこの本は必ずベストセラーの上位に入る。日本でも1990年代後半からオープンガーデン活動が広がっている。



オープンガーデン見学

アンケート結果

「集い」来訪者を対象にアンケート調査を実施した。回収数は 143 で、そのうち有効回答数は 132 であった。主なアンケート結果は、以下の通りである。

- ・ **イベント来訪者の属性**

女性が多く（約 6 割）、職業は専業主婦、無職が多数を占めていた。年齢的には、50 歳代と 60 歳代で全体の 7 割を占めた。

- ・ **回答者の所在地**

イベント開催地の「兵庫県」が最も多く（約 6 割）、次いで「大阪府」（25%）であった。兵庫県内では「神戸市」、「宝塚市」などオープンガーデンを開催している地域からの参加が目立った。

- ・ **オープンガーデンの実践の有無**

「いいえ」が 62% で、今までオープンガーデンをしたことのない人の参加が多かったが、36% の人が、「はい」（したことがある）と回答している。

- ・ **オープンガーデンを行った庭主の意識**

回答者の多くが、「庭づくりに対する満足」、「生活の充実」、「庭づくり技術の向上」、「近所の人と話す機会の増加」、「他地域との交流や参加」、「外向きに庭づくりを考える」、「まちなみの美化を意識」等について肯定的に評価している。一方、「知らない人が来ることによる防犯上の問題」、「庭づくりに対する批評や批判がいや」、「近隣からの苦情」といった、マイナス面については、「そう思う」とする人は殆どいなかった。

- ・ **今後のオープンガーデンに必要なこと**

オープンガーデンをこれからも広く行っていくために必要なこととしては、多い方から、「お知らせなどの広報・周知」（42%）、「一緒に協力してくれるグループ」（40%）、「自分の技術の向上」（32%）の順となった。

●これからの活動

ひょうごボランタリープラザの行政・NPO 協働事業助成事業にて「兵庫県下オープンガーデン化推進プロジェクト」を展開する予定。

1. 「オープンガーデン参加促進システムづくり」

一般市民に対し、オープンガーデンへの参加を誘導するマニュアル作成

2. 「オープンガーデン開催促進システムづくり」

オープンガーデンと公共施設のみどりがネットワークした地域づくりを進めるための協議会の組織化

3. 「オープンガーデン運営支援システムづくり」

園芸産業等の民間企業のネットワーク構築

4. 「オープンガーデンツーリズム資源化システムづくり」

観光資源化し、新しいタイプのツーリズムの完成を目指す

復興まちづくりから生まれるコミュニティースペースの創造

阪神淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション
(兵庫県神戸市)



集会所の建設予定地

I. 活動の背景と目的

1-1. 背景

御蔵通5・6・7丁目地区は、阪神・淡路大震災以前は幅の狭い路地を挟んで木造長屋が建ち並んでいた。長屋は格子が室内と室外の淡い移ろいを伝え、瓦が葺かれた屋根は、重厚で変化に富んだ家並みを造っていた。辻々の祠の中にはお地蔵さんがあり、夏の風物詩として地蔵盆では子供達の楽しい行事として営まれた。また植木の水撒きや井戸端会議の中心であった井戸、路地を飾っていた植裁と路地は日常を映し出していた。地域は歴史も古く御蔵遺跡をはじめ幅広い年代の遺跡（弥生・古墳・奈良・平安・中世）が出土している。

1995年の阪神・淡路大震災で80%が全焼し大きな被害を受け、区画整理事業が施工された。道路は、6mに拡幅され、空き地も多く残っている。建設される住宅の大半は、工業製品として流通している無機的な材料で造られている。個々の住宅はデザインされているが、均質で住宅展示場のような冷たい感じのする町並みを造っている。

1-2. 目的

2001年の夏ごろ、復興区画整理事業の担当部局である神戸市都市計画局より、「土地を提供するので集会所建設の補助金制度を活用して地域の集会所を作つてみないか」という呼びかけが御蔵通5・6丁目町づくり協議会（以下まち協）にあった。地域内の人人が寄り合えて、学習、読書、語らい、趣味を生かした交流の場を建設するため、まちの住民が集まって話し合っている。本当に必要な集会所となるように集会所の必要性や、集会所を利用した活動内容の検討も行っている。さらに、実際の集会所の利用方法や、建て方について先行事例を見学する事で確認を行っている。見学先でも見られた利用されていない施設は、暖かさを感じないと住民は言っている。それは資産としても無駄になる。地域で行っている検討委員会では“木のぬくもり”“暖かみのある場”になるような集会所の建設を目指そうとまとまった。“集会所に古民家移築を”と提案があり古民家を探しあて木のぬくもりがあり暖かみのある集会所にするべく、様々な活動を通して集会所の建設を進める。民家の魅力に加え、集会所のプランや利用方法、建設工事に関わることで親しみが生まれる。集会所が建設された時には新しい街の拠点となり、日常

的に住民がくつろげる場として育まれる。場が育まれれば、人が育まれ街に魅力と活気が生まれてくる。新しい街の展開が起こり、さらなるまちづくりが行われる。防犯活動、防災活動、福祉活動など地域がつながりコミュニケーションが生まれる。

多くの活動の拠点となる為に建設のプロセスを開くことで参加意識が出来る。その建設プロセスを築き、開けた施設になることを目的とする。

II. 活動の内容

2-1. 魅力ある施設の創造

集会所の建設に向けて進める中で、検討する委員会（御蔵通5・6・7丁目建設委員会）を1ヶ月に2回、地域周辺の施設を使って実施している。御蔵通5・6・7丁目には集会所がないが、周辺地域には数多くある。その為に、他地域との区別や利用方法を参考にして新しい施設造りを考えてきた。

(1) 建設委員会の開催と地域内施設の使い方と問題点。

(2) 集会所の使い方を考える。

(3) 他地域の自治会館の見学。

（東灘区：清流会館、御旅会館、北区：八多町地域ふれあいセンター）

(4) 見学会で見た施設を振り返る。

御旅会館、清流会館は鉄骨造の建物で、清流会館は地域内からボランティアを募り毎日誰かが常駐し毎日の運営を管理していた。八多町地域ふれあいセンターは一部に地域の茅葺き民家を移築した和室を持っていた。その他に、ホール、児童館などを持った複合施設でスケジュールボードを見ると、ぎっしりと予定が書き込まれ、地域の中心になっていることを実感させた。そして、古民家が集会所として再生されている事に驚き、民家がもつ人を引き寄せる魅力が地域の中心を形作っていることに関心を持った。意見を集約し民家移築を進めていく。

2-2. ハードとソフトの両立

民家移築で集会所を建設することを約束し、建設委員会を進めて行く中でいろいろな方々の協力を得て、香住町安木にある築120年の民家を探し出すことが出来た。これは、北前船を出していた村の船員の家で大きさも30坪程度と集会所とするにはちょうどいいものだった。

住民と支援者を含め総勢60名でバス一台を仕立てて民家の見学会を実施した。その途中には、民家を再生して博物館にしたものやモデルルームになっているものがあり、民家に手を入れることでかわる様を見て貰いながら解体し移築する民家の見学を行った。120年の間風雪に耐え忍んできた建物は、一見すると廃屋にしか見えなかった。しかし、建設委員会などを通して



検討委員会の様子

培ってきたものを駆使すれば新しく生まれ変わる様を創造し見ることが出来た。地域としては、前の主の方に「移築されても、神戸の御蔵に来れば思いの詰まった家と再会できます」と伝えている。また、典型的な民家型の平面でもあるために、文化を残す意味でもそのままの再現を原則とした。平面を変えずに集会所とするためにはどうすればいいのかと、集会所の使い方、部屋の大きさなど何度も話し合った。建設工事が進む中でもワークショップやアンケートを実施し、集会所の使い方を常に考えた。

2-3. 解体工事や建設工事の役割

解体工事には、大阪にある建築を学ぶ専門学校の学生や神戸の学校の学生に建設ボランティアとして参加を呼びかけ約60名の学生が集まった。香住町の体育館を借りて、泊まり込みで二週間解体工事を行った。建築を志す学生にとっては実際に建物にふれる機会であった。屋根瓦の撤去に始まり野地板、垂木、母屋と順番にはずしていく作業を解体工事の指揮をしてくれる大工の元で実施した。村の道路は狭く、民家には軽トラックが入るのがやっとであった為に材料を運ぶのは人海戦術で行った。建物を造っている材料の質感、質量に触れ日頃味わうことのない充実感を得た。香住町安木村の最後には、地域間交流としてふれあいコンサートを実施し長田名物のそば飯をふるまった。

解体後も、建設に向けて土壁の下地となる竹の伐採、土壁の中に入れる藁の確保、解体した民家から運んできた壁の土造り、民家部分以外に水回り部分を建て増しするためにその部分の木材伐採などを行った。

III. 活動の効果と今後の課題

3-1. 効果

地域で実施している勉強会では“木のぬくもり”“暖かみのある場”になるような集会所の建設を目指そうと話し合い、“集会所に民家移築を”と決まった。香住町安木村は北前船を出していた村であり、寄港地の最後が神戸と言う事もあり文化的な繋がりも感じられる。その古民家を住民が参加し解体、建設作業にも立ち会うことでより親しみが沸き気軽に立ち寄れる施設の建設が可能になる。また、民家移築の集会所が建設されることで年齢に制限がなく子供から老人までの異世代交流が出来る場となる。老人には昔懐かしい場になり囲炉裏を囲んで昔話に花が咲く。また、調度品（和箪笥、船箪笥、大八車、提灯、かまどなど）も一緒に頂けるので、子供には昔の日本文化に触れる身近な教材になる。異世代交流の場になり文化伝承の場になる。日常的に利用されない施設は資産としても無駄が多く折角造ったのに利用されないものとなる。そこで、常日頃人が出入りできる場所とする様に住民が共に考える機会をつくる。キッチン



瓦おろし解体作業



軸組み解体



土壁解体

の見学会や部屋の利用方法を考えることで、集会所で出来ることを考え何が必要かと思いを巡らすことが出来る。

解体工事は、大阪にある建築を学ぶ専門学校の学生や神戸の学校の学生に建設ボランティアとして参加を呼びかけた。建築を志す学生にとっては実際に建物にふれる機会である。実際に建っていたものを解体し、昔の大工が作り上げた痕跡を解読しながらの作業に手の技を肌で感じることが出来る。建物を把握する意味でも充実したものになり学びの場にもなる。また、学生が関わることで他の場所で解体工事や建設工事を語り、より多くの人が御蔵の集会所を知ることになる。外からの目は、地域住民を元気付け励ましてくれる。地域に学生が足を運ぶことで若者の建物に対する思いが地域に波及し、自信を持つことができる。また、住民と外部からの支援ボランティアがこの集会所建設に「もの（現物支給）」「かね（資金援助）」「ひと（労働力提供）」の援助をすることで、いつの時代にも通用する人が豊かになるための新しい住民参加まちづくりの確立を目指している。

解体工事後の建設工事準備としては、昔ながらの建て方を行うために土壁の下地となる竹の伐採、土壁の中に入れる藁の確保、解体した民家から運んできた壁の土造り、民家部分以外に水回り部分を建て増しする。その部分の木材伐採などを通して、家が出来るプロセスを住民、建設ボランティアと共有することでそれぞれの手が加わった痕跡から建物に愛着を持ち、ちょっとしたことだと自らが補修し手入れをすることが出来る。手が入ることでいつまでも集会所として維持され、柱の傷や壁の出来を批評しながら輪になって集まることが出来る。

今後のまちづくり活動においてふれあい喫茶、ミニディなど地域の中で地域が支える活動の拠点が出来、復興まちづくりがこの施設と共に歩んでいくことになる。

3-2. 今後の課題

この工事の施工者は、集会所の建設だけを受け持つのではなく、住民や建設ボランティアの参加を理解し協力体制をつくって行かなければならない。工事期間中の問題も含めて積極的に対応していただけすることが最優先とされるので金額もさることながら難しい選択である。

抱える問題がもう一つある。運転資金の調達である。事業費としては、復興基金からの補助金が最高3,000万円と御蔵通り5・6・7丁目まちづくり協議会が持つ800万円を加え3,800万円と考えている。3,000万円の補助金は、建設工事が竣工し実績報告書を提出してから二ヶ月後となる。施工工事期間中に支払われる前払い金、中間金を支払うことが出来ない。施工工事会社の負担を強いるとても施工者は金利を払うことになる。金利は安くとも、百数十万円からのお金を支払わなければならず、



竹取り



土作り

余力のある工務店にお願いするか地域で資金を造り運転させていくことしか考えにくい。何とか、地域で資金を造り運転していいのかと模索を行っている。

建設が進められ集会所として形が現れる時には、集会所を運営し活動していくソフトの構築が必要になる。意識と活動を継続し、担い手を育んでいくことも大切なことである。



民家模型作り



解体工事に参加した学生とともに

3-3. さいごに

2003年4月2日、神戸市都市計画局と土地の賃貸契約が締結された。建設用地は、通常の建設用地よりも大きなものである。民家は、土壁の外側が杉板で覆われ、軒裏も化粧で垂木に野地板が現れていた。この地域で建設しようとすると隣地境界からの距離が短くなると防火的に建てることが出来なくなる。その為に、広い土地を提供して欲しいと要望していた。最初に提案された敷地は、隣地境界から建物までの距離は法的に必要な5.0mを確保していた。行政より一時は提案された敷地であったが、公平性という理由から面積を減らすことが出来ないかと打診があった。民家は香住で建っていた時の姿をそのまま再現しようと計画していた。香住町の文化と生活までをできるだけ継承し、地域の子ども達と民家が生きてきた生活を実感したいと考える。敷地が小さくなると隣地境界からの距離は3.0mとなり、元の姿では建設が出来なくなる。地域としては前の持ち主の方に、「思いの詰まった家が神戸の御蔵に来れば再会できる」と伝えていたこともあるってどうしても譲れなかった。地域の女性達も、まちづくり活動や集会所の運営方法など想いを伝えるため、行政担当者に度々足を運んだことも大きな力となって4月2日を迎えることが出来た。土地の契約が結ばれたことで集会所の建設が前に進んでいくことが出来る。4月3日には土地区画整理法76条申請書、福祉のまちづくり条例、埋蔵文化財届出書、建築確認申請書などを提出し、今は審査中である。また、工事施工者の選定を含め工事金額の調整を行っている。申請手続きに工事金額が決定されれば、安心コミュニティー設置補助の申請がある。補助金交付決定通知があった段階から工事着工が出来る。

土地の件などは、地域の活動が評価され思いが伝わった証である。この住民の思いを意識し建設ボランティアなどの参加に理解があり、集会所の建設だけでなく地域を育んでいく一助を行ってくれる施工者を決め、住民に愛される集会所が建設されることを期待し、生まれた集会所でより一層御蔵通5・6・7丁目のまちが育まれることを望んでいる。

＜団体活動データ＞

■阪神・淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション

活動テーマ	復興まちづくりから生まれるコミュニティスペースの創造
活動目的	阪神・淡路大震災後の復興まちづくりの経験を活かし、日本各地でのヒューマン・スケールのまちづくりを支援することにより、もって市民の生活の質の向上およびサステナブル・コミュニティの建設に資することを目的とする。
設立年月	1996年4月
代表者名	宮定章
活動地域	神戸市長田区
メンバー	17名 団体職員、学生、会社経営者等

●団体設立の経緯

阪神・淡路大震災の際、震災ボランティアとしてグループに所属して活動していたメンバーの一人が震災で全焼し、区画整理の指定を受けた御蔵通5・6丁目町づくり協議会の役員会に出席したことをきっかけに、まちづくり市民活動を支援する目的で、地元の会社経営者とともに立ち上げた。

● 活動地域図（活動位置図）

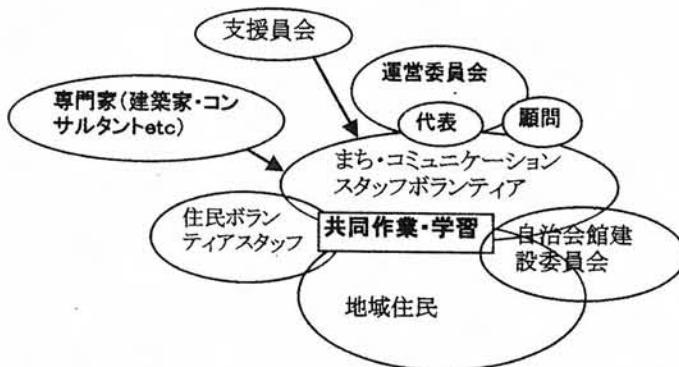


(まち・コミュニケーションホームページより)

●これまでの活動

同地区はもともと古い長屋が軒を並べる下町であったが、震災で壊滅的な被害を受け、8割以上の家屋が焼失した。その後、区画整理が行われたが、避難所や仮設住宅に入った人で戻ったのは約3分の1で、地区の住宅再建はほぼ半分にとどまっている。いまだ多くの空き地が残っており、その地域の再生に向けた活動、支援を行っている。

- ・1995年阪神淡路大震災発生。区画整理地域に指定され事業開始。
- ・まちづくり協議会の支援としてまちに関与する。
- ・共同化住宅「みくら5」のコーディネイト役を担う。
- ・現在もまちづくり支援としてイベントの支援（慰靈祭・盆踊り・餅つき・月見の会など）
- ・自治会館の建設準備会の支援活動



1996年1月	御菴地区震災犠牲者慰靈法要開催（現在に至るまで毎年開催）
1996年4月	阪神・淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション設立 共同再建住宅コーディネート開始
1996年8月	河内音頭夏祭り開催（現在もつづく）
1997年8月	第1回御菴学校＜地域で学ぶ勉強会＞開催（現在に至るまで、年2回開催）
2000年1月	共同再建住宅＜みくら5＞竣工式
2000年3月	地域住民と共に台湾被災地訪問（以後2回訪問）
2001年5月	震災勉強を希望する修学旅行生の受入開始
2001年9月	台湾被災地支援チャリティーコンサート「ひまわりコンサート」開催
2003年1月	写真展「震災から8年いま・むかし～まちの写真展～」開催 第7回防災まちづくり大賞（総務省）総務大臣賞受賞

●助成対象活動

神戸市から土地の提供を受け、集会所を建設しないかという話が御菴通5・6丁目町づくり協議会にあり、協議会内に建設委員会が発足。集会所のあり方について検討したり、他地域の事例をみた結果、兵庫県城崎群香住町安木の古民家を移築して集会所として再利用することになる。今回は古民家の解体と集会所建設工事のための、土づくりや木材の準備などを行った。

2002年6月 古民家見学会、調査

8月 古民家の解体工事

9月 解体材の運搬

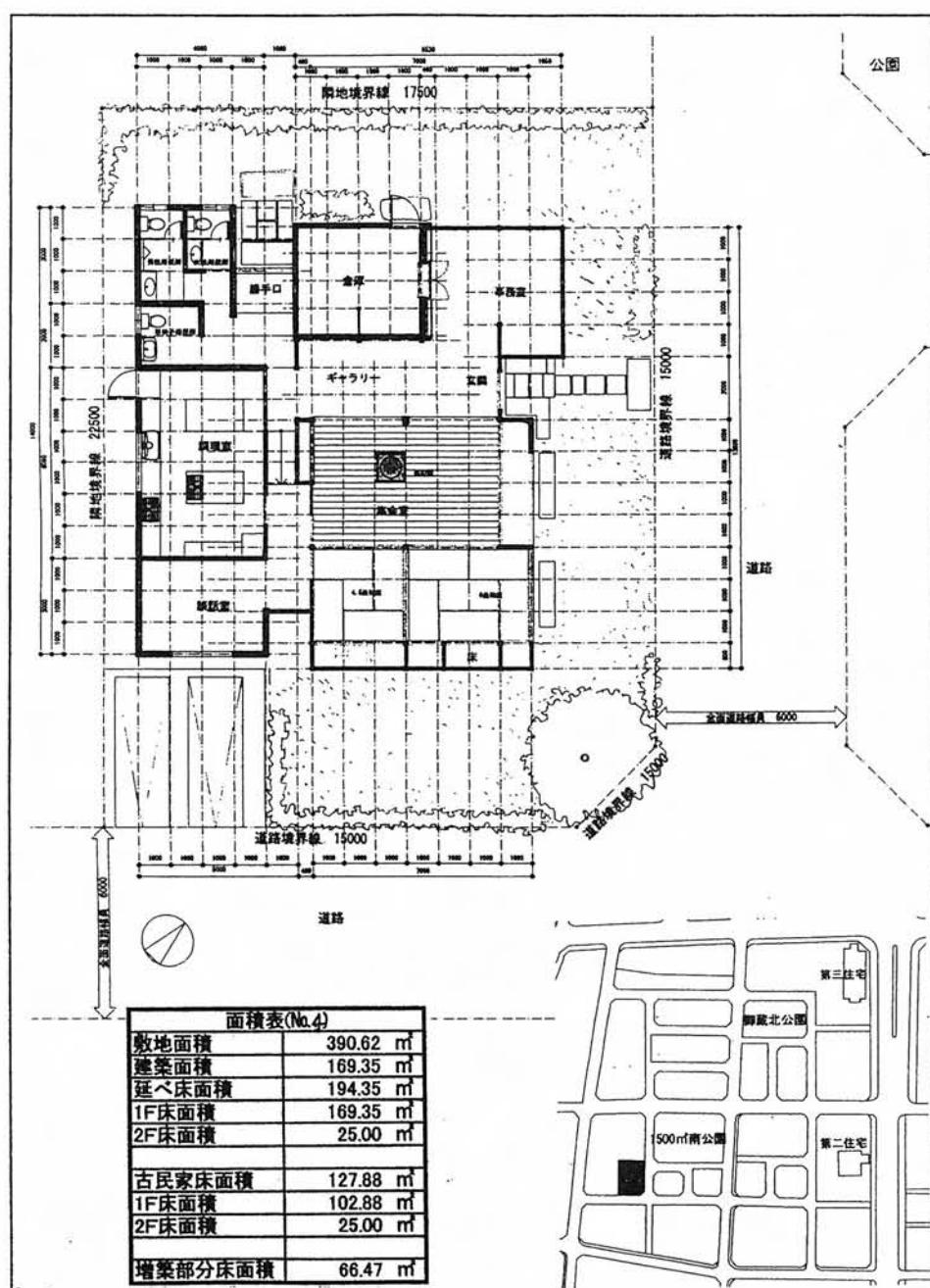
10月 竹、藁取り、土壁の土造り

11月 土壁の土造り、木材伐採

12月 木材の製材

(集会所平面図及びその位置)

- ・場所は御蔵通6丁目に計画している公園の西側
- 古民家を移築・再生した建物を中心に、厨房施設やトイレなどを追加



●これからの予定

建設に向けて、神戸市と土地賃貸借契約の締結、必要な申請書類の提出、工務店の選定などがある。補助金が出るのが竣工後になるので、その間の資金調達も課題になっている。

総事業予定費 4000万円

補助金 3000万円（復興基金より）

残りは、地域の市民で調達する。

竣工は2004年の1月17日（地震発生日）を予定している。

長崎にコーポラティブ住宅をつくる

長崎にコーポラティブ住宅をつくる会
(長崎県長崎市)

I. 活動の背景と目的

長崎は、坂の町といわれています。すり鉢のような斜面が重なり合い、平坦地は港を囲むごくわずかです。坂にそって狭隘な道路が伸び、家々が建ち並ぶ…独特の景観と情緒を醸し出しています。

この斜面地は、高度経済成長期には急増する人口を吸収する大きな役割を果たしてきました。しかし今、密集する木造住宅は老朽化が進み、さらにモータリゼイションにより若年層が城外へ流失する中、高齢化も加速されています。まちづくりの上でも斜面地の住環境整備は、重要な課題とされています。

この間、行政側も密集市街地整備促進事業などにより、斜面地の再生に向けて住民参加のまちづくりを進めています。道路や公園など公共部門を中心に整備が進んでいますが、住宅など民間部分の建て替えがあまり進んでいません。

「長崎にコーポラティブ住宅をつくる会(以下「つくる会」)」は、長崎市の市民と行政の協働の場として設けられた「長崎伝習所」のコーポラティブ住まい塾などの卒塾生を中心に2000年3月に結成されました。つくる会は、「会員相互の協力援助によって住宅建設組合を生み出し、長崎で、コーポラティブ住宅づくりを進め、よりよい家づくりを目指し、健康的で文化的な生活を拡充すること」を目的としています。当面長崎でははじめてのコーポラティブ住宅をつくることをめざしました。

II. 活動の内容

つくる会結成から2年余り、例会や現地調査を重ねる中で、第1号プロジェクトの参加者を確定しました。3世帯9人と犬1匹という最小規模となりましたが、建設地を特定し、地主と交渉を進めました。当初土地購入で交渉しましたが、地主が一番気に入っている土地ということで難航、最終的に借地することで決着しました。

つくる会のメンバーが、資金計画から基本計画などで総力をあげて、第1号プロジェクトをサポートしました。その後基本設計・実施設計に入り、見積もり入札で施工業者を選定しました。全体の話し合いでこの第1号プロジェクトを「コーハウス南山手」と名付けました。



例会1



例会2

2-1. 例会

この間、19回例会を開催しました。参加者が来てよかったですといえる例会をめざして、内容の充実をはかりました。第1号プロジェクトの実施が確定してからは、その完成をめざす一連の活動が、例会の中心的な話題となりました。

2-2. かわら版の発行

つくる会の活動記録及び広報紙として「かわら版」を第40号から第58号まで発行しました。



かわら版

2-3. ホームページの開設

コーポラティブ住宅の魅力を発信するためにホームページを開設しました。

詳しくは、<http://www.co-house.jp>をご覧下さい。BBSのコーナーも用意して、コーハウス南山手の進捗状況など見ることができます。

2-4. 起工式

2002年11月9日にコーハウス南山手の起工式を行いました。つくる会の仲間や施工者など総勢50名ほどが集まり、アフリカ太鼓やバリの祈りなど賑やかなものとなりました。周辺の住宅40軒ほどにも着工の挨拶まわりをしました。その中から一緒にコミュニティを豊かにしていきましょうとのエールも寄せられました。



起工式

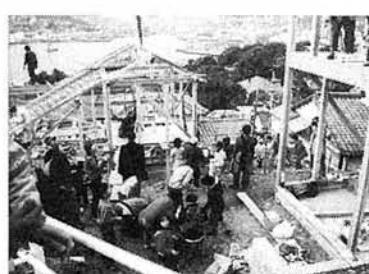
2-5. 記念講演会と報告

2002年12月14日結成2周年のイベントとして講演会に取り組みました。コーハウス南山手の着工記念も兼ねることにしました。つくる会の仲間をはじめ業者、市民など50名ほどが参加しました。

東京・世田谷でコーポラティブ住宅をコーディネイトしている甲斐さんをお招きして、環境共生の住まいづくりをコーポラティブに実現する意義を、理論的にかつ、わかりやすく講演をしていただきました。その後コーハウス南山手の紹介を行い、つくる会への加入を訴えました。

2-6. コーハウス南山手上棟式

コーハウス南山手の工事は、雨のため苦戦しましたが、2003年3月23日に上棟式まで辿り着きました。今後の工事が順調にトントン拍子で進むよう「豚汁」も用意し、職人のみなさんと交流しました。フィナーレの餅まきには、ご近所のみなさんなど100名ほどが集まり賑わいました。



上棟式

III. 活動の効果及び今後の課題

コーハウス南山手は、2003年6月末までに完成予定です。これまでのコーポラティブ住宅の概念と異なる小規模・戸建感覚のスタイルは、いい意味での「長崎方式」になるかもしれません。住宅を核とした新しいまちづくりの手法を提起しつつあるといえます。

つくる会では、2号棟の建設に向けて、新しい人が参加しやすいように例会の充実やコーハウス南山手の建設に沿ったイベントの企画、ホームページを使った情報発信などすすめています。一つのコーポラティブ住宅から新しいまちづくりが、市内に広がることを期待しています。



完成模型

<団体活動データ>

■長崎にコーポラティブ住宅をつくる会

活動テーマ	長崎にコーポラティブ住宅をつくる
活動目的	狭隘な道路、老朽木造密集住宅、斜面地など、住環境上様々な困難を抱える長崎において、入居者参加型のコーポラティブ住宅を建設する。
設立年月	2000年3月
代表者名	鮫島和夫
活動地域	長崎県長崎市斜面地区
メンバー	26名 大学教員、自治体職員、建築家、不動産業者、無職（退職者、主婦など）

●団体設立の経緯

市民と行政の協働の場として、人材の育成と政策を生み出す活動を行うことを目的に設けられた「長崎伝習所」(<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/denshusho/>) の「コーポラティブ住まい塾」の卒塾生を中心に設立された。長崎ではじめてのコーポラティブ住宅をつくることを当面の目標として活動をはじめた。

<位置図>



●活動の全体像

会員相互の協力援助によって住宅建設組合を生み出し、長崎でコーポラティブ住宅づくりを進め、よりよい家づくりを目指し、健康的で文化的な生活を拡充することを目的に、次の5つの事業を展開している。

- ・住宅協同組合事業実施に関する調整（コーディネイト）・技術援助。
- ・住宅協同建設に関する不動産・融資・税制・法律・制度などの情報収集・提供。
- ・いえづくり・まちづくりに関する学習会、見学会、研究活動。
- ・会員の拡大及び会員相互の交流親睦。
- ・会報の編集、発行。

●これまでの活動

- ・2000年3月、設立総会を開催。4月に第1回例会を開催し、本格的に活動が動きはじめる。例会では、住みたい家やまちのイメージづくりや広報のためのパンフレットづくりなどを実施。例会開催後は記録を「かわら版」にまとめて会員に配布。「かわら版」はA4サイズ1~2枚程度の分量だが、2003年3月までに第58号までを発行している。
- ・その後も例会や先進事例見学などを重ねながら、第1号プロジェクトの参加者の募集を行い、2001年7月、その敷地候補地を選定、同年12月、第1号プロジェクトの基本計画案を作成。



ワークショップ

かわら版

●助成対象活動

第1号プロジェクトについて、その参加者の確定、資金計画から基本計画までをサポート。プロジェクトは、その後、基本設計・実施設計、施工業者の選定、起工式、上棟式と進んでいった。

- ・例会の開催および「かわら版」の発行

例会は毎月1~2回のペースで開催し、主に第1号プロジェクトの完成をめざす一連の活動を実施。活動状況は、隨時、「かわら版」で発信した。

- ・2周年記念イベントの開催

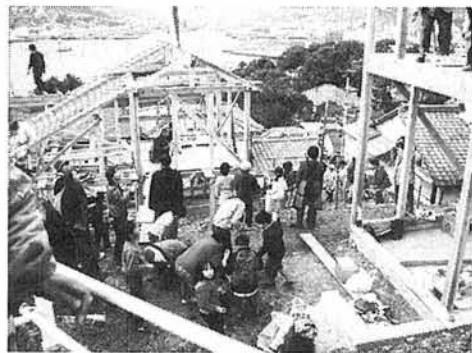
第1号棟プロジェクトの着工記念も兼ね、2002年12月14日、2周年記念イベントを開催。コープラティブ住宅に関する講演会と第1号プロジェクトの紹介を行った。

- ・第1号プロジェクトの起工式、上棟式

起工式（2003年11月9日）は、会員や施工業者などが集まり実施。上棟式（2003年3月23日）は、近所の住民の方々も招き、100名ほどの盛大なものになった。



着工式



棟上げ

助成期間終了後の2003年7月、第1号プロジェクト「コーハウス南山手」が竣工。広く市民に内覧会と記念パーティを開催。今後は、第1号プロジェクトの記録（ビデオなど）の作成や第2号プロジェクト立ち上げの活動を展開していく。

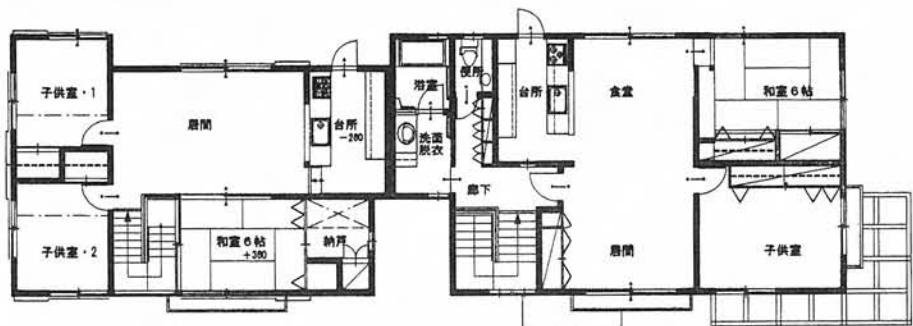
<コーハウス南山手データ>

敷地住所	長崎市東琴平2丁目8-8	
用途地域	第一種低層住居専用地域	
防火地域	指定なし	
その他の地区	風致地区 22条地域	
建ぺい率	50%	30%（風致）
容積率	80%	
土地形態	借地	

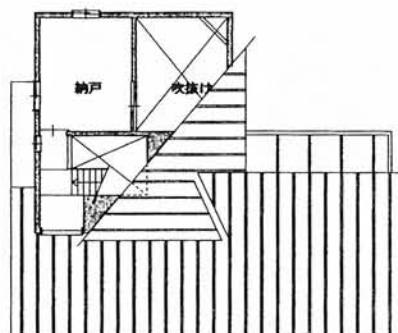
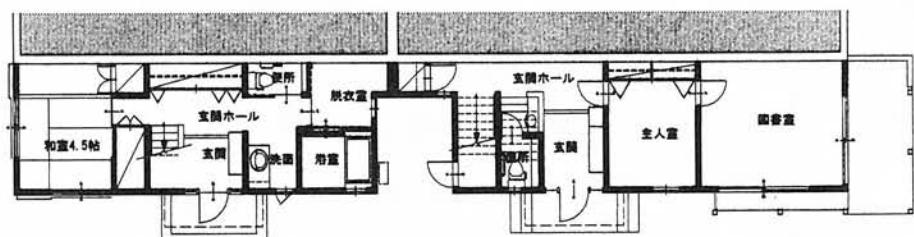
	A棟 鮫島邸	A棟 山崎邸	B棟 鈴田邸
敷地	522.48 m ²		209.61 m ²
建ぺい率	29.88%		29.73%
容積率	45.30%		37.59%
最高高さ	7172		6070
最高軒高	5169		5220
住戸タイプ	木造2F建て（長屋タイプ）		木造2F建て
延べ床面積	1F 2F	42.93 m ² 87.41 m ²	38.54 m ² 67.82 m ²
合計	130.34 m ²	106.36 m ²	66.79 m ² 13.23 m ²
			80.02 m ²



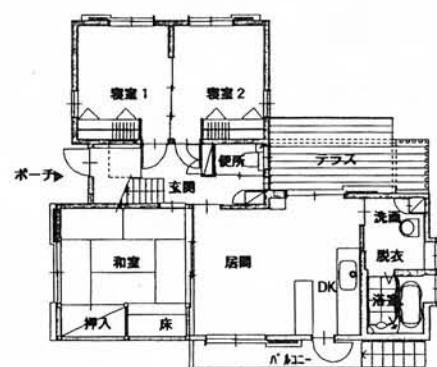
A棟-2階平面



A棟-1階平面



B棟-2階平面図



B棟-1階平面図

■一年を振り返って

ここでは、職員が担当した助成対象団体の一年間の活動を振り返り、その活動の意義や面白さ、可能性などについて執筆しています。

執筆にあたっては、担当した職員が、活動現場を訪問した時や、団体から提出頂いた活動レポート、その他資料から得た情報をもとに、各職員個別の切り口で書きました。

そこに書かれているのは、助成対象団体の活動のほんの一部かもしれません。しかしここでは私ども財団が職員の目を通して、各団体のこの一年間の活動の意義や位置付けをどう認識したのか、そしてまた、市民による住まいづくり、コミュニティづくりについて日頃どう感じているのかを、読み取っていただくことを意図しています。

風を求めて

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
プログラム・アシスタント

大内朗子

助成対象団体の活動の様子を拝見しに現地へ赴くと、私は大変緊張する。駅の案内板を何度も確認し、アナウンスにも耳をそば立てる。事前にメールや電話でのやりとりがあっても、顔を合わせたことのない方々への訪問は、とても不安を感じる。活動は順調に進んでいるのか、話にうまく溶け込むことができるか、いろいろなことが気になる。しかし助成対象団体の方と直に会話を交わし、活動現場を拝見すると、こんな不安は一気に解消する。それまでは紙の上でしかなかった出来事が生き生きと踊りだすように感じられる。「申し込み用紙を書いて下さったのはこの方だ！」「あそこに書かれていた現場がここなのね！」と、実際に目にすると、鮮明に頭に焼き付けられる。そしていつも思う。活動している皆さんの中には、強い輝きを持っている。吸い込まれそうになるくらいに。皆ご自身の活動について熱い思いを打ち明けてくださる。どこの現場にも、苦労して工夫して成し遂げたもの、成し遂げようとするものが存在する。それは単なるモノではなく、人の心が通った成果物だ。皆さんとお会いした帰りは緊張感が消え去り、私自身の中に活動されている方々の熱意が宿って元気になる。「来て良かった！　いい一日だったな！」と心が晴れる。財団内の経験の長い方々の話によると活動現場の最寄駅に降り立った際、風を感じるのだそうだ。直感が働くという。その土地の匂いがしてくると。私はまだ修行が足りない。

私が昨年度担当した団体を紹介する。

建築と子どもたちネットワーク仙台は、住環境学習を通じて子どもたちの創造性を育む活動をしている専門家の集まりだ。2002年度は2001年度に続いての助成である。2001年度には、仙台市内に唯一残る登り窯と作業場を堤焼の展示ギャラリーとして地域に公開したが、2002年度は更にギャラリーとその周辺を整備して、地域住民の交流の場へ発展させた。ギャラリーの展示品へのキャプション付け、案内板・暖簾の設置、登り窯の修復の他、新設された体験用の釜で堤焼づくりワークショップも行った。

佐渡住環境研究会は、地域内に目に付く空き家に注目した。空き家は島の人口減少、島内の経済衰退を象徴している。当団体はその空き家を地域資源と捉え、空き家の活用方策を検討するための地盤づくりを行った。具体的には、空き家の現状把握、(両津市、畠野町と連携した所有者へのアンケート調査)、アンケート結果を受けて空き家の可能性の模索、行政はじめ関連団体とのパートナーシップに力を入れた。当団体のコアメンバーは島外からの移住者で、自ら空き家だった家に

住んでいる。新鮮な発想・視点が地域を活気づけるきっかけになった活動だ。

とよさとまちづくり委員会は、30歳前後の若い世代を中心となり活動している団体だ。取り壊しを予定されていた蔵をメンバー自らが修繕し、活動拠点として再生させた。この蔵や周辺の古いまちなみを活かして、親子で楽しめる特産物のアピールイベント、地域に残るおはじきを使ったビリヤードゲーム大会を開催した。更に蔵の使用を通じて明らかになった不備などをメンバー自らの手で修繕している。

特定非営利活動法人アルファグリーンネットは、兵庫県立淡路景観園芸学校の生涯講座修了生を中心に構成されている。当団体は、「全国オープンガーデナーの集い」を開催した。これは、最近、各地で見られるオープンガーデンの取り組みを、まちづくりへ踏み出すきっかけづくりとすることを目指したものである。集いでは、全国の活動報告がなされた他、オープンガーデン実施地区の現地見学会も行った。

これらの団体は、どれも現在のコミュニティのあり方を問うものとなっている。

建築と子どもたちネットワーク仙台では、地域の歴史資源を見直す拠点が確立したことでの多様な人々との交流が生まれた。また、その拠点「地域体験学習センター」が継続的に機能することにより、住環境についての住民意識の向上にも貢献している。同センター内の体験窯は、窯元の陶工が堀焼の歴史・技術を直に住民に伝える場であるだけではなく、陶工自身の心の活性化にもつながっている。

空き家の活用では行政との連携が不可欠だ。佐渡住環境研究会が自治体との共同作業でアンケート調査を行ったことの意義は大きい。アンケート・ヒアリングを通して空き家を抱える地域住民との接点も生まれた。今年度の活動によって、空き家活用方策の提案は、着実に歩が進められたといえよう。なお、ヒアリングや既存資料調査を通じて、空き家はまったく利用されていない訳ではないことが確認され、その後のアンケートでは、留守住宅という用語が使われた。こういった細かい配慮が、アンケート調査を有意義なものにした理由になっていると考えられる。

とよさとまちづくり委員会では、少子化・若者流出により地域の若年層の減少が続いていることに危機感を抱きながらも、それを若者自身が楽しみながら活性化させようとしている点が特徴である。当団体の強みは、まさに皆が実際に手足を動かしてきたことだ。蔵を団体だけの拠点にするのではなく、地域のコミュニティスペースとなるよう意

識されている。「自分たちが楽しいことをやっている、それが「まちづくり」だった」と書かれている通り、自然体で楽しみながら活動している。地域の事物を自分たちの目線に引き込んでいる点がこの団体の大きな魅力だ。

アルファグリーンネットでは、単に花や緑を植え、庭をオープンにするだけではなく、暖かい人と人とのつながりが、美しいまちなみを形成するということを気付かせてくれる。オープンガーデンを実施されている各ご家庭において、暖かい笑顔のおもてなしを受けたことが強く印象に残っている。団体設立のもとになった兵庫県立景観園芸学校では、県民を対象に花と緑の講義や実技を通して積極的に地域づくりに参加する心を育むための生涯学習を行っている。人間の心が生み出すものほど大きなことはないと思う。

4団体の活動を振り返ってみると、地域を象徴する具体的なもの〈堤焼、空き家、蔵、花〉を核として求心力を高めていることがわかる。特に佐渡住環境研究会における「空き家」は、そのまま捉えたら地域にとって深刻なマイナスの素材であるが、それを地域の資源としてプラスに捉え、活動を推進していることに特徴がある。建築と子どもたちネットワーク仙台における「堤焼」は、人々から忘れられかねない地域資源だった。とよさとまちづくり委員会における「蔵」も、時の流れに任せて、当団体が行動をおこさなければ壊されてしまう存在だった。その点アルファグリーンネットにおける「花」には、危機感がなかったかもしれない。昨今の園芸ブームで、オープンガーデンに取り組む人・団体も多くなった。しかし一見わかりやすい素材ではあるが、コミュニティの再生・まちなみ形成を視野に入れて活動している人はそう多くはないのではないか。

これら4つの団体の活動現地を訪れて、どの活動でも求心力が増す際には、〈風〉が吹いて仲間やサポーターを集めているということを感じた。人と人が出会い、活動に厚みが増してくる。まちづくりにおいて、人の出会いが重要な要素である。私にとって、助成期間中だけではなく、助成終了後に本当の出会いが始まるのではないか。交流を続けることにより、心地よい風を感じられるようになるだろう。これから日々こそ大切にしたいと思う。

良い街、面白い活動

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団

プログラム・アシスタント

西野聖子

職業を聞かれて、とりあえず「まちづくりに関係する仕事です」と答えると、大抵の人は具体的なイメージが湧かないようで、少々戸惑い気味に「面白そうですね」と返ってくる。「まちづくり」は一般的に用いられるが、いろいろな意味を含む曖昧な言葉だ。その実、私自身も、助成対象のまちづくり活動を漠然と「面白い」と認識している場合が多い。そこで今回担当した3団体の活動が持っている意義を、私なりに「まちづくり」という、いわば手軽で隠れみの的な言葉を少しぬがしてみようという気持ちをこめて整理してみたい。

松陰コモンズは、築150年の古民家を再生し、コレクティブな暮らしの実践を目的とする活動である。居住者7名のプライベートな個室とリビングなどの共有スペースからなる古民家をシェアードハウス「松陰コモンズ」として、共同生活のルールづくりや日常生活の記録を行った。また、一階の大広間を地域活動の場「パブリックコモンスペース」として開放し、コミュニティの形成に努めた。

古く使えなくなったものをせっせと壊していく現代において、解体される予定だった建物を新たに生活の場として活用していることや、今回の助成事業をきっかけに共同生活のルールづくりと記録を残したこととは大きな成果といえる。共同生活のルールにおいては、公私の線引きなど沢山の問題があったというが、それらを乗り越える柔軟な知恵が多く蓄積されたことだろう。また、多くの人を迎えた玄関や古傷が残る柱など、建物を核とした記憶、かつてそこに住んでいた人の思い出が今なお生き続けている。記憶が生き続ける建物や町に強く惹きつけられるのは、私だけではないだろう。

やつお街並み研究会は、伝統的な街並みと現代人の生活が共存する町「八尾」において、『伝統の維持』と『現代に即した生活』両者の理想的な関係を検討し、提案することを目的とした活動である。おもなメンバーは、東京在住の建築家と法政大学の学生など、八尾に魅せられた地域外のメンバーで、地元で長年地域づくり活動をしてきた人が彼らをサポートしている。助成期間中は、提案を行うためには町の成り立ちや形式をより深く知る必要性を感じ、代表的な町家の実測調査を行った。また、住人を対象にヒアリングを実施し町に対する思いを調査した。

伝統を守ることと新しいものの融合は様々な分野で起こるテーマだが、それが街並みの伝統に関係すると特に難しいように思う。「私の

家」という個の意識が強い現代においては、それぞれの生活に即した要求が第一に優先されることが考えられ、第二義的な位置付けとなる「街並みへの配慮」「伝統の継承」という事が、どれほど強い意識を促す形で住民に受け入れられるだろうか。このような問題は、地域内のメンバーでは同じ地域に住むという条件ゆえに難しい場合が往々にしてあるが、同団体のように外部のメンバーによる働きかけは、未知数の効果をもたらすのではないかと期待を感じる。

また、当該地域の町並みはこれまで高い評価が寄せられ、行政も舗道の整備などを積極的に行ってきました。しかし、このまま何もしなければ連続した町並みは確実に失われる。この時、誰が何をするのか？地域住民の自発的な取り組みを歓迎する声はよく聞かれるが、同団体はまさしく自発的に町並みを保存し活用しようと始まった典型事例であり、こうしたケースに寄せられる問い合わせの答えにつながる事例となるのではないだろうか。

富士エコハウスプロジェクトは、リサイクルした藁や土など自然素材からなるエコハウスの建設を通して、新しい住まいと環境の提案を目的とした活動である。日本大学湘南キャンパスに約10平方メートルの施設「アトムハウス」を実験的に建設し、日本の気候風土にどのように適応するか、などデータを収集し検証した。アトムハウスの建設においては、地元の小学生や全国から集った希望者とともにワークショップを数回実施し、地域とのつながりを意識した。ワークショップでは、大人も子供も一緒になって泥だらけになりながら、自然素材の感触を楽しむ姿が見られた。

藁は農業の副産物であり、無駄をなくしローコストを実現できる。また藁をブロック状にしたものを壁とするため、断熱効果に優れており、漆喰を塗って仕上げれば耐水性もあるという。究極のエコロジー・ハウスを目指したプロジェクトである。ただし、このエコロジーな家が日本の風土に馴染むかは、まだ検証されていない。助成事業をきっかけに、大学と共同してデータによる客観的な裏付け作業を行ったことは大きな成果である。

さらに、「アトムハウス」は地域の小学生から大人まで色々な人の手によって建設された。家を自分の手で作るなどごく一部の人以外には考えもしない時代だが、作業を行っていると不思議と連帯感と家を作っているという実感が湧いてくる。青空の下で、一段一段と藁を積み上げ、泥まみれになりながら土を塗り重ねる作業が、単純ながらと

ても楽しい。この“楽しい”ということが、同プロジェクトの強みであり、人のつながりを喚起する秘訣のように思う。

もともと建築やコミュニティづくりの分野に興味を持ったのは、住んでいる人や訪れた人が「良い」と感じる街を私自身がつくりたいと強く思ったことがきっかけだった。では一体、「良い」につながる活動とはどういったものか。『〈自分が感じる空間〉〈形としてあるもの（建物など）・形としてないもの（歴史や文化など）〉〈人の関係性〉の三つにおいて「良い」といえる街を目指している活動』、としてみたい。

空間を捉える時に、一つには、形としてある一個の建物が「良い」を決定する要因となるだろう。富士エコハウスのようにデザイン力のある家一つで「良い」に貢献するというわけだ。もっと広いスケールで捉えたときには、松陰コモンズのように人々の思いや歴史を大切に紡いでいる空間（場所）が「良い」の大きな要因になると考えられる。

さらには、そこにあるモノが「良い」ものでも、そこに住む人に親しまれていないモノや生活感の欠けた単なるモノであれば、どこか人工的で味気ないな「良い」で留まるかもしれない。そういう場合は、やつお街並み研究会のように、調査の過程で町民と意見を交わし、人と人のつながり・関わりを積極的に築くような活動が「良い」の要因として加えられなければならないと思う。

3団体の活動は、こうした意味で「良い」街づくりの参考となり、漠然としてではなく、ある角度を持って「面白い」と感じるのだ。

「多様な主体の参加」に期待するところ

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
プログラム・オフィサー

中村裕

今年も、各助成対象団体の報告をいただいた。それらを読んだり、現地に足を運んで団体の方々に話を聞いたりすると、どれも、地域を愛し、目指すビジョンに向か、精力的に活動された様子が伝わってくる。

なにより、自分の周りにある課題を、他にまかせるのではなく、自らが動いて解決しようとする彼らの意思と情熱に、いつもながら、これから市民活動の未来を感じる。

その助成対象団体の中から、私が担当した5団体の1年間の活動を振り返り、そこから私なりに感じたことを書いてみたい。

当別町農村都市交流研究会は、札幌の北東に位置する札幌市当別町金沢地区で、里山環境を活かした田園型の戸建コーポラティブ住宅を建てた。一昨年5戸の住宅をつくり、昨年は別の土地を確保し、第2期の住宅づくりをスタートさせた。彼らはその里山を「自然公園化」する構想を持っている。その手法として「蹄耕法」と呼ばれる牛を自然に放し飼いにするだけで草地にする手法を利用する。これは人間の手をほとんど入れずに行なわれる技術だ。街中の公園でなく、里山の一部を数百ヘクタールにも及ぶ広大な公園に市民主体で整備することは、実現すれば画期的なことであるといえよう。

特定非営利活動法人自立センターふるさとの会は、東京の通称山谷地域で、次第に増えつつある路上生活者の支援を1990年から行なっている。地域内の元旅館などを借り上げ、そこをケアのサービスを付随させた宿泊所として生活保護を受けている路上生活者に提供し、再び路上生活に戻らずに、地域の一員として自立できるようきめ細かい対応を行なっている。特筆すべきは、彼らが路上生活者を自立させることが地域の活性化に繋がるとの視点を持っていることである。今回は、隅田川沿岸や近隣の商店街に集まっている路上生活者の実態を調査し、そこから得られたニーズに合わせたプログラムを作成、実施し、その評価を行なった。

特定非営利活動法人コレクティブハウジング社は、日暮里の中学校跡地に作られる複合施設の中にできるコレクティブハウスのコーディネートを行なってきた。3年前から初めて、いよいよ今年の6月の完成に向けて最後の入居者とのワークショップなどを行ない、入居後のコレクティブな住まい方の実践に向けた準備を行なった。

「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会は、特定非営利活動法人信楽陶器研究会の呼びかけで有志が集まり、「野焼き」で家を作った。遊休農地を借りて全国各地から集まった人たちの手で、4m半の高さの家を丸ごと焼いたのだ。助成期間中には、家がある場所で野焼きによる「土鍋づくりセミナー」を行なった。野焼きによる家はできてみる

とその農村の風景によく溶け込んでいる。信楽焼きが「家」となって景観の中に加わることで、見るものに、環境問題から、伝統文化、技術の継承の問題など、多くのことを訴えかけている。

釜ヶ崎居住COMは、ふるさとの会と同じく、ホームレスの支援を行なっており、東京の山谷と並ぶ、労働者の街として知られる釜ヶ崎で活動している。ホームレスの問題は多分野にわたり総合的な問題と捉え、それまで、個別に支援活動をしていた釜ヶ崎での団体のネットワークをつくり、多くの外部の参加を求め、様々な活動を行なっている。今回は簡易宿泊所からのマンションに転換したサポートハウスの居住者ニーズ調査や地域通貨の流通促進、ボランティア養成講座の開講などを行なった。

振り返って見ると、これらの団体の中には企業や、技術者と連携している団体や、組織そのものに資金力のある団体があることがわかる。

当別町農村都市交流研究会では、里山のふもとに5戸の田園型コープラティブ住宅を作った。それを実現できたのはメンバーに地元の建設会社の経営者がいたからだ。もちろん住宅をつくった建設会社は営利企業でないのでボランティアで行なったわけではない。このプロジェクトのビジョンと、建設会社のビジョンが一致していたのである。

ふるさとの会は、地域にホームレス支援のための宿泊所を5棟設置し、運営している。それらの資金は行政から支払われる生活保護費を活用している。彼らは年間一億以上の資金を動かしており、いわゆる事業性のあるNPO法人といつていいだろう。

コレクティブハウジング社は、東京の日暮里で本格的なコレクティブハウスを実現したが、建物はコレクティブハウスの上部階に有料老人ホームが入る複合施設で、建設は老人ホーム運営を多く手がけている民間会社が行なった。この会社はもともとコレクティブハウジングやグループホームのような「集まって住む」住まい方に強い共感を覚えている会社で、こと結びくことによって、コレクティブハウジング社のメンバーが長年、望んでいた本格的な賃貸型のコレクティブハウスの実現に至った。

「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会では、とにかく信楽焼きをつくる技術がなければなりたたない。その技術を提供したのが今回活動の中心となったNPO法人信楽陶器研究会である。そもそもこの陶器づくりの専門家集団が始めた活動とはいえ、市民活動に伝統的な専門技術が繋がった事例といえる。

釜ヶ崎居住COMは、その特筆すべき成果のひとつとして、サポー

ティプハウスの実現は見逃せない。サポートティプハウスは簡易宿泊所を、マンション、アパート（＝住宅）として改造したものだ。それによって居宅保護という制度が利用でき、多くのホームレスがサポートティプハウスに入居することによって住居を確保することができた。不況の影響で空き家が増えて困っていた簡易宿泊所の経営者の思惑と一致したともいえるが、参加している経営者は利益だけが目的でなく、地域に貢献する活動もあわせて行なっている。

市民によるまちづくり活動には、まちの多様な主体が参加することが望ましいとされている。活動の内容によって違うのはもちろんだが、その主体のひとつとして、例えば地元の企業が参加や連携することによって、活動が大きく発展する場合がある。

それは、資金を企業から得るということだけでなく、企業が行なう事業とビジョンが一致する部分で連携することにより、企業の持つ事業性が、市民まちづくり活動に、持続性と、自律性を付与する効果がある。

「多様な主体の参加」の先に、こういった効果が表れることを、期待したい。

コラボレーションとしての助成事業

財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
プログラム・オフィサー

吉野裕之

助成事業を通して、毎年、市民活動団体とのお付き合いが増えていく。私たちH&C財団の職員にとって、とてもうれしいことである。

そもそも助成事業とは、財団と市民活動団体とのコラボレーションによって成り立つものである。「助成」ということばに着目すれば、資金援助をする／されるという関係ではあるが、もうすこし大きな視点で見ればつきのような言い方ができるだろう。財団が考えるこれからの住まいとコミュニティづくりのあり方に賛同する市民活動団体が、それぞれの地域で具体的な活動を行い、その考え方へ形を与えていく。つまり、資金援助をきっかけに、役割分担をしながら地域への働きかけを実践していくのである。

とはいっても、これからの住まいとコミュニティづくりのあり方について、必ずしも明確に言語化された回答があるわけではない。それにはたとえばつきのようなことが背景にあるように思う。地域とは、さまざまな人びとが生活をする場のことである。そのため、住まいとコミュニティづくりには自ずと多くの人びとが関わっている。人びとはさまざまな価値観や人生観をもち、さまざまな立場や状況に置かれている。こうしたなかで、関わる多様なすべての人びとが共有できる考え方を見いだすのはとても難しいことである。また、生活の現場＝日常は、理性だけによって統合されているわけではない。日常を形づくる一齣一齣を思い出してみると、どちらかといえば感覚によって判断がなされることが多く、ときに無意識によって判断されることも少なくない。生活の現場、つまり住まいとコミュニティづくりの現場では、そのよりよいあり方を理性＝言語だけによって組み立てていくのはけっして簡単なことではないのである。

しかしながら、住まいとコミュニティづくりに取り組む市民活動団体が各地で着実に成果を積み重ねている。その具体的な事例から、むろん試行錯誤しながらではあるが、私たちはこれからの住まいとコミュニティづくりのあり方について、そのイメージの輪郭をより確かなものにしつつある。市民活動団体とのお付き合いが、私たちの議論を豊かにしてくれているのである。

昨年度も、十数団体との新たなお付き合いがはじまった。そのいくつかの活動の現場を拝見し、また今回すべての団体の報告書を拝読した。ここでは、私が担当した4つの団体の事例を中心に、昨年度の助成事業を振り返ってみたいと思う。

チーム黒堀プロジェクトは、多くの歴史的建造物が残る、新潟県内でもっとも古い城下町といわれる村上市で、小路に黒堀を建設すると

とともに、宵の竹灯籠まつり開催の活動を行った。黒塀建設は、既存のブロック塀に板を打ち付けるもので、安価でそれほど難しくない作業で実施できるものである。費用については一口千円の寄付を募り、作業は市民による手作りによって実施した。

ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会は、旧八幡郵便局（近江八幡市）の保存・再生・活用の活動を中心に、ヴォーリズ建築を通したコミュニティづくりや全国のヴォーリズ・ファンのネットワークづくりを行っている。助成対象活動は、会の広報活動（パンフレットや活動紹介パネルの制作、ホームページの運営など）。設立5年を迎え、さらにステップ・アップを図るための広報活動を展開した。

阪神淡路大震災まち支援グループ「まち・コミュニケーション」は、震災で80%が全焼し、区画整理事業が施工された地区（神戸市長田区御蔵通）で、まちづくり支援活動を展開している。昨年度は、集会所づくりに臨んだ。兵庫県香住町の古民家を移築し、集会所として再生しようというもの。「自分たちのまちは自分たちでつくる」をコンセプトに手作りで挑戦している。

長崎にコーポラティブ住宅をつくる会は、坂の町・長崎の斜面地で、斜面に負けないで、斜面になじむコーポラティブ住宅の建設に取り組んだ。例会を重ねるとともに、かわら版を発行したり、ホームページを運営しながら、予定より若干遅れて、今夏、小規模・戸建感覚のコーポラティブ住宅を実現した。

団体の報告書には、活動のノウハウがたくさん詰まっている。そのうちのいくつかを紹介しよう。

まず紹介したいのは、自らからだを動かすこととそれに多くの人びとを巻き込む仕掛けづくりの大切さ。

阪神淡路大震災まち支援グループ「まち・コミュニケーション」は、まさしく自らのからだを動かして活動を展開している。古民家の移築のための解体には、神戸や大阪の学校の学生の参加を得、泊り込み2週間の工事を実施。「実際に建っていたものを解体し、昔の大工が作り上げた痕跡を解読しながらの作業に手の技を肌で感じることが出来た」。からだを動かさなければ、絶対に経験できないことである。

ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会では、旧八幡郵便局の改修工事をイベントとして実施。今年度に入ってからは、大学生を中心とした実行委員会を設け、新しい感覚で改修を進めている。

イベントは多くの人びとを巻き込む仕掛けとしてはとても有効である。とくに非日常性をより多く組み込んだ演出は効果的。長崎にコー

ポラティブ住宅をつくる会では、起工式と上棟式をとても楽しいイベントにした。起工式では、アフリカの太鼓やバリの祈りなどが賑やかに式を盛り上げたようだ。

活動は順調に進むだけではない。チーム黒塀プロジェクトでは、宵の竹灯籠まつりのとき、予定していた竹が急に都合が付かなくなってしまった。いろいろ手を尽くし、最後は仲間を募り自ら竹を切り出し、悪戦苦闘しながらもピンチを切り抜けることができた。こうしたしなやかでしたたかな行動力も、忘れてはならないノウハウのひとつであろう。

こうした活動を通してあらためて思うのは、住まいとコミュニティづくりとは、場づくりを実践しながら、地域に新しい価値を創出することであるということである。ここでいう場とは、物理的な場であるとともに、可能性を可能性のままに維持する場のことである。「ここは可能性を秘めた場所で、少し手を加えることによって小路の景観が見違えるほど変わるはずだと思いました」。チーム黒塀プロジェクトのメンバーは、端的にこう語っている。そのまちをよく知ったひとの直感である。こうした直感を大切にしたいと思う。そして、「少し手を加えることによって」ということばを見逃してはいけないと思う。なぜなら、ここに市民活動を推進する本質のひとつがあるからだ。

市民活動では、一般に大きな資金や労働力を用意することはなかなか難しく、行政や企業が行うまちづくりと同様な活動を展開することはまず不可能である。しかし、小さな資金と労働力は、地域の多くの人びとが気軽に提供できるものである。チーム黒塀プロジェクトは「少し手を加える」ために、地域の人びとに一口千円の寄付と作業を呼びかけた。呼びかけは大成功だった。プロジェクトに多くの人びとが集まった。多くの人びとが集まることは、ひとりの小さな夢が多くの人びとの大きな夢に変え、そしてさらに新しい夢を生み出していく。「行政や商工会議所に頼むという姿勢から、(略)町は自らの心意気で良くするという考えを持ち始め、行動する人達が増え始めました」。

夢とは可能性の別名である。こうした夢＝可能性の連鎖が、まちづくりの土壤を豊かに育っていく。豊かな土壤は、行政や企業も含めた地域のさまざまな主体との連携をより効果的に起動する。そして、その近くはないかもしれない向こうに、連携ということばそのものが不用になる日があるのだと思う。その実現のための核になるのが、市民主体の住まいとコミュニティづくりの活動なのだと思う。

■参考資料

- ・公募内容
- ・助成対象団体一覧
- ・審査公表
- ・助成対象団体連絡先一覧

■公募内容

ハウジングアンドコミュニティ財団は住まいとコミュニティづくりにとって必要となる施設等の整備のための調査研究、技術開発、デザイン開発、政策提言等を自ら行うとともに、これらの諸活動を行おうとする方々への支援を通じて、個性豊かな住環境の創造に資することを目的に、1992年7月に設立されました。この目的にむけての一連の事業のひとつとして、住まいとコミュニティづくりについての民間グループによる先駆的・創造的な活動に対し助成を行います。意欲に満ちた方々の応募を期待します。

●助成の対象

民間非営利の有志グループが行う、住まいとコミュニティづくりに関する下記7項目の活動。

(1) 探検・点検型の活動

住まいとコミュニティづくりのきっかけになるような住まいのまわりにあるいろいろな魅力や可能性を探し出す活動。

(2) 施設の提案・創造型の活動

住宅地のなかで子どもの遊び場や、お年寄りがくつろげる場所など、生活を豊かにする施設を提案し、その実現をめざす活動。

(3) 住環境の保全・整備型の活動

花や緑を増やしたり、歴史のある建物を残し活用したり、歩道や道路を整備したりすることなど、住まいの環境を良くしたり、コミュニティの活性化につながるような活動。

(4) 自然の保護・活用型の活動

動物や植物の生態を守りながら、それを活かした住まいとコミュニティづくりを提案し、実現をめざす活動。

(5) 入居者参加の住まいづくりをめざした活動

コーポラティブハウスなど入居希望者があらかじめ参加する集合住宅の建設をめざした全体構想の策定、推進方法の検討、参加者募集などについての活動。

(6) 集合住宅の建て替え、増改築、大規模修繕をめざした活動

集合住宅の建て替え、増改築、大規模修繕をめざした居住者が中心となった調査、企画、計画についての活動。

(7) その他の活動

住環境教育、防災まちづくり、福祉のまちづくりなどの居住環境の創造・維持・改善につながる活動。

なお、助成対象となる活動には事業記録等の作成・出版、講演会・シンポジウムの開催費等も含まれます。

また、次のような活動は助成の対象とはなりません。

- ・著しく政治・イデオロギー・宗教・営利などの目的に偏するもの
- ・特定の事業の反対運動を目的としたもの
- ・実質的に完了しているもの
- ・原則として専ら特定の個人または法人、企業が所有している土地建物等の資産の増加を行おうとする活動

●助成金

1件当たり原則として100万円を上限とし、総額1000万円を予定しています。

●助成の決定

助成の対象は、住まいとコミュニティづくり活動選考委員会にて慎重・厳正に選考のうえ、2月開催予定の理事会にて決定します。

●助成期間

2002年4月1日から2003年3月31日の1年間とします。なお、継続して助成することがあります
が、この場合も各年ごとにあらためて申込、選考を受ける必要があります。

●助成の実施

助成を受けるグループの代表者は、財団と覚書を取り交わし、これにもとづいて計画を実施することとします。助成開始半年後に中間活動報告および中間会計報告を、助成完了後すみやかに活動概要報告、活動記録、活動内容がわかるようなカラースライド写真(10枚程度)および会計報告書を提出していただきます。なお、助成金は年2回に分けて支払います。

●選考

選考は下記委員会にて行います。

「住まいとコミュニティづくり活動選考委員会」

委員長 渡辺俊一(東京理科大学)

委員 井口百合香(暮しの企画舎)

委員 中島明子(和洋女子大学)

委員 橋本公博(国土交通省)

委員 春川真一(住宅金融公庫)

委員 廣兼周一(都市基盤整備公団)

委員 藤田忍(大阪市立大学)

委員 山島哲夫(財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団)

●選考基準

選考基準は次のとおりです。

- [1] 個性豊かな住環境の創造に貢献することであること。
- [2] 先駆的かつ創造的な活動であること。
- [3] 公益性が高く、かつ民間グループが取り組むにふさわしい活動であること。
- [4] 計画を実行する際の適切な人材の確保等、活動遂行能力が充分であること。
- [5] 地域に開かれ、広く発信しようとするものであること。

●応募の手続き

・応募方法等

所定の申込書(No.1～No.4)に必要事項を記入の上、当財団「活動助成係」宛、書留でお送り下さい。その際、選考結果通知用の官製はがき(連絡責任者の住所、氏名を明記)を同封して下さい。

・郵送にてご応募下さい。直接当財団への持参等はお断りします。

・提出資料は返却いたしません。

●応募期間

2001年10月1日から12月3日まで
12月3日必着。(12月2日までの消印有効)

●選考結果の発表

選考の結果は、同封していただく選考結果通知用のはがきによって3月中旬までに通知します。また、当財団のホームページに掲載します。

■助成対象団体一覧

■助成対象事業名

助成対象団体名（活動対象地域）

1. 当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして
当別町農村都市交流研究会（北海道当別町）
2. 地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」
*建築と子供たちネットワーク仙台（宮城県仙台市）
3. グループホーム設立のための路上生活者実態調査活動
特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会（東京都台東区・墨田区）
4. 『共生の暮らし』を目指すNPO相互の連携の場づくり
松陰コモンズ（東京都世田谷区）
5. 東日暮里での多世代・賃貸型コレクティブハウスの実現
*特定非営利活動法人 コレクティブハウジング社（東京都荒川区）
6. 佐渡島における空き民家の維持・活用に関する調査
佐渡住環境研究会（新潟県両津市・佐渡郡）
7. 市民の手作りによる町屋小路600mの黒塀建設と灯の祭
チーム黒塀プロジェクト（新潟県村上市）
8. 街並み、コミュニティーを壊さない駐車スペースづくり
やつお街並み研究会（富山県八尾町）
9. エコハウス建設を通した新世紀の住まいと環境の提案
富士エコハウスプロジェクト（山梨県上九一色村）
10. OLD&NEW 辻長蔵と憩の場の整備と活用
とよさとまちづくり委員会（滋賀県豊郷町）
11. 紫香楽・野焼きでいえをつくろう
「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会（滋賀県信楽町）
12. 「ウォーリズ建築を活かしたコミュニティづくり」情報発信事業
特定非営利活動法人 ウォーリズ建築保存再生運動一粒の会（滋賀県近江八幡市）
13. 野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成
*釜ヶ崎居住COM（大阪府大阪市）
14. 淡路から全国へ向けてオープンガーデンネットワーク
特定非営利活動法人 アルファグリーンネット（兵庫県北淡町）
15. 復興まちづくりから生まれるコミュニティ・スペースの創造
*阪神・淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション（兵庫県神戸市）
16. 長崎にコーポラティブ住宅をつくる
長崎にコーポラティブ住宅をつくる会（長崎県長崎市）

*は、継続助成2年目です。

■審査講評

1. 総評

選考委員会委員長 渡辺 俊一

今年度は、昨年度の123件を下回ったものの、北海道から鹿児島まで全国34都道府県から110件という多数の応募があった。活動の型でみると（重複あり）住環境24%、施設23%、探検・点検13%、自然12%、住まいづくり10%など、各分野をまんべんなくカバーしていたと言える。

申請団体の設立時期は、2001年と2000年を合わせると50%（昨年度52%）であったのに対して、1996年以前のものが18%（昨年度18%）も占めていた。また「立ち上がり期」の45%に対して「発展・飛躍期」の48%と（昨年度は各々、37%と56%）、活動状況の「若い」ものが相対的に多くなった。なお、過去の応募は「有り」が32%（昨年度30%）であった。

「地域バランス」の点では、結果的には、東京都と滋賀県・大阪府・兵庫県でほぼ半数を占めることとなったが、われわれとしては、思いもかけない地方の一隅でがんばっている団体からの応募をもっと欲しかった。

今回の審査も、ほぼ例年どおり、各審査委員による予備審査（ほぼ終日を費やした）をおこない、全員が推薦したものを一覧表にして本審査を厳正かつ公平に行った。まず多数の推薦を得たものについて個々に確認的に検討し、ついでごく少数の推薦を得たものの中から特に拾い上げるものについて議論し、最後にボーダーラインについては特に時間をかけて慎重に審議し、結果的に16件（昨年度18件）に総額1,000万円の助成を決めた。

全般的に、申請内容のレベルは高く、今回惜しくも選に漏れたものの中にも、優れたものが多数存在した。これからも着実な活動を継続し、社会的に有意義な企画をもって、来年ふたたび応募していただくことをお願いしたい。ただし、高レベルであるということは、特に特徴のない「○○町で全般的にまちをよくする」程度の企画では、勝ち抜くのが難しいことを意味する。具体的に目的をしづらり、助成の効果が明確にイメージできるような企画を期待したい。

じつは、今回の審査に先立ち、事務局から面白い一つの提案がだされた。今年7月の本財団設立10周年を機に「支援専門家ネットワーク」（仮称）の事業として、今回の助成金総額1,000万円の別枠として（200万円程度）専門家派遣等を試行したい、との申し出であった。われわれは、これを快諾した。

われわれの理解によれば、一般に、助成の資源形態としては、技術情報・事務機能・資金・専門家の4種類があるが、上記の試行は「専門家」の提供にあたり、特に住まいとコミュニティづくりの領域では、その効果は極めて大きいと思うからである。その詳細は今後の検討にゆだねられるが、本財団が単なる資金提供団体に終わることなく、市民まちづくり領域における真の技術・情報センターとなるために、今後この方面的「助成技術」の開発・充実を大いに期待してゆきたいと考える。

2. 助成対象者の概要と評価

（「概要」は事務局が「評価」は各選考委員が執筆しています。）

（1）当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして

当別町農村都市交流研究会（北海道当別町）

＜概要＞

里山の自然を活かしたコミュニティづくりをめざし、田園型コーポラティブ住宅づくりの試みを進めてきた団体。今年度は、活動を本格的に展開し、ワークショップなどを実施しながら地域への定着を図るとともに、里山環境を保全・活用した、都市近郊農村における地域共生型の開発モデルをつくっていく。

＜評価＞

都心の超高層マンションに入気が集まる一方で、自然豊かな田園地帯における環境との共生やゆとりのある生活を志向する人達もいる。このような家族にとって大変魅力的なこの田園型コーポラティブ住宅の試みは、今年度、当別町と連携した優良田園住宅地区の基本計画づくり、里山活用の現地ワークショップの開催などに発展し、都市と農村との共生にむけた本格的な展開が期待できる。（春川真一）

（2）地域体験学習センター「堤町まちかど博物館」

建築と子供たちネットワーク仙台（宮城県仙台市）

＜概要＞

これまで住環境学習を通して子供たちの創造性を育むための活動を数多く行ってきている団体。昨年は仙台に唯一残る登り窯とその作業場を活用した堤焼・堤人形の展示やワークショップを行い、多くの反響があった。今年はその登り窯と隣接する仙台藩番所の御仲下改所（おすあいどころ）跡地、崩れかけている松根窯とその旧作業場を合わせて地域体験学習センターとして整備し、子供たちをはじめ市民に堤町の歴史と文化に触れてもらいうながら、よりよい住環境を考えてもらう場として発展活用させていくこうとする活動を行う。

＜評価＞

小学校の総合学習へのまちづくり学習の導入に対して期待が高まっており、特にこのネットワークの開発してきたプログラムは全国の先進であり、その波及効果には目覚ましいものがある。今年度はさらに地域体験学習センターとしてプログラムを施設化し、恒常化する提案であり、着実にパワフルに実績を積み重ねているこの団体の今回の活動に大いに期待したい。（藤田忍）

（3）グループホーム設立のための路上生活者実態調査活動

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会（東京都台東区・墨田区）

＜概要＞

東京の山谷地区で、路上生活者の自立支援活動を行っている団体。今回、地域の路上生活者等、生活困窮者のために、就労支援型、精神保険福祉型、終の棲家型等の各種グループホームを集中的に設立するのに先立ち、その効果的なサービスプログラムの作成に向けた、路上生活者への訪問聞き取り調査を行う。作成したプログラムは設立された施設に随時導入し、その結果は調査活動にフィードバックされる。

<評価>

当助成事業の第3,4回の助成対象者である。その後も着々と実績を上げてきていて、現在地域内に3棟の路上生活者の自立支援施設を設立、運営している。山谷に集中している路上生活者の自立支援が山谷地域の活性化につながるとの視点とその行動は、内外の高い評価をうけている。自ら運営する現場からのフィードバックを行いながらの調査であるだけに、その効果に大きな期待が持てる。(野津敏紀)

(4)『共生の暮らし』を目指すNPO相互の連携の場づくり

松陰コモンズ（東京都世田谷区）

<概要>

世田谷区の松陰神社駅前近くの江戸時代より受け継がれた古民家を、現代の新しい暮らし方であるコレクティブハウスとして実践活用し、同時にその中のコモンスペースの1部をNPO相互の連携の場、地域活動の拠点となるサロンとして開放して地域コミュニティの活性化を図る。

<評価>

ストック活用が21世紀のまちづくりNPOの主流をなす活動の一つであり、その際、篤志家の地主はまちづくりのキーパーソンである。古民家の再生をコレクティブ住宅に結びつける、すなわち歴史財を現代の生活の資源として活かすセンスのよさが光っている。サポーターも有力でありたのもしい。(藤田忍)

(5) 東日暮里での多世代・賃貸型コレクティブハウスの実現

特定非営利活動法人 コレクティブハウジング社（東京都荒川区）

<概要>

都心第一号となる多世代・賃貸型コレクティブハウス「かんかん森コレクティブハウス」の実現、運営、支援を目的とする活動。昨年は、同グループの支援のもと居住者が主体となってハウスの設計や暮らし方ワークショップを行ってきた。本年は2003年3月竣工に向けて、ひきつづき運営のためのシステム作りや居住者組合の設立を行うとともに、コレクティブハウジングのNPO事業モデル研究を進め、普及につとめる。

<評価>

都心ではじめての多世代・賃貸型の「かんかん森コレクティブハウス」が来年3月の完成をめざしてすんでいる。特に今年は居住者組合の設立など入居直前の重要な時期であり課題は多く、関係する皆さんのご苦労は大変だろうと推察できる。しかし、この成果が現在の少子高齢社会のなかで、コレクティブ居住が住まい方の現実的な選択肢のひとつとなる大きなインパクトとなることを期待する。(廣兼周一)

(6) 佐渡島における空き民家の維持・活用に関する調査

佐渡住環境研究会（新潟県両津市・佐渡郡）

<概要>

佐渡島の風土に根ざした暮らしのあり方を求め、伝統と未来を見据えながら住環境や集落景観の保全と創造を目指している団体。島外に居住する佐渡出身者へのアンケートやヒアリング調査を行い、島内に約1700軒ある空き民家の実態を明らかにして、社会的資源となり得る空家の維持管理の方策や活用の方法についての提言を行う。

<評価>

過疎地域における空き民家の増加は、今後ますます大きな問題になると思われる。特に持ち主が東京など遠隔地に在住の場合、防災上、また環境保全上、何とかしたくても、周りの者は手を束ねている他ないという状況を変えるため、持ち主の事情や意向を調査し、活用の方策を探ろうというのは、現実的で意義のある試み。過疎地の風土に根ざした景観を守るという観点からも、他地域へ応用できるような成果をあげてもらいたい。(井口百合香)

(7) 市民の手作りによる町屋小路 600m の黒塀建設と灯の祭

チーム黒塀プロジェクト（新潟県村上市）

<概要>

新潟県村上市には城下町の歴史的建造物が多く集まっているものの、その魅力が充分には生かされていない「町屋小路」がある。住人の意志で結成された当団体がこの小路に市民から寄付金を募り市民の手作りの黒塀を建設し、昔ながらの黒塀の小路に変身させる。さらに秋には竹3千本に火を灯す夜の「竹灯（あかり）のまつり」を行って、住人の地域への愛着を高めながら魅力ある町づくりと地域の活性化を図る。

<評価>

歴史ある町の景観を市民自ら黒塀を手作りで変身させ、魅力ある町にしていくという意欲ある企画。今年の秋にはその黒塀の立ちならんだ小路で竹を使った夜の灯りの祭りを行う。具体的でかつ楽しい企画を応援したい。(廣兼周一)

(8) 街並み、コミュニティーを壊さない駐車スペースづくり

やつお街並み研究会（富山県八尾町）

<概要>

富山県八尾町で「おわら風の盆」の舞台としての町並みと生きた街としてのコミュニティの共存方法を議論・提案するために設立された団体。間口の狭い町屋型住宅につきものの駐車スペース問題に対して、町並み崩壊の歯止め策のひとつになるような解決提案づくりを行おうとしている。具体的な活動としては、駐車スペースの現状の調査、町並みを壊さない駐車スペースづくりについての町民会議とパンフレット・提案書作成、既存空地駐車場に仮設塀をつくるワークショップが挙げられる。

<評価>

いずれの地域の歴史的町並み保全にとって、自動車をどうするかはキーポイントである。それを「駐車場」問題から建築的に解決するという1つの鍵を提出することに注目したい。実現すれば、「おわら風の盆」の町八尾の景観を保全するだけではなく、コミュニティの活性化にとっても、また全国のこのまちを愛する人々に対しても好影響をあたえるだろう。他の歴史的町並みをもつ地域への影響も大きい。昨年も応募しており、また学術研究チームのサポートもあり、実行性を信頼できる。(中島明子)

(9) エコハウス建設を通した新世紀の住まいと環境の提案

富士エコハウスプロジェクト（山梨県上九一色村）

<概要>

土と藁によるエコハウスの建設を通して、地球環境を考慮したこれからの住まい・環境

のつくり方・あり方を提案していくことを目的に活動している団体。今年度は、エコハウスを実際につくりながら、居住性に関わるデータを収集するとともに、活動記録の作成やその報告会などを実施していく。

<評価>

地球環境に配慮したエコハウスの考え方を広めようとするグループが、今年度、富士の上九一色村において、地元住民とも協力して実際に「土と藁」を用いた住宅を建設する。このプロジェクトでは、一般公募の参加者との共同作業、ワークショップ、居住性等のデータ収集、活動報告会など意欲的な活動が計画されており、これによりエコハウスに対する関心を高めることができる。（春川真一）

(10) OLD & NEW 辻長蔵と憩の場の整備と活用

とよさとまちづくり委員会（滋賀県豊郷町）

<概要>

30代前後の若い世代が中心となって、まちの再発見、活性化を図る活動を行っている。地域の中に昔の面影が残る建物や街並みが点在しており、その中で取り壊しが予定されていた蔵を地域の交流拠点として整備し、地元野菜の販売や、リサイクルの拠点、多世代が交流するコミュニティースペースとして活用する。

<評価>

団体の中心になっているメンバーは20～30代が多い。この地域は若い世代が活躍できる場が少なく、まちに対する帰属意識も希薄で、街に元気がなくなったと感じた当の若者自身が問題意識をもって行動しているのが魅力的だ。今回はひとつの蔵の活用だが、地区内には、他にも歴史的建物が点在していることもあり、これをきっかけとした豊郷らしいまちづくりが進むことを期待したい。（野津敏紀）

(11) 紫香楽・野焼きでいえをつくろう

「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会（滋賀県信楽町）

<概要>

地域の伝統的な信楽焼きの技術で「いえ」をつくる。地区内に毎年一軒ずつ増やしながら、やきものを活かした新しい住空間の提案、住民が誇れるふるさとの原風景の創出を目的とする。今回は完成までの全行程を地域住民が参加するワークショップとして行い、最後の焼き上げイベントを「火祭り」として秋に開催し、地域住民と全国からの参加者の交流を実現し、地域の活性化につなげる。

<評価>

信楽焼きで家をつくろうという発想がユニークである。中心になっているのはNPO法人信楽陶器研究会という信楽焼きのいわば専門家であり、その持てる知識と技術をもって、地域住民の参加を図りながら、地域づくり、コミュニティづくりのしきけを行っている点が評価できる。最後の焼き上げをイベントとして行い、その完成された家を地域内に風景として残すことは、地域へ与えるインパクトとその効果は大きいと思われる。（野津敏紀）

(12) 「ウォーリズ建築を活かしたコミュニティづくり」情報発信事業

特定非営利活動法人 ウォーリズ建築保存再生運動一粒の会（滋賀県近江八幡市）

<概要>

ウォーリズが建築を通して社会に訴えてきたことを後世に伝えるために、ウォーリズ建築の保存・再生に関わる活動を展開している団体。対象の活動では、機関紙や冊子、ホームページなどを立体的に活用しながら、全国のウォーリズ・ファンを中心としたネットワークを構築し、歴史的建造物の保存・再生やコミュニティの育成のための情報交流を行う。

<評価>

第7回の対象団体。3年前の活動は旧八幡郵便局の再生活動の初動段階であったが、その後さらに整備を進め、美術展やコンサートなどを開催しながら地域のコミュニティ拠点として活用したり、県内のウォーリズ建築の現状調査などを実施したり、着実に実績を重ねてきたようだ。ウォーリズの精神を広く全国に発信しながら、これからコミュニティのあり方を提言していってほしい。（野津敏紀）

(13) 野宿経験のある生活保護受給者のコミュニティの育成

釜ヶ崎居住COM（大阪府大阪市）

<概要>

当団体は釜ヶ崎の住民、諸団体に呼びかけ、まちの再生についての意見交流、勉強会の場を設けているが、その中から提案された高齢野宿生活者の住居確保の為の簡易宿泊所のアパート化（サポートタイプハウス）が数棟実現している。今年度はそれらの入居者のニーズにあった支援体制をつくるため、聞き取り調査や、また、昨年の11月より始めた地域通貨の定着化、ボランティアセンター設立等の活動を行う。

<評価>

サポートタイプハウスという秀逸なアイデアは、簡易宿泊所オーナー達の支持を得て急速に広がりを見せつつある。これにより、数百人の野宿者が住所を得て、生活保護を獲得する中で、さらに自立し、支地域通貨の担い手となるなど支え合うまちづくり運動が芽生えつつある。福祉、医療等の専門家や自立支援、識字等のボランティアなどの多角的な支援が総合的なまちづくりとして結実しつつあり、大阪そして全国のまちづくりをさまざまな意味でリードする可能性を持っている。（藤田忍）

(14) 淡路から全国へ向けてオープンガーデンネットワーク

特定非営利活動法人 アルファグリーンネット（兵庫県北淡町）

<概要>

花と緑のまちづくり活動の展開を通して、人と自然が共生するコミュニティの育成を図ることを目的に活動している団体。今年度は、県内で「オープン・ガーデン」に取り組む人たちのネットワークを再構築するとともに、全国的なイベントを開催しながら、ひとりひとりの市民が庭づくりからまちづくりへ踏み出すきっかけづくりを行っていく。

<評価>

近頃のオープンガーデンの全国的な広がりを見ていると、戦後からこれまで忘れていた「1軒1軒の家が、まちの景観を形作っている」という意識を、日本人がようやく取り戻しかけているのかという感をいだく。庭を美しくし、人に見てもらって喜びを共有する動き

が、まちに、もっと広域に、そして全国に広がることが、自然と共生する美しいまちづくりにつながることを願う。(井口百合香)

(15) 復興まちづくりから生まれるコミュニティスペースの創造

阪神淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション（兵庫県神戸市）

<概要>

当団体は、阪神淡路大震災により殆どの建物が消失した神戸市長田区御蔵地区に於いて、震災復興支援をまちづくり協議会への支援活動を中心に行ってきた。この度、被災地域コミュニティプラザ設置補助を受けて自治会館（仮称）が建設される運びとなった。そこで、まちづくり協議会と自治会が中心となり、専門家等も交えたワークショップを実施し、より親しみが沸き、気楽に立ち寄れる「団らんの場」としての施設を提案する。

<評価>

震災復興が進み神戸の町は以前にも増して整然と美しくなりつつある。一方で、かつての町に培われていた人と人とのつながり、交流が同じように再生されたかどうかは評価の分かれるところである。この企画は、区画整理地域において、新しくなる街並みとその中に建つ新しい公民館を軸に、そこに住まう人々のつながりを再生しようとする試みであり、震災復興はもとより、全国のまちづくりにおいて忘れられがちな”人と人”の関係構築を目指す、地道でしかし重要な活動として助成の対象とすることとしたものである。

(橋本公博)

(16) 長崎にコーポラティブ住宅をつくる

長崎にコーポラティブ住宅をつくる会（長崎県長崎市）

<概要>

斜面地や狭隘な道路、老朽木造住宅の密集など、住環境上さまざまな困難を抱える長崎において、入居者参加型のコーポラティブ住宅の建設を通して、住まいとコミュニティづくりを融合した新しいまちづくりを広く市民に提起することを目的に活動している団体。今年度は、年度末の竣工をめざし建設計画を作成するとともに、シンポジウムの開催などを実施していく。

<評価>

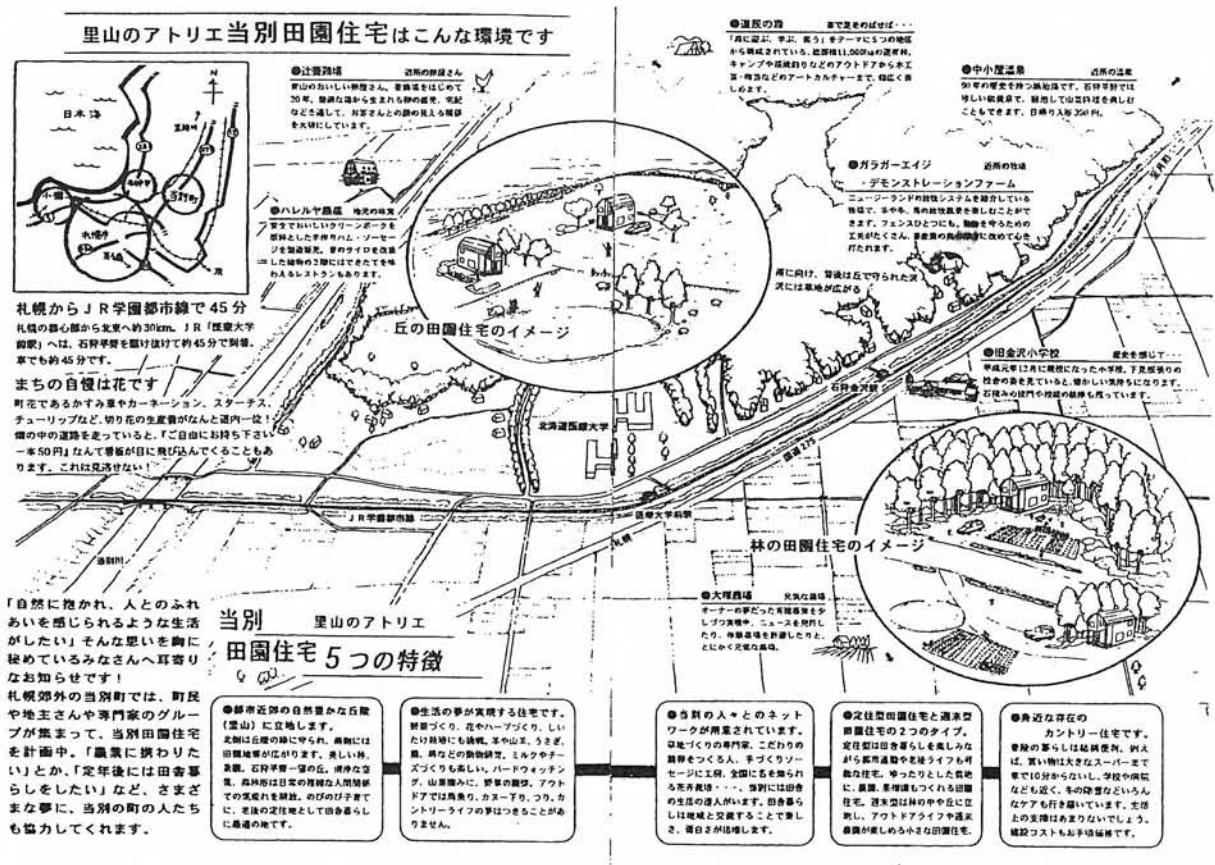
地域の再生の非常に困難な条件にある長崎で、自らのコーポラティブ住宅を建設するだけではなく、老朽木造密集市街地の改善の一つの解につなげようとしている点で、非常に期待される。地域再生がともすれば住民不在の「再生」になることもあるが、ここでは住まいづくりとコミュニティ形成の融合を目指しており、必然的にコーポラティブ方式となった。所有形態により参加する居住者は変わってくると思うが、住まいづくりの原則をも示している。(中島明子)

■助成対象団体連絡先一覧

1	2003年3月現在
団体名	当別町農村都市交流研究会
代表者名	小谷栄二
連絡者名	柳田良造、辻野浩
連絡先住所	〒061-0212 北海道石狩郡当別町末広380番地
電話番号	01332-3-2408
E-mail	FAX番号 01332-3-3591 tobe-tgs@mvb.biglobe.ne.jp、ryozo@jade.dti.ne.jp
ホームページ	http://www.aaapc.co.jp/

• PR

1998年4月に、当別町における里山の自然を生かした豊たかで魅力的コミュニティづくりをめざして、当別町農村都市交流研究会が有機農家や地域リーダーにより結成され、田園型コーポラティブ住宅づくりの試みを進めてきた。この里山の田園住宅は、今年夏には5軒の入居者（現在3軒完成済み）のパイロットプロジェクトが完成する。また同時に地域でのバイオガスによる自然エネルギー実験や草地牛乳の生産等の、環境共生型の里山活用の取り組みも開始されている。今後は行政による優良田園住宅の地域指定に合わせ、全国的にみてもほとんど例のない農村部での田園型コーポラティブ住宅づくりの本格的な展開と地域への定着、ならびに里山環境の保全活用により、都市近郊農村の地域共生型開発のモデルをつくりあげることをめざしたい。



2	2003年4月現在		
団体名	建築と子供たちネットワーク仙台		
代表者名	渋谷セツコ		
連絡者名	渋谷セツコ		
連絡先住所	〒982-0212 宮城県仙台市太白区富沢4丁目12-22株式会社建築事務所アク・アク内	FAX番号	022-244-0104
電話番号		E-mail	
ホームページ	http://www.tbgu.ac.jp/ept/ac.htm		

・PR

1993年に設立されたNPO「建築と子供たちネットワーク仙台」は建築や都市のデザインプロセスを用いて創造的な学習を支援するためのボランティアネットワークグループで、仙台市を中心とする宮城県内で活動を続けています。メンバーには建築家やデザイナー、公務員、小中高校大学の先生、そして学生など現在約50名が登録しています。活動には誰でも参加することができますし、忙しくてなかなか活動に参加できない方にも活動の様子を「ネットワーク通信」でお知らせしています。

建築と子供たちネットワーク仙台によって行われるワークショップではデザインのプロセスを大切に考えています。手を使いながら考えることを通して問題解決する力や創造力、やる気が子供たちの心に溢れることを願っています。ワークショップはアメリカで開発された総合学習のための二つのプログラム「Architecture & Children（邦訳：建築と子供たち）」と「City Building Education」を参考にしながら独自に開発したプログラムで行っています。プログラムは、建築や都市のデザインプロセスを用いて住環境教育や総合的な学習ができるよう、それぞれの地域や学校に合わせてひとつひとつカスタムメイドで組み立て、実践しています。

これまでに一般市民向けのワークショップやシンポジウム、学校と協力した環境学習授業、仙台市科学館での企画展示、国際シンポジウムの開催など、住環境学習を通して子供たちの創造性を育むための活動を多く実践してきました。こうした実践活動を続けている中で、最近では環境教育に関心を持ついくつかの小学校から「総合的な学習の時間」で地域の住環境学習に取り組みたいので協力して欲しいという要請が多く来るようになり、4月の授業計画段階から参画して1年間一緒に授業を作っていく機会が増えてきています。「総合的な学習の時間」の本格的実施や、地域における生涯学習の時代を向かえ、今後は学校ごとの実践だけではなく、多くの学校関係者や市民に住環境教育に対する理解と関心を高めてもらい、地域や学校教育の場で子供たちや先生が楽しめるような長期的なカリキュラムの開発を支援し、さらには子どもたちの国際的な理解、様々な地域の人たちとの交流を広げていくことを目指していきます。

3	2003年3月現在		
団体名	特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会		
代表者名	水田 恵		
連絡者名	的場 由木		
住所	〒111-0022 東京都台東区清川1-23-5 鈴木ビル301		
電話番号	03-3876-8150	FAX番号	03-3876-7950
E-mail	hurusato@d5.dion.ne.jp		
ホームページ	http://www.d5.dion.ne.jp/~hurusato/		

・ P R

特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会では、路上生活者の自立支援を行うことを目的として、宿泊所事業、地域支援事業、就労支援事業を行っています。

宿泊所事業

宿泊所事業では、地域での居宅生活へ移行できるように支援をしています。

1. ふるさと千束館：単身男性(21名)通過施設
2. ふるさと日の出館：単身女性(17名)通過施設
3. ふるさとあさひ館：単身男性(15名)通過施設
要介護単身男性(10名)共同住居
4. 就労支援ホームなづな：単身男性(5名)通過施設
5. ふるさとせせらぎ館：単身男性(28名)通過施設
要介護単身男性(10名)共同住居



地域支援事業

1. リビングプログラム

このプログラムでは、共同のリビングスペースの開放・食事の提供・金銭管理・安否確認などを行っています。 利用日：月・火・木・金

2. 住宅契約時の保証人の引き受け

家族のいない方を対象に、アパートの保証人(法人として)を引き受けています。

3. 敬老室

東京都城北福祉センター(山谷の日雇労働者を対象とした福祉センター)分室「敬老室」の運営の委託を受けて行っています。

就労支援事業

1. 就労支援プログラム

このプログラムでは、ふるさとの会が運営する宿泊所の営繕清掃・調理補助や敬老室の受付・清掃、その他イベントの設営の仕事を提供しています。

2. ヘルパー育成プログラム

ホームヘルパー取得への支援、取得後のフォローなどを行っています。

3. 路上生活者自立支援センター墨田寮

東京都の路上生活者自立支援センター(就労活動を支援する入所施設)墨田寮の生活相談業務の委託を受けています。

団体名	松陰コモンズ		
代表者名	新居 誠之		
連絡者名	木村 ひろ子		
連絡先住所	〒162-0822 千代田区飯田橋4-5-14 サンポーロハイツ93（株）シグマ設計事務所		
電話番号	03-3234-7937	FAX番号	03-3234-7938
E-mail	siguma@sepia.ocn.ne.jp		
ホームページ	http://www.egroups.co.jp/group/shouinjinjya		

・ P R

平成14年4月より本格的に始動した「松陰コモンズ」は1年間の活動を行ってきた。

世田谷の中心に残る古民家を地主さんの好意により再生・活用し、集まって住む事により現代の「コレクティブライフ」の実践を行う。そのコモンスペースを開放し、NPO等や地域の人々の活動の場として利用し、コミュニティの形成を図るとの初期の目的が達成できた。

暮らしに係わるワークショップをはじめとする各種のイベントを通じネットワークが広がり、ユニークな活動としてマスコミに取り上げられる事も多く、広く注目されている。

当初の目標が達成できたと自負するところであるが、他に無い試みであり、住まいながら、活動しながら決める事も多く、関係者のサポートが今後も必要である。

今後継続してこの活動に携わり経験を蓄積し、生かしながら似たようなケースで役に立てる事ができるはずであり、また積極的に活動を広めたいと考えている。

5	2003年4月現在		
団体名	特定非営利活動法人 コレクティブハウジング社		
代表者名	理事長 小谷部 育子		
連絡者名	本田 貴士		
連絡先住所	〒171-0022 東京都豊島区南池袋1丁目3番3-401号		
電話番号	03-5911-6971	FAX番号	03-5911-3919
E-mail	info@chc.or.jp		
ホームページ	http://www.chc.or.jp/		

・ P R

人間は一人では生きていけない。しかし、他人との関係を維持し続けるのはわざらわしい。

特定非営利活動法人コレクティブハウジング社（CHC）は、個人のプライバシーを確保した上での緩やかな人と人との関係性、新しいコミュニティーが実現できたらいいと考えて、生活の一部を共同化したり、空間や設備を共有化することによって、個人や小さな家族だけでは充足できない、合理的で、便利で、楽しみと安心感のある自分らしい暮らしができるだろうと考えて、そのための一つの居住形態として、コレクティブハウジングの実現を目指しているNPOです。

ハウジングには供給側（ディベロッパー）と需要側（居住者）とがありますが、消費者としての居住者ではなく、ハウジングの過程での主役となり自らの住まい方をプランする当事者であるべきと考えるCHCは、常に居住者の側に立っています。

プライバシーが確保され、同時にコミュニティーのある、時間、空間、設備を共有する合理的な、自立した生活をプランします。

住まいの主役は居住者であるあなたです。

これは面白そう、楽しそうと感じられたら、<http://www.chc.or.jp/apply/> アクセスして CHC の活動に参加してください。

6	2003年4月現在		
団体名	佐渡住環境研究会		
代表者名	光井 高明		
連絡者名	十文字 修		
連絡先住所	〒952-1202 新潟県佐渡郡金井町吉井本郷848		
電話番号	0259-63-3227	FAX番号	0259-63-3227
E-mail	jumonji@crocus.ocn.ne.jp		
ホームページ			
・ P R			
<p>佐渡で空き家について調査をしたり、活用策をいろいろ試しています。 なによりも住む人あっての家。海あり山あり棚田あり、伝統芸能たって 豊かなこの島で暮らしたい方、中長期滞在希望の方、相談にのります。 その他、里山活用の一環として薪づくりと高齢者世帯への配布など。</p>			

7	2003年4月現在		
団体名	チーム黒塀プロジェクト		
代表者名	山貝 博		
連絡者名	吉川 真嗣（きっかわしんじ）		
連絡先住所	〒958-0842 新潟県村上市大町1-20		
電話番号	0254-53-2213	FAX番号	0254-52-7436
E-mail			
ホームページ			
・ P R			
<p><黒塀プロジェクト> 村上には歴史的建造物が多く集まる小路（安善小路と周辺）があります。村の中でも城下町の風情漂う場所ですがやはり充分には生かされていませんでした。風情ある黒塀（黒板塀）もある一方、現代的ブロック塀が多く占める半端な状態がありました。しかしここは可能性を秘めた場所で少し手を加えることによって小路の景観が見違えるほど変わるはずだと思いました。黒塀に変えることでここが地元の人にとっても風情ある安らぎの場所になり、この小路が歴史的建造物が集まる「黒塀通り」として名物スポットとなり今まで以上に旅の人が立ち寄る場所になるのです。商店街の活性化にもつながり、さらに村上の発展のための力となります。この夢を実現するために行なう黒塀化計画「黒塀一枚1000円運動」とこの黒塀の小路で竹の灯籠を使った灯りのまつり「むらかみ宵の竹灯籠まつり」の2本柱が「黒塀プロジェクト」です。</p>			

団体名	やつお街並み研究会		
代表者名	山下 隆司		
連絡者名	阿部 智樹		
連絡先住所	〒103-0023 東京都中央区日本橋本町4-6-1久木田本町ビル5F (タステン一級建築士事務所内)		
電話番号	03-3548-2607	FAX番号	03-3548-2608
E-mail	cdl29650@par.odn.ne.jp		
ホームページ			

・ P R

1年に3日間、町が一変する祭り「おわら 風の盆」で有名な八尾町。その舞台としての街並みと、生きた町としてのコミュニティーの共存の方法を議論、提案するためにやつお街並み研究会は設立されました。参加メンバーは、「坂のまちアート」(八尾で開催されるイベント)の出展作家である東京在住の建築家と、八尾町でまちづくりに取り組む地元の関係者が中心となって、2000年にスタートしましたが、昨年から、都市や街の歴史的研究を行っている法政大学陣内秀信研究室がグループに参加し、多様なメンバー構成になっています。

グループ設立から最初の課題として取り組んだのは、車、駐車場の問題です。間口の狭い密集した町家型集落では、駐車スペースの設け方や道のあり方など車との関係を間違うと美しい街並みの連續が失われてしまったり、コミュニティの崩壊にも繋がります。そのため町と車の理想的な関係を検討し、まちづくりの方向性を模索しました。また、八尾をより深く理解するために、街の成り立ち(旧町)や町家の調査など学術的研究も行っています。

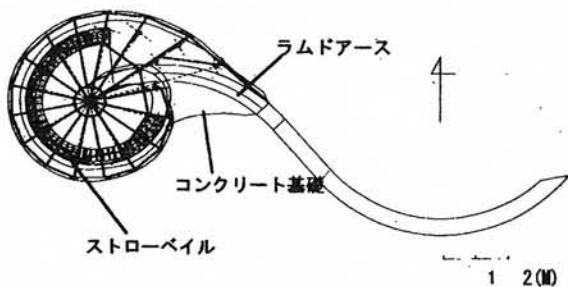
もし、私達の活動や八尾の町に興味をお持ちでしたら、気兼ねなく連絡ください。いろいろな方と情報交換をしたいと考えています。

9	2003年5月現在		
団体名	富士エコハウスプロジェクト		
代表者名	遠野 未来		
連絡者名	遠野 未来		
連絡先住所	〒101-0053 東京都千代田区神田美土代町7 クボビル7F		
電話番号	03-3294-0319	FAX番号	03-3294-0319
E-mail	nest@tonomirai.com		
ホームページ	http://www.brs.nihon-u.ac.jp/~areds/		

・ P R

ストローベイル・ハウスという藁の家をご存知ですか？

ストローベイルというブロック状にした藁を積んで壁をつくり、そこに土や漆喰を塗って仕上げます。自然素材である藁と土を用い、藁の断熱性と土壁の蓄熱性を兼ね備えたこの家は、環境と共生しながらその地域の素材を使い、自分達の手で家をつくれる究極のエコハウスとして、海外で非常に注目されています。単なる家づくりにとどまらず、家を全国の自分の手でつくりたい人たちや地域の人たちと一緒につくることによって「交流の場」、「環境を考えたコミュニティの場」もつくるという一つの社会運動にもなっています。私たちは現在藤沢市にある日本大学湘南キャンパス郊外に、今年夏の完成を目指して日本での普及のため、自分達の手でデータを取りながらストローベイルの実験施設を建設中です。ここを拠点に日本の自然素材による家づくりのネットワークをつくって行きたいと思います。ご興味があります方はどなたでも見学、建設にご参加できます。皆様お気軽にご連絡ください。



アトムハウス平面図(職能大藤野研究室作成)



アトムハウス南面



平成 15 年 3 月 2 日第一期打上げ式

団体名	とよさとまちづくり委員会		
代表者名	北川 稔彦		
連絡者名			
連絡先住所	〒529-1169 滋賀県犬上郡豊郷町石畠375 豊郷町役場チーム夢プラン内		
電話番号	0749-35-8113	FAX番号	0749-35-4575
E-mail	yumeplan@town.toyosato.shiga.jp		
ホームページ			

・ P R

とよさとまちづくり委員会 OLD&NEW

蔵のあるまちを残したい～ 地域の憩い場への再生

豊郷町は、滋賀県で一番小さなまち。田園が広がる町です。

少子高齢化、若者の流出が進む中、20代30代を中心としたメンバーが考えるこれからの町のありかた。

一生を過ごす町だから自分たちの手で何かしよう！

空き蔵と出会い活動の拠点として活用。もっと楽しいことができるはず。もっと多くの人に利用してもらいたい。

この町小さな町にある空き家や空き蔵を使って、みんなが楽しめることができたらいいなあ。

100年前に建てられた蔵で、みんなで考え、時間と労力を費やし、町のことを話しあう。

みんなと共有する時間を通して気づく。こんなに魅力があったんだ町の新たな発見ができた。

今、町にあるものを新たな憩いの場へと再生させ、地域の交流の場として活用します。

そして、地域に住んでいるみなさんにこの町の魅力を実感してもらい、地域への愛着を深めていきたい。

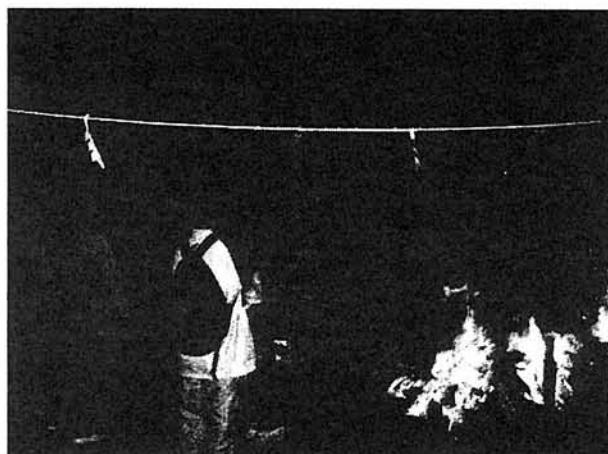
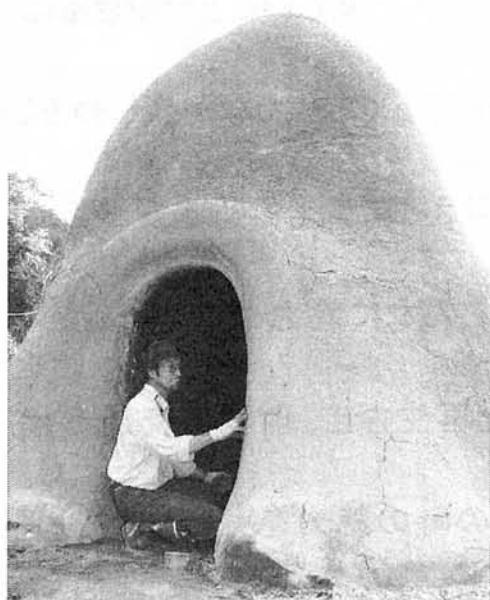
団体名	「紫香楽・野焼きでいえをつくろう」の会		
代表者名	西尾 矩昌		
連絡者名	西尾 矩昌		
連絡先住所	〒529-1851 滋賀県甲賀郡信楽町長野869		
電話番号	0748-82-8160	FAX番号	0748-82-8160
E-mail	nishioart@ms.0038.net		
ホームページ	http://www.geocities.co.jp/SilkRoad-Oasis/1230/		

・ P R

しがらき
信楽は、全国にその名が知られるやきものの町であると同時に、かつて「紫香楽」という風雅な文字がつかわれた都があった歴史のまちとしても知られています。

この歴史あるやきものの里、紫香楽で、粘土をこね、やきもののように「いえ」を焼いてつくることにチャレンジします。そして、こうしたやきもののいえを毎年少しづつ増やしながら、未来の子供たちが誇れるふるさとの原風景を育んでいきたいと思っています。

皆さんも、太古の人々も感じた、やきものの生まれる時の感動を味わってみませんか。
このプロジェクトに賛同し、応援して下さる会員を募集しています！



団体名	特定非営利活動法人 ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会		
代表者名	会長 石井 和浩		
連絡者名	会長 石井 和浩		
連絡先住所	〒523-0064 滋賀県近江八幡市仲屋町中8番地		
電話番号	0748-33-6521	FAX番号	0748-33-6521
E-mail	hitotubu@ex.biwa.ne.jp		
ホームページ	http://www.ex.biwa.ne.jp/~hitotubu/		

・ P R

近江八幡には数々のヴォーリズ建築が残されていますが、それぞれ老朽化が進み、次々と取り壊されています。幸い「旧八幡郵便局舎」は、空家になっていたもののその佇まいはしっかりと残っていました。心ある持ち主にも恵まれ、平成9年10月、ヴォーリズファンの有志6名が、この旧八幡郵便局舎の清掃活動を始めました。この活動がきっかけとなり、平成10年に任意団体「旧八幡郵便局舎保存再生運動一粒の会」が発足し、平成12年5月『特定非営利活動法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会』が誕生したのです。

私たち『一粒の会』は、近江八幡市の名誉市民第1号ウィリアム・メレル・ヴォーリズが、市民はもとより広く全国に建築を通して語りかけるものを後世に伝えるため、朽ちかけつつあるヴォーリズ建築の保存再生運動を通じ、人にやさしい建築のあり方など、歴史を活かしたコミュニティ育成などのまちづくりに寄与することを目的としています。まずはこの旧郵便局舎を甦らせることが目標です。この活動によって“人と人が出会い、集い、語り合い、苦しいことも楽しいことも分かち合い、人々が元気になっていく場となれば…。このまち全体が元気になっていけばいいなあ”と思います。そして、ヴォーリズをはじめ先人が残してくれた建物やまち、精神をこれから生まれてくる子供たちと一緒に大切にしていきたいと考えています。

13	2003年3月現在
団体名	釜ヶ崎居住COM
代表者名	星野 智
連絡者名	ありむら潜
連絡先住所	〒557-0002 大阪市西成区太子2-2-16 釜ヶ崎EGGs (釜ヶ崎まちづくり合同事務所)
電話番号	06-6635-2699 (事務所) 090-8448-0315 (ありむら)
E-mail	kama-yan@sun-inet.or.jp
ホームページ	http://www.kamagasaki-forum.com

・ P R

野宿者支援とまちづくりを結合させたユニークな取組みを市民の力で展開中！

釜ヶ崎地域は大阪市西成区にあり、約2万人の単身日雇い労働者が集まる労働者コミュニティです。しかし、近年の経済不振と労働者たち自身の高齢化(平均55歳)にともなって、地域内外は数千人規模の野宿者であふれるようになりました。大阪市内全域の野宿生活者のうち、約半分は釜ヶ崎での日雇い生活経験者と見られています。

こうした状況の中で、1999年秋に、釜ヶ崎居住COMの呼びかけで「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」が結成されました。会の目的は、「釜ヶ崎地域において、フォーラムやワークショップを実施し、構成する住民層の暮らしを再建する方向でのまちづくりビジョンをさぐり、あわせて事業化を促進することです。

これまでの活動をとおして、釜ヶ崎には簡易宿泊所を部分的に改造した「サポートハウス」という新タイプの住居が9軒オープンし、どこもほぼ満室状態(総計約1,000人)になっています。「サポートハウス」では、手すりを設置するなどバリアフリー対応とし、共同リビングを備え、また従業員が居住者それぞれの身体状況や生活状況に合わせて各種相談に応じるなど、居住者の生活をささえ応援するさまざまな工夫が凝らされています。また、野宿状態からでもすぐ入居できるように、入居時の保証金も保証人も不要としています。目的は、高齢や病気などのために働けなくなった野宿生活者が、生活保護を活用して住居を獲得し、二度と野宿に戻らず、福祉的自立とおだやかな老後生活をおくれるように支援することです。

このほかにも、「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」に参加する諸団体によって、さまざまな活動が展開されています。安否確認巡回事業や介護事業、仕事づくりのこころみなどです。みんなが会議や交流目的で手軽に集まれる太子福祉館や釜ヶ崎eggs(釜ヶ崎まちづくりNPO合同事務所)も、まちづくり趣旨に賛同する簡宿経営者たちから提供されました。ささえあいづくりのために、独自に地域通貨(「カマ通貨」)を流通させるユニークな試みも行なっています。このような活動をささえ幅広い人材に集まってもらうため、2001年秋からは「釜ヶ崎ボランティア養成講座」を開講し、これまでに100人以上が受講しました。現在は、講座修了生らで構成するボランティア連絡会によって、「サポートハウス」居住者の生きがいづくりのためのさまざまなイベントや識字教室などの運営が行なわれています。そして、私たちが「野宿生活者の社会復帰を実現するモデル地区」と名づけて活動に取り組んできた地区では、「釜ヶ崎のまち再生フォーラム」のメンバーを中心に、新しい町会がつくれました。野宿生活者それぞれへの支援だけではなく、安心して暮らせる活気のあるまちづくりがいよいよ本格化していきます。

今後は、地域のボランティア団体やNPOなどとのさらなるネットワーク化(NPOアライアンス)や、地域のあらゆる人々との共生をめざした次なるまちづくりビジョン(ネクストステージビジョン)の作成に取り組んでいきます。

14	2003年4月現在		
団体名	特定非営利活動法人 アルファグリーンネット		
代表者名	理事長 淺原 正三		
連絡者名	理事長 淺原 正三		
連絡先住所	〒656-1726 兵庫県津名郡北淡町野島常盤954-2		
電話番号	0799-80-2087	FAX番号	0799-80-2101
E-mail	agn@violin.ocn.ne.jp		
ホームページ	http://www.hyogo-intercampus.ne.jp/gallery/agn/		
・PR			
1. 目的	<p>住民主体の「花と緑のまちづくり活動」を立ち上げ、活性化していくことにより、人と自然が共生し、あたたかなコミュニティが息づくまちづくり・地域づくりの推進に貢献することを目的とする。</p>		
2. 特定非営利活動の種類	<ol style="list-style-type: none"> 1) 花と緑を生かした美しいまちをつくるための公共的空間の緑化等活動 2) 行政や他の団体が進める花と緑のまちづくり活動への協力・支援活動 3) 花と緑のまちづくり推進のための普及・啓発活動 4) 花と緑のまちづくり活動の推進のための調査・研究活動 5) 花と緑のまちづくり活動に関する会報等の発行 6) その多目的を達するために必要な事業 		
3. 沿革	<ol style="list-style-type: none"> 1) 創立: 平成12年(2000年) 3月23日 2) 認証日: 平成13年(2001年) 10月 1日 3) 法人登記: 平成13年(2001年) 10月12日 4) 会員数: 399名(平成15年4月1日現在) 		

15	2003年3月現在					
団体名	阪神淡路大震災まち支援グループまち・コミュニケーション					
代表者名	宮定 章					
連絡者名	加藤洋一					
連絡先住所	〒653-0014 兵庫県神戸市長田区御蔵通5丁目5	電話番号	078-576-7961			
E-mail	m-comi@bj.wakwak.com	FAX番号				
ホームページ	http://www.bj.wakwak.com/~m-comi/index.htm					
・ P R						
<p>神戸市長田区御蔵通5・6・7丁目地区（御菅西地区）はケミカル産業、金属・機械産業を中心とした工場と、そこで働く工具のために供給された長屋住宅からなる住工混在地であった。被災前から若年層の流出による高齢化や、産業衰退の傾向がみられた典型的なインナーシティである。1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は老朽化した家屋の多くを倒壊させた。また、直後に発生した火災は同地区内を縦横無尽に駆け巡り、地区面積の8割を全焼に至らしめた。</p> <p>地区からの避難、その後の復興過程の中で元の住民が離散した状況は、従来の技術論で語られる都市計画には“死にゆくまち”を救うことが出来ないことを明らかにした。震災直後に全国から集まったボランティアの多くは、避難所の閉鎖とともに活動に見切りをつけ、自分のもといた場所に戻っていった。しかしながら、「地域住民が戻らなくしてまちの復興ない」と考えた2名の震災ボランティア、および御蔵通5・6丁目町づくり協議会の相談役を母体として、当グループ「まち・コミュニケーション」が設立された。</p> <p>まち・コミュニケーションは震災復興過程での経験と反省を活かし、御蔵地区の復興を支援し、ヒューマンスケールのまちづくりを全国に発信・提唱することを目的としている。専門家・学識者等からなる運営委員会と、学生ボランティア等、若者を主体とするスタッフの連携によって震災以降8年間活動を継続している。まちには若者の柔軟な考え方やエネルギーが供給され、若者にはまちの人によって活躍の場が与えられる。このような関係とハード整備に偏らない地道な活動が認められ、今年1月には「第7回防災まちづくり大賞総務大臣賞」の栄誉を受けることができた。</p> <p>以降も、まちの住民ではない「よそ者・若者」がまちにどこまでかかわれるかをひとつのテーマとして、活動を継続していきたい。</p>						
<p><u>組織の沿革</u></p> <p>1995/2～ 震災によるがれきが野ざらしになる中、前身団体が長田区に情報瓦版「デイリーニーズ」を配布</p> <p>1996/4 阪神淡路大震災まち支援グループ「まち・コミュニケーション」設立</p> <p>1997～ 御蔵通5,6丁目町づくり協議会支援（議事・運営支援、資料の作成 etc.）</p> <p>1998～ 被災住民による共同再建住宅「みくら5」建設コーディネート</p> <p>1999/4～ 地域のコミュニティースペース「プラザ5」設立・運営支援</p> <p>2001/4～ 地域で子育てを支えあう「子供プロジェクト」開始</p> <p>2001/10～ 御蔵通5,6,7丁目集会所建設支援（調査、設計、コーディネート etc.）</p> <p>2003/1 「第7回防災まちづくり大賞総務大臣賞」受賞</p>						

団体名	長崎にコーポラティブ住宅をつくる会		
代表者名	鮫島 和夫		
連絡者名	山崎 健一		
連絡先住所	〒850-0874 長崎県長崎市魚の町3-24 チヂワビル2F 梵建築工房気付		
電話番号	095-825-9915	FAX番号	095-820-9569
E-mail	DZF13314@nifty.ne.jp		
ホームページ	http://www.co-house.jp		

・ P R

あなたもつくづみませんか。

気楽で楽しい隣近所と素敵なお住まい。

子育て仲間で助け合って住んでみたいな…

年寄りどうし支えあって健やかに過ごしたいな…

自然とふれあって暮らす環境と共にしたいな…

協働で街中に住んでみたいな…

隣近所の人との楽しい付き合いのある暮らしをしたいな…

手持ちの土地や建物を活用してみたいな…

こんな思いの人たちが集まり、長崎初のコーポラティブ住宅「コ-ハウス南山」が、いよいよ完成します。

気楽で楽しい隣近所と素敵な住まいの環境で、みんなでワクワクしながらつくづみませんか。

住まいづくり・まちづくりNPO活動報告 2002/2003
－第10回「住まいとコミュニティづくり活動助成」報告書－
2004年1月30日発行
頒布価格1,000円（消費税込み）

編集・発行：財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
〒107-0052 東京都港区赤坂1-5-11 新虎ノ門ビル5F
TEL03-3586-4869
FAX03-3586-3823
<http://www.tokyoweb.or.jp/housingandcommunity/>

